

早稲田大学心理学会記念誌
～66年をふりかえって～

はじめに

学会の会則に「早稲田大学を母体とする心理学の発展ならびに会員相互の親睦を図ることを目的とする」とあります。

学会は創設当初から、公開講演、シンポジウム、研究部会別シンポジウム、パネルディスカッションなど、これらいくつかを組み合わせることで学会が開催されてきました。学会内には計8つの研究部会なるものが自発的に作られ、それぞれ、様々なテーマで研究会が持たれてきました。

以前から学会活動に大きく寄与して下さった浅井邦二、相馬一郎、春木豊の諸先生は1987年に所沢市にある早稲田大学人間科学部に転属され、教室をまとめてこられた本明寛先生が1989年に退職されたことなど、それ以降の学会活動に影響を与えました。

2000年前後からは、年次大会は公開講演会やパネルディスカッションなどいずれか一つを企画し始めるようになりました。会員数は減る方向に転じ始め、学会予算が減少し始めたのもこの頃です。

年次大会とは別に年2回程度、専門家による「教養講座」を開催して学部生や院生、市井の人に参加を呼び掛け、HPを立ち上げて情報発信し、機関紙も早稲田大学心理学会会報からより身軽な瓦版の発行に切り替えました。大会や教養講座の折には学内に手作りの立て看板を立て、新聞の無料広告に応募し、それなりの成果を上げてきました。

振り返って見れば、当学会は長きにわたり公開講演会、パネルディスカッション、公開シンポジウム、教養講座により、心理学の視点から現代社会の課題をとり上げ、問題点とその関連知識を提供し、深く考える機会と前向きに取り組む気持ちを醸成してきました。

1954年12月に発足した早稲田大学心理学会は2020年度をもって閉会することになりました。当学会が心理学の発展と会員相互の交流の場であると共に、心理学の扉を社会に開く機会を作り、社会の人々と交流する場をも生み出してきた66年間でありました。

2021年1月

石井康智

目次

第1章 閉会にあたって

第1節	早稲田大学心理学会の歴史をふりかえって — 成立と経緯 —	石井康智	6
第2節	年次大会を振り返って—盛んなコミュニケーションをめざして	木村 裕	10
第3節	研究部会の活動を振り返って		12
1.	障害児教育研究部会の思い出	武藤直子	12
2.	臨床心理学研究部会の活動を振り返って	河合美子	13
3.	生理心理学精神生理学研究部会活動を振り返って	市原 信	15
4.	20年続き、そして今後も続く「老年学研究部会」	所 正文	16
5.	意識心理学研究部会の思い出	矢野裕之	19
第4節	教養講座～早稲田からの“知”の発信	押山千秋	22
第5節	会員寄稿		23
1.	早稲田大学心理学会と私	小林 源	23
2.	三島二郎先生直筆講義ノート	吉川政夫	24
3.	臨床教育と早稲田大学心理学会	柴田良一	28

第2章 活動記録

第1節	「心理学教室50年史」から再録		30
	早稲田大学心理学会のこと	相馬一郎	30
第2節	「早稲田大学心理学会会報第1号 1977年」から再録		33
1.	早稲田大学心理学会再発足にあたって	本明 寛	33
2.	近ごろ感じたこと	橋本鍵一	33
3.	早稲田大学心理学会の新発足によせて	三島二郎	34
4.	第2回早稲田大学心理学会大会と総会（1977年）		34
5.	近況報告	赤松保羅	36
6.	赤松先生を偲ぶ	戸川行男	37
第3節	歴代の会長と副会長		38
第4節	会員数の推移		39
第5節	年次大会開催：公開講演会の記録		40
1.	開催記録一覧（第1回～第25回）		40
2.	開催記録一覧（第26回～第43回）：開催概要・要約記事掲載URL		48

3.	仮想的身体運動としての心	月本 洋	53
4.	災害と人間行動～災害に負けない しなやかな社会の創造～	林 春男	56
5.	プロダクティブ・エイジング 2040年 高齢者4割の社会を考える	谷口幸一・所 正文	60
6.	目からウロコの睡眠学 ～金縛りからホットミルクまで～	福田一彦	65
7.	腰痛を解く心のナゾ	丹羽真一	68
8.	生体リズムに基づいた健康法	柴田重信	72
第6節	研究部会の開催記録		75
1.	障害児教育研究部会		75
2.	臨床心理学研究部会		77
3.	生理心理学精神生理学研究部会		81
4.	老年学研究部会		86
5.	意識心理学研究部会		90
6.	マスコミ研究部会		92
7.	非行心理研究部会		98
8.	発達臨床研究部会		100
第7節	教養講座開催の記録		101
1.	開催記録一覧		101
2.	子どもを対象とした音楽活動～活動の持つ「意味」を考えながら	押山千秋	103
3.	なぜ構造構成主義は復興支援活動に役立ったのか？ —ふんばろう東日本支援プロジェクトの活動を通して—	西條剛央	105
4.	身体感覚から見たリハビリテーションとスポーツ技能 —メカトロ技術からのアプローチ—	岩田浩康	107
5.	変わる家族の食卓を考える —写真法から見える日常—	長谷川智子	112

第3章 機関誌：会報と瓦版の記録

第1節	早稲田大学心理学会会報からの抜粋記事		118
1.	会報発行記録一覧		118
2.	おしゃれと流行（会報第23号 1990）	小野 顕	118

3.	「人間学」研究試論（会報第24号 1991）	三島二郎	120
4.	戸川行男先生・新美良純先生 追悼特別号（会報第26号 1992）		
	……………本明 寛・小野 顕・岩下豊彦・橋本仁司・山崎勝男・宮下彰夫		124
5.	職場紹介 —マスコミ特集— “アナウンサーという職業について”		
	（会報第27号 1994）	八木亜希子	133
6.	講演「新しい時代における人間の問題」（第20回年次大会）		
	（会報第29号 1995）	本明 寛	135
7.	収穫の多かった第20回大会（会報第29号 1995）	岩館憲幸	137
8.	ときには学生にかえって（会報第29号 1995）	打田茉莉	138
9.	臨床心理学研究会に参加して（会報第29号 1995）	佐藤美和子	139
10.	初めて開かれた同窓懇親会（会報第29号 1995）		140
第2節	瓦版からの抜粋記事		141
1.	瓦版発行記録一覧		141
2.	会員紹介 「定年退職に際しての感想」（瓦版第4号 2003）	春木 豊	141
3.	会員近況 「夢のまた夢」（瓦版第11号 2007）	本間弘光	143
4.	卒業生紹介 「私の近況」（瓦版第12号 2007）	松濤諦雲	143
5.	会員寄稿 「ワセダは永遠に私の故郷」（瓦版第20号 2011）	森 松平	145
6.	追悼 本明 寛先生（瓦版第23号 2013）	春木 豊・小林 源・木村 裕	146
7.	訃報 浅井邦二先生（瓦版第27号 2015）	石井康智	149
8.	都市と故郷をつなぐ（瓦版第27号 2015）	朝倉昌也	150
9.	戸山キャンパス昨今 「タイサンボク—卒業して50年—		
	一文哲学科心理学専修1966年卒クラス会」（瓦版第29号 2016）	西本武彦	152
10.	エッセイ「アメリカ便り（1）」（瓦版第29号 2016）	黒坂和彦	153
11.	クラス会便り「石井康智先生を囲む会報告—石井先生退職に寄せて—」		
	（瓦版第31号 2017）	川越博夫	154
12.	「泣いた赤おに」の物語を読んで連想したこと（瓦版第32号 2017）		
	……………	今泉岳雄	156
13.	「ふつう」というもの（瓦版第35号 2019）	平野亜紀	160

第4章 早稲田大学心理学会 会則…………… 163

あとがき……………	166
-----------	-----

第 1 章

閉会にあたって

早稲田大学心理学会は66年の歴史を刻んできた。

早稲田大学文学部哲学科心理学専修は1932年に創設され、22年後、早稲田大学心理学会が設立された。学会成立の背景を歴史的経緯から辿ってみる。

文学部哲学科心理学専修創設の周辺

早稲田大学文学部哲学科心理学専修の創設は1932年（昭和7）、国内の大学ではやや遅い創設であった。

大学では、東京帝国大学出身で実験心理学者であった中島泰蔵（1867-1919）が文学部講師として「実験心理学」を講じた（1910）。恩賜館心理学実験室（現7号館）が設置され（1918）、実験器具が多く置かれた。中島は実験室設置に大いに関与した人物として記録されている。早稲田大学文学部文学科第1回卒業生である金子馬治（1870-1937）は哲学、心理学、美学を講じ、「普通心理学」（1917）を著している。坪内逍遙（1859-1935）も心理学の講義を受け持っていた（当時の試験問題が残っている）。このように大学内では心理学の講義が古くから行われていた。

赤松保羅（1891～1980）は、大正6年（1917）から10年（1921）にかけ、アメリカのコルゲート大学とコロンビア大学（哲学及び心理学研究）に留学し、ヨーロッパ5か国（英・仏・独・伊・スペイン）の教育視察をしてから帰国している。帰国後しばらくして、中心に非常勤講師の内田勇三郎（1894-1966）と専任の戸川行男（1903-1992）を迎えて文学部哲学科心理学専修を創設した（1932／昭和7年）。非常勤講師に多くの帝国大学出身者がいる。大学の心理学科創設としては後発組であった。基本的な心理学実験や心理学史、哲学関連の科目を揃えているが、内田を中心にして臨床心理学（臨床に関わる実験的研究や測定研究、薬物実験等）に特色を出す体制でもあった。内田が行っていた連続加算作業（通称クレペリン作業検査）の経過観察から定型曲線・非定型曲線が導出され、呼吸研究、疲労研究、薬物を用いた研究（メスカリン、アンフェタミン等）が行われた。後に「臨床の早稲田」と言われる道筋をつくった背景である。1935年の第1回卒業生は3名であった。

1941文卒の本明寛（1918-2012）のロールシャッハ・テストの研究や1942文卒の三島二郎（1919-2008）の精神テンポの実験的研究は、この臨床系の流れに沿って拡張された優れた研究であった。

早稲田大学心理学会の設立と再発足

1948年に「学生心理学会」が心理学専修内で開催されている。詳細は不明である。

1949年の新制大学への移行に伴い第一文学部と第二文学部が設置され、両学部共心理

学専修が置かれた。第二次大戦後は、旧制と新制の中学・高等学校等の卒業生が混在し、勉学の機会を求めて第一・第二文学部の心理学専修に進学し、多くの人材が巣立っていった。

1952年、「臨床心理学研究会」(戸川行男会長)が発足し、17年後の1969年に解散している。その間、1954年(昭和29)に「早稲田大学心理学会」が創設された。赤松、戸川、本明、三島他の教授陣が中心になり、社会で活躍する初期の卒業生らが参画して創設されたものである。

心理学教室の実験室や在野での実験的臨床研究の成果が積み上げられ、卒業生(教育機関、国家公務員、企業等々)との情報交換や旧交を温める場として学会は設立された。

1960年代半ば以降に起こった学内事情により早稲田大学心理学会の活動は1966年の第7回大会で中断された。1966年入学者から適用された学制改革(2-2制)と同時に学費値上げに対する学生抗議運動がおこった(1965年暮れ頃から)。学費値上げ反対運動は1966年に入って激しくなり、学生運動は次第にセクト化していく契機にもなった。その運動の激化により1966年入学者(1970年卒)の卒業確定日は年度末ぎりぎりの3月31日になる、といった事情が続いた。学生運動が次第に沈静化していくのに10年近くかかっている。

心理学専修創設者である赤松保羅は1962年に定年を迎え、指定寄附を行っている。同年は心理学専修創立30周年を迎えるが、学内事情から1967年に祝いがあった。同年、旧体育局の校庭の端に有った通称音楽長屋の隣りに鉄筋コンクリート造りで3階の建物ができる。以前から心理学教室が要望していた実験室が実現し、心理学測定室・実験室・遊戯室等が2-3階に割り当てられた(旧36号館)。早稲田大学心理学会は寄付金を出している。

1966年入学者から新制度(専門課程進級が3年生:1965年以前入学者は1年生から心理学専修)に移行したが、それまで哲学科の機関紙『フィロソフィア』に投稿していた心理学教員は、新制度で発足した「早稲田大学文学部心理学会」の機関誌『早稲田心理学年報』に軸足を移し、1969年2月に年報第1巻が刊行された。

早稲田大学心理学会と早稲田大学文学部心理学会の補完的關係

早稲田大学心理学会と早稲田大学文学部心理学会(1968年発足)の二人三脚が始まる。このことでお互いが補完的になる一方、両者の関係が曖昧になり、混乱をもたらす原因にもなった。年報は学術論文を掲載するものである。一方、早稲田大学心理学会には学術誌を掲載する機関誌を持っていなかった。そこで両者は相乗りの形になったのであろう。年報は、早稲田大学心理学会会員や会員でないが研究者である卒業生にも実質開放されていた。早稲田大学文学部心理学会には学会にふさわしい活動は事実上なかったので、それを埋める役割が早稲田大学心理学会にはあったと言える。

1977年5月1日に情報誌である早稲田大学心理学会機関誌『早稲田大学心理学会会

報』の第1号が発刊された。

文学部心理学会は、学生の納付金に含まれる学会費と学部からの出版補助金とで早稲田心理学年報を発刊している。年報は、教員、大学院生、卒業生による投稿論文や依頼論文等により構成される。年報の奥付には会員頒布「一部1,000円」とあるが心理の学生・院生には無料配布される。会員頒布は、早稲田大学心理学会会員を念頭に置いているようで、発行される都度会員に送られた。後年、年報を会員に自動的に送付することから、希望者への送付となった。会員でなくても購読したい向きにも購入可能であった。なお年報への寄稿・投稿は、早稲田大学心理学会会員や関係者が単独・連名で可能であった。心理学教室主導で、教員の持ち回りで編集者が指名され、誌面作りを行っていた。

このような経緯と卒業生との情報伝達・交流の意義から、第一・二文学部心理学専修と教育学部教育心理学専修の卒業生名簿が作られ早稲田大学心理学会会員にはアスタリスク（*）が付けられていた。その作成には学会の財政的負担も大きかった。1995年版を最後に卒業生名簿は作られることはなかった。2000年代に入って早稲田大学心理学会会員名簿のみ作成されている。

外的環境と学会活動の関係

1976年、早稲田大学心理学会が再出発する（第1回大会）。文学部と教育学部の教室教員の総力で設立している。その中でも清原健司を中心にして学会は再組織化され会則も整備された。しかし清原は第2回大会開催を待たずに急逝された。

1977年の第2回年次大会総会で役員人事が決まり、翌年から個人会員3,000円、賛助会員30,000円の会費徴収案が承認された。会則変更の承認、1981年に予定される教室50周年記念のための諸行事についても取り決めている。この時の事務局は、文学部・教育学部・体育局・生産研究所（後のシステム科学研究所）に所属する専任教員5名であった。この大会の参会者は、懇親会出席者を含め235名であったと記されている。

1981年に第5回年次大会が「心理学の将来」のタイトルで開催され、教室の重鎮ばかりでなく各地で活躍する卒業生の話題提供が続いた。夕刻から、大隈小講堂にて早稲田大学心理学教室50周年記念式典が行われた。この時の剰余金の一部と寄附金とで「早稲田大学心理学研究基金」が設定された。早稲田大学心理学会も研究資金審議会のメンバーであるが、実質的には心理学教室教員の審議にゆだねられた。

1983年、日本心理学会第47回大会を早稲田大学が引き受けている（大会長 本明寛）。

学会運営に大いに寄与し、学会運営の中心にあった浅井邦二、相馬一郎、春木豊の3文学部教員は1987年の人間科学部開校により転属した（浅井学部長）。

1989年、本明寛は退職し、日本健康心理学会の設立と運営に重きを置くようになる。

頒布価格表示があるのは1995年3月発刊の早稲田心理学年報第27巻までであり、1996

年の第28巻以降は表示がなくなっている。この頃になると、早稲田大学心理学会の会費徴収と年報の頒布価格との混同や混乱が起こっていたかもしれない。心理学教員の意識には会員を除いて、早稲田大学心理学会と文学部心理学会の区別がつかなくなってきた。

論文や特集を組んでいた年報は、2001年3月発刊から「卒論・修論」の要約集になったのである。このような状況下、早稲田大学心理学会との異同が分からない学部生・院生にとっては、当学会入会は選択肢にないものであろう。卒業式の折に当学会入会の宣伝はしていた。

時代の流れに応じて

早稲田大学心理学会の年次大会は、初期から1997年の第22回大会頃までは、講演会、シンポジウム、部会シンポジウム、パネルディスカッション等を程よく組み合わせた、いわば盛沢山な大会が開催されてきた。

一方、学会内の研究部会活動は本明寛の退職前後から開始されている。活動は以下の通りである。

臨床心理学研究部会は1983年に活動を開始し1997年まで活動している（53回）。

1985年には意識心理学研究部会（～1997年／26回）と非行心理研究部会（～1997年／31回）が発足し活動した。

生理心理学精神生理学研究部会は、臨床心理研究部会と同じころ発足したと思われるが記録がない（山崎勝男、宮下彰夫の指導）。1988年からは主に人間科学部（山崎勝男）で開催された（～2017年／71回）。

障害児教育研究部会は1993年から2007年の間に39回の研究会を開催し、後半は武藤直子が行われていた。

発達臨床研究部会は1995年から1997年を活動期間に13回の研究会を開催した。主に小嶋謙四郎の話が中心であった。

マスコミ研究部会は1995年から2001年まで79回開催している。期間は短ったが研究会の頻度が多かった。

老年学研究部会は、2002年から2018年まで都合73回、谷口幸一を中心に所正文と二人で精力的に進めた研究部会であった。

これらの研究部会はそれぞれの研究部会でテーマを検討してきたが、2000年頃までの年次大会には部会シンポジウムとして組み込まれ、参加者は自由にテーマを選択することができた。

1996年から2000年までの年次大会には、ポスター発表をも取り入れている。大学院生、卒業生、あるいは大学院ゼミからの報告であった。盛んなコミュニケーションを標榜した木村裕会長の試みであった。

2007年から、新たに教養講座を立ち上げている。心理学領域で著名な専門家を招聘

し、話題提供してもらい、質疑応答するものである。学内に立て看板を置いた。早稲田大学の学生、院生、一般市民が自由に参加できる形式である。途中2回の特別セミナーの開催を含め、教養講座は2018年まで続けられた。瓦版に要旨を載せて会員に配布している。

早稲田大学心理学会の歴史を周囲の事と合わせて辿ってきたが拾いきれない事柄は多い。しかし学会の歩みの概要は見えてきたかと思う。

2001年以降の年次大会は、公開講演会かパネルディスカッションのいずれかで開催されるようになった。心理学領域に限らない著名な人を招聘し、いずれも盛会であった。

第2節 | 年次大会を振り返って

—盛んなコミュニケーションをめざして— 木村 裕 (一文・1965)

私は1994年に、早稲田大学心理学会の会長役をお引き受けすることになりました。就任に際しまして、役目上のテーマとして、或いは、自分に向けた課題として、一つの達成目標を設定しました。それは、先輩と後輩の交流、また、同級生同士の交流、を意識した『盛んなコミュニケーション』の促進ということでした。

それまでは交流が無かったのかと言うと、そんなことは無いのですが、例えば、大会では壇上での偉い先生方のシンポジウムや講演などが中心になっていて、若者たちを巻き込んだ交流とは少し違っていたかに思われました。沢山の先輩方が各方面で活躍して居られるのだから、現役学生との間にもっともっと盛んに刺激的な交流が有れば、時間はかかるかも知れませんがきっと好ましい展開があるのではないかと考えました。同世代間の情報交換も、専門（卒論や修論のテーマ）の違いを超えてさらに高頻度に、行われた方が良くない、と考えました。早稲田大学心理学会という名称を意識しながら、当時、私は学生達の事を真ん中に据えて考えておりました。

もうひとつ早稲田大学文学部心理学会と言うのが有りまして、これは学生が大学に納める学会費を基盤にしておりまして、心理学教室が運営する学生のための学会でした。早稲田心理学年報という機関誌を毎年刊行しておりました。学部生、修士・博士課程の大学院生が主要な投稿者でしたが、学生に様々な分野の最前線の研究・実践の事情を知ってもらうという趣旨から、学部生・大学院生ばかりではなく、企業、研究機関、クリニック、相談室などの最前線で活躍する心理学教室出身の卒業生にも依頼して、論文や報告を掲載させてもらっておりました。

早稲田大学心理学会の、年に1度の大会でも、さまざまな関心を持つ学生の要望に少

しでも応えようという発想のもとに、学部生・大学院生にも呼びかけながら、ポスター発表や多数のシンポジウムなどを準備して参加してもらいました。時には、国外の大学から研究を展示してくれた留学生も居りました。

また、大会の行事や催しが終わった後には、引き続き心理学専修出身者皆様が、職種ごとにいくつかのグループを形成して、学生の進路相談に対応して下さったりもしました。

このような様子は、早稲田大学文学部心理学会と早稲田大学心理学会とが、別組織でありながらも、具体的な活動の現実場面においては、一体化したかに感じられる様子でありました。目標とした『盛んなコミュニケーション』に、一步近づいたかと思われました。

数年に渡ってこの状態は繰り返されましたが、大会の企画運営についやす時間、人手・労力、費用、会場の設定、などの事や、報告・発表への見返り（研究業績としての評価の水準）などの事に深刻な関心が向けられるようになりまして、徐々に大会への参加者は減少し、発表報告の数も減りました。卒業生が当学会に入会することも無くなりました。

その後は、大会の方針も現実的な要請に応じて少し変わりました。当初考えられたコミュニケーションの有り方も異なる様子を示すようになったと思います。企画内容は、教室出身者という事にこだわることなく、著名な先生にお願いする年に1度の講演会と、最前線で活躍する先生方によるワークショップなどを中心にした年に2回の教養講座、を開催するというふうに着いてきました。多くの方々が関心を向けている今日的なテーマを取り上げるこのやり方は、特に2011年に会長役を石井康智先生に代替わりして以降、講演会も教養講座も、いつも沢山の出席者があり、素晴らしい成果をあげてまいりました。

最初に目指した『盛んなコミュニケーション』は、現在のように、スマートフォンやコンピュータを、どこに居ても自由に操作できるようになる以前の古風な発想に基づいて居ります。コミュニケーションが大切なことは今も昔も変わらないと思いますが、そのあり方はかなり大きく様子を変えることになりそうです。

早稲田大学心理学会は閉会となりますが、新しい時代の新しい方法で、心理学教室出身者の間に、『盛んなコミュニケーション』が、さらに広く深く賦活維持されることを期待しております。

1. 障害児教育研究部会の思い出

親子相談センター所長 武藤直子（一文・63卒）

研究部会の報告をするには、余りにも資料がなくわずかな記憶だけでお伝えしなければならぬことをお詫びいたします。歴代の会員名簿や記録が行方不明になってしまっているのです。

早稲田大学では、戸川行男教授が「特異児童」(1940年刊)の本の中で山下清のことを書かれているそうですが、日本の自閉症の第1症例が報告されるよりも12年も前のことですし、教育学部に移られた三島二郎教授が「障害児」の発達助成の原理というご自分の見地を述べられているなど、障害児に対する研究や理論化がなされている伝統がありました。

三島教授の研究室で卒業生有志に「障害児」の教育心理学を講義してくださっていたそうです。早大心理学会の第2回年次大会（1977年10月23日）の部会シンポジウムの一つ、シンポジウムA「心身障害の教育」が大学院の阿部健一氏が司会を務め、話題提供者として横田滋氏（調布中学特殊学級）、三谷嘉明氏（あけぼの学園）、山田孝氏（リハビリ学園）が登壇されていました。たぶん学会再出発の頃から研究部会が始まっていたのではないかと思います。

私が参加し始めたのはすでに6、7年経ってからではないかと思います。横田滋氏（当時障害をもつ子どものグループ連絡会）、大見川正治氏（文京短期大学、後旭出養護学校長）が中心となって運営されていました。私は大学在学中ほとんど障害児のことを勉強せず、経験せず卒業してしまいましたが、その後職場の仕事を通して自閉症のセラピストとして障害児の豊かで興味のない世界に入っていくことになりました。一時東京都の民生局判定員や、結婚後都区内の教育相談センターに初めての非常勤心理職員、新潟でのボランティア専門職として幼児の障害児療育などを経て早稲田大学のすぐ近くの職場で自閉症児の集団療育を行っていました。研究会を知ったのはその時期でした。自閉症については、「謎」とも言われ、TVを見せているせいで自閉症になる、という見地がマスコミで大きく取り上げられたりしました。自閉症を情緒の問題であるとし、まだ脳の機能障害によるという見方が定着していませんでした。しっかりした療育の在り方が確立されていなかった時代です。その中で私は、東大病院精神神経科小児部の太田医師を中心としたデイケアの人たちと「太田ステージ」という簡便に発達を評価した上での「認知発達治療」をまとめている頃でした。

研究会では先輩の方々のお話にとっても刺激を受けました。しばらくして私が事務連絡係を仰せつかり、卒業生名簿を見て関係ありそうな方々に案内を送ったりして年3、4

回ずつの集まりを続けました。心理学を専攻した仲間とはいえ、多職種でそこからの刺激はとても貴重でした。障害児教育教員・高校教諭、大学で教えている人、病院関係の職種、私のような自閉症専門セラピスト、施設職員、公務員の方々、学校経営者、療育専門機関、見相（ゲシュタルトセラピーの人も）等々。会員の職場の話や研究なさっているテーマについてのお話、時には外部の先生を講師としてお呼びし貴重なお話を伺ったこともあります。熱い語らいが夜遅くまで行われる熱気ある場で大いに勉強させてもらいました。

私にとって印象に残っているいくつかの研究部会には：愛知県コロニーの初期に心理職として途方にくれながら障害児の療育を工夫されたお話やゲシュタルト療法の自己への気付き体験、発達障害児の親の障害認知について、その他難聴児の早期治療の話、視覚障害者のコミュニケーション、「施設に感動はあるのか」というテーマで施設長さんのお話、県立商業高校の障害児受け入れ、「カオスから自閉症を考える—脳科学的自閉症論」(外部講師) など様々なテーマがありました。

この原稿を書くにあたって何人かの方に当時のことを聞いてみましたが、研究会後飲みながらのおしゃべりがとても楽しかったという一致した感想でした。

この研究部会から外部に発信することはなかったのですが、早大心理学会からの支えで沢山の出会いと学びがありましたことを感謝いたします。

2. 臨床心理学研究部会の活動を振り返って

桜美林大学 河合美子（一文・1979）

1. 活動の始まり

臨床心理学研究会は、80年代の初め、研究部会の中では早くから活発な活動を開始し、武藤直子先生、望月稔先生、矢田部多賀子先生など、たいてい十数名の卒業生の方が参加されていました。私は、博士後期課程でご指導いただいた富田正利先生が本研究会の世話人をされていたこともあり、開催の連絡（当時は葉書）や当日の受付等をお手伝いするようになりました。当時は、臨床に関心のある大学院生が数名お手伝いをし、会費は免除で毎回先生方のお話をお聴きすることができました。研究会の世話人は富田先生の後、深澤道子先生に引き継がれ、私は大学院修了後も、勤務した専門学校が早稲田にあったこともあり、90年代後半まで10年余り事務局のお手伝いを続けていました。

2. 多様な領域からの話題提供

改めて開催の記録を見ると、臨床心理学に関連して、きわめて広範囲のテーマが取り上げられていたことがわかります。精神病理や心理検査、心理療法の話題もあれば、働く人のメンタルヘルスや非行の問題、児童相談所や婦人相談所での実践を伺うこともあ

りました。交流分析（TA）の深澤道子先生による「心配性の人のためのワークショップ」、老年心理学の井上勝也先生のお話など、印象に残る回が多くあります。当時東京都老人総合研究所にいらした福澤一吉先生は、数回にわたり、失語症など言語に関する神経心理学的研究をご紹介くださいました。

早稲田の心理学出身の先生方が多方面で活躍されていたのに加え、先生方の広い人脈により、大野裕先生（「認知療法」）、北山修先生（「言葉と精神療法」）など、他大学からも多様なアプローチの臨床家が毎回おいでくださいました。福祉分野では、「ノーマライゼーション」を小野顕先生がご紹介くださり、精神障害者の地域生活支援の草分けともいえる「やどかりの里」の谷中輝雄先生のお話も伺うことができました。

1995年の阪神淡路大震災の後には、年次大会の中で研究会として、被災した人の心理をテーマとしたシンポジウムを開催しました。本研究会は、臨床心理学に関わるその時々をテーマを取り上げるとともに、活躍される臨床家・研究者に接する貴重な場だったといえましょう。

3. 交流の機会

金曜の夜9時に研究会が終わると、毎回、小野顕先生が「じゃあ、行きましょうか」と講師を囲んでの食事の席に、私たちスタッフの大学院生もお誘いくださいました。気さくにお話くださる先生方のお人柄にもふれる機会をいただいたのは、何と貴重だったことかと思ひ返し、感謝を新たにしています。

ご参加の先生方から、学生時代の心理学教室や当時の先生方のお話を伺うこともありました。当時は既に名誉教授になっておられた戸川行男先生のかつてのご研究のお話を伺うなど、早大心理学教室の臨床心理学研究の歴史の一端を知る機会にもなりました。

なお、私事ですが、研究会を手伝っていた大学院生の中に、夫の千葉浩彦（一文・1983）もおり、結婚の際、小野先生ご夫妻にご媒酌をお願いしました。今、私は大学で福祉と心理の両方に関わって教育を行う中で、小野先生から折に触れ福祉領域での豊かなご経験からのお話を伺えたことも、ありがたく思っています。

4. 研究会活動のその後

臨床心理学の分野では、1988年に臨床心理士の資格ができ、学会や臨床心理士会等での研修会等も活発に開催されるようになりました。その間に、卒業生の集まりである本研究会は次第に開催が減り、学内の先生や大学院生の関与も少なくなって、活動の引継ぎも難しくなっていくように思います。

90年代の終わりには、事実上研究会活動は休止となり、その後、他の部会と合同での企画が提案されたこともありましたが、実現しないままになったのが心残りです。

このたび記念誌制作にあたって、研究会の開催記録をなつかしく拝見しました。既に故人となられた先生方のお名前も多く、かつて先生方から学んだことを、今関わる学生

達に少しでも伝えていきたいと考えています。

3. 生理心理学精神生理学研究部会活動を振り返って

市原 信 (一文・1973)

早稲田大学生理心理学精神生理学研究部会は、新美良純先生、山崎勝男先生、宮下彰夫先生らを中心に1980年代に設立されました。研究部会の開催は夏と冬の2回程度を原則としてきました。

研究部会のメンバーは早稲田大学心理学教室の皆さんが中心ですが、それ以外にも生理心理学関係の研究機関や大学にも視野を広げ、国内のみならず海外の研究者の方にも参加していただきました。

研究部会としての主たるテーマは、睡眠、自律神経系、脳波などが中心ですが、関連分野も含め幅広い話題提供がなされてきました。

以下に、2017年8月から2001年10月までに論議された研究発表の演題を列記します。

第71回研究会：生理心理学研究を目指す皆さんへ一気づくこと、何とかすること、気を付けること、第70回研究会：運動学習とパフォーマンスモニタリング機能の関係、視線行動に着目したアスリートのあがり防止の研究、第69回研究会：モンティ・ホール・ジレンマ課題における予期プロセス—刺激前陰性電位に着目して—、第68回研究会：日常的なポジティブイベントの継続的筆記が楽観性と悲観性に及ぼす効果、第67回研究会：深夜の仮眠がエラーモニタリング機能（ERN・Peの振幅）に与える影響（The effects of a nighttime nap on the error-monitoring functions during extended wakefulness）、第66回研究会：若年者と比較した中高年者の運動反応と前期・後期CNV（The motor reaction and the early and late CNV in the middle-aged compared with those in the young）、第65回研究会：Effects of Response Complexity and Movement Duration on the Lateralized Readiness Potential、第63回研究会：運動学習における文脈干渉効果とERP、第62回研究会：「行為と結果の随伴性と事象関連電位」、第61回研究会：視覚運動学習における睡眠の効果、第60回研究会：レム睡眠中の脳機能研究～ヒトとラットを対象とした夢の発生メカニズム検討～、第59回研究会：身体運動は認知機能を改善する？、第58回研究会：CNVパラダイムに反映するタイミング、第57回研究会：「眠気とエラー反応モニタリング」、第56回研究会：レム睡眠中の急速眼球運動に伴う脳電位と夢見の精神生理学的検討、第55回研究会：「注意の集中は呼吸運動を抑制する」、第54回研究会：Movement preparation (lateralized readiness potential: LRP)、URL：http://zope.psychologie.hu-berlin.de/profship/bio/staff/mit_anz_1-en?pid=4489.0、第53回研究会：感情喚起スライドに対する予期が主観的評価と心拍数に及ぼす影響、第52回研究会：「大学生の睡眠習慣と精神的健康との関連」、第51回研究会：一致

タイミング動作の制御について：fMRIによる関連脳部位の特定、およびベイズモデルによる展望、第50回研究会：Investigating familiar face recognition with SCR and ERPs、生理学的知見に基づいた生理反応の多変量解析、第49回研究会：情動の予期と刺激先行陰性電位（SPN, stimulus-preceding negativity）の関連について、第48回研究会：「脳内情報処理過程とERP—偏側性準備電位とエラー関連陰性電位の機能的意義—」、第47回研究会：内側前頭皮質のモニタリングと評価プロセス、第46回研究会：エラー関連陰性電位によるエラー検出機能の研究、第45回研究会：「快・不快感情の精神生理学」、第44回研究会、生体リズムとしての睡眠と覚醒について強度の異なる運動が感情と脳波の左右差に及ぼす効果。

なお、1988-1900年開催の第16回研究会からは演題のタイトルを、そして2005年に開催された第52回研究会から第71回研究会については、演題のサマリーを早稲田大学心理学会のホームページに掲載してきました。早稲田大学心理学会からは、当研究部会へのご支援をいただきました。深く感謝いたします。

また、「研究部会報告」は第71回研究会（2017年8月5日）までで、瓦版32号に掲載されています。

4. 20年続き、そして今後も続く「老年学研究部会」

立正大学心理学部教授 所 正文（一文・1981）

「21世紀には心理学は無くなり、生理学と社会学に分かれてしまう」。1980年当時、早心の学部学生であった私が、心理学史の授業で聞いた話である。驚くべき未来予測であったが、その根拠として次のような説明がなされると記憶している。

行動メカニズムを究明する基礎心理学はどんどん進化発展し、脳科学と一体化する。また、現実の問題解決を志向する臨床心理学（現在では「実践心理学」と呼ばれる場合もある）は、心理学が着目する小さな要因では問題解決には結びつかず、マクロ的要因の考慮が不可欠となる。すなわち、社会学と一体化する。それ故に、心理学は消えるという説明であった。

前者については、90年代以降、MRI画像などを提示した学会報告が増え、確かにその通りの展開になっている。後者については、学部卒業後に民間企業に就職しながら母校大学院で心理学を学び続けた私にとって、直ちに気づいた心理学の限界であった。現実社会の問題について心理学で説明できる部分は明らかに限られており、異分野の知識（特に社会科学分野）を学ぶことの重要性を強く感じた。

40年という長きにわたって私が心理学と関わり続ける中で、日本社会は超高齢社会へと大きく転換した。心理学を中核に据えて現実社会の問題に挑み続ける私は、必然的に高齢者心理学、生涯発達心理学という分野に辿り着いた。早心学会の重鎮である石井康

智先生から、この分野にいち早く取り組んでおられた谷口幸一先生を20年前にご紹介頂き、共に老年学研究部会を立ち上げることになった。

立ち上げた研究部会は少人数での運営が続き、この20年間、試行錯誤の連続であった。しかし、世界心理学史に名を刻む知見を残した学習心理学者・スキナー（Skinner, B.F.; 1904-1990年）の研究会はわずか数名で運営されたことを木村裕先生から教えて頂いた。木村先生は、私の学部卒論の指導教授であり、その後40年にわたり交流させて頂いている。このご教示が心の支えとなって、我々の研究部会が20年間続けられたように思える。

いささか手前味噌ではあるが、研究部会の足跡を通して、「実践心理学」の研究スタイルを作り上げることができたように思える。主なポイントとして3点あげられる。

(1) 理論と実践の橋渡しにチャレンジ

研究部会には、大学教員だけでなく、谷口幸一先生の勤務先である東海大学の社会人講座受講生や社会人大学院生を積極的に招き入れたことが第1の特色としてあげられる。この運営方針は、谷口先生の根幹となる考え方であった。

年配の社会人参加者からは、豊富な社会経験を披瀝して頂き、大変有益な情報が得られた。研究部会恒例の「温泉合宿研究会」は良き思い出である。創成期には私の前任校である国士舘大学・世田谷キャンパスを本研究部会の主会場としたが、最寄駅である松陰神社前駅には年配者向けの小料理屋があり、その場での2次会ではさらに活発な議論が展開された。

谷口先生の教え子である社会福祉士として活躍する女性福祉職2名（社会人経験を経て、東海大で修士取得）、私の教え子である臨床心理士・公認心理師として活躍する女性臨床家1名（国士舘大学卒業後、カナダへ渡航しサイモンフレーザー大学心理学部卒業、帰国後早大で修士取得）が、長きにわたって研究部会に参加し、充実した活動を展開することができた。

さらに、早心OBのひとりである中村誠氏の多大なる貢献が特筆される。中村氏は豊富な学識と社会経験、継続中である実母の介護経験を元に、毎回多彩な知見を提供して下さった。中村氏の尽力なくして本研究部会の継続はなかったと言っても過言ではない。

また、故人となられた折原茂樹先生（早心OBの国士舘大学教授）からも本研究部会には、大きなご助力を賜ったことを強調させていただきたい。

私が立正大学へ移籍した後は、所属学部が心理学部となったため、学部ゼミ学生および大学院生にも参加を求めた。彼らは21世紀後半の超高齢社会を生きる若者であるため、年配者から彼らに緩やかな示唆を与えることを目的としたが、残念ながらこちらの意図は十分には伝わらなかった。都会の若者には高齢社会への関心はいまひとつのようであった。老年学研究が若者に関心を持たれなかったことについては、大きな課題となってしまった。

実践心理学の基本的考え方の一つに「科学者-実践家モデル (scientist-practitioner model)」がある。基礎研究のみならず現実場面を重視する考え方である。実務経験豊かな社会人と共に研究部会を20年間運営してきた我々のスタイルは、まさにこの考え方に基づくモデルケースと言える。

(2) 研究成果発表の実践

研究部会での活動成果について、部会代表者である谷口先生と私が報告書作成、関連学会での報告、書籍刊行、およびマスメディアでの論説主張等を行ってきたことを強調したい。決してその場限りで終わることなく、活動成果を記録として残し、次に繋げていく努力を行ってきたことは、小さな研究部会としては誇れる活動であったと言える。

現実社会の問題解決に取り組む研究部会活動は、「科学者—実践家モデル」に基づく必要がある。そのためには、研究成果を発表し、記録にとどめておくことは最低限の義務であり、我々は地道な活動を継続したと自負できる。

(3) アプローチ方法としての「生物—心理—社会モデル」

人間の身体は、生物（医学）・心理・社会的な要素が相互作用するため、人間の不調や病気は、それぞれの側面における対処を試みるだけでなく、総合的なアプローチが必要になるという考え方が「生物—心理—社会モデル」である。元来は医療分野での考え方であるが、我々の研究部会では、結果的にこのモデルに沿って活動を進めていくことになった。すなわち、心理学を中核としながら、医学領域、社会科学領域（主に政策科学領域）を包含しながらアプローチを展開していった。

生物：医学的要因 (medical factors)

心理：臨床心理要因 (mental factors)

対人心理要因 (interpersonal factors)

社会：環境（自然・文化）要因 (environmental factors)

法律・経済による要因 (enforcement factors)

理由の一つとして、部会代表者の谷口先生が鹿児島大学で医学博士を取得し、さらに鹿屋体育大学、東海大学健康科学部で長く研究・教育に従事されたため、生物（医学）要因、臨床心理要因を重視して研究課題に取り組まれたことがあげられる。

一方、私は、物流企業のシンクタンクである日通総合研究所を経て、国土舘大学政経学部で研究・教育に長く従事したため、社会要因、および対人心理要因を重視して研究課題に取り組んだ。

2人の研究部会幹事のアプローチのわずかなズレが「異知の融合」を醸し出し、実践心理学の基本的考え方とされる「生物—心理—社会モデル」の形を作り出すことになった。

早心学会が閉じ、20年間続いた我々の老年学研究部会も終わろうとしている。しかし、中核メンバーは健在であり、今後も交流は続く。我々には実践心理学研究の形を築いたという自負がある。老年学研究部会は「人生100年時代」を見据えて、我々は今後も活動を継続するだろう。

5. 意識心理学研究部会の思い出

株式会社日通総合研究所 矢野裕之（一文・1986）

1. 意識心理学研究部会とは

意識心理学研究部会の「意識心理学」とは、戸川行男先生が提唱された意識心理学に由来します。そして、私が同部会に参加させていただくようになった時には、戸川先生のご指導を受けられた早稲田大学の岩下豊彦先生が幹事として主催されていました。

実際の研究活動は、この戸川行男先生の意識心理学に関連したテーマに限定されるものではなく、部会の会員自身それぞれが行っている研究活動の発表の場という性格が強いものでした。たとえば、この部会における私の発表は、自分の修士論文の内容の紹介でした。また、時には部会の会員に限らず、会員のネットワークで講師をお呼びして発表をお願いすることもありました。このような形で活動を行っていたため、発表内容の記録をみると、臨床あり、統計学あり、交通心理学ありと非常に多岐にわたるものとなっています。

私は、卒論、修論において、岩下豊彦先生（以下、「岩下先生」とさせていただきます）のご指導を受けたご縁で、修士課程に進学後に意識心理学部会に参加させていただくようになり、博士課程で岩下先生のゼミに入れていただいた頃から、幹事を岩下先生から引き継がせていただきました。ただ、私の至らなさで、その後5年程度で活動は休止状態となってしまい、活動を再開しようとしても果たせないままとなってしまいました。結局、かなりの年月が経過してから、最終的に部会は解散することとなり、私に幹事をまかせて下さった岩下先生には、本当に申し訳ないことをしてしまったと、取り返すことのできない日々を未だに悔やみ続けております。そのような私が、このような誌面をいただいて、部会の思い出を語って良いものか大いに疑問のあるところですが、自分なりに大昔の頼りない記憶をたどり、当時の活動を振り返らせていただければ幸いです。

2. 最初の大失敗

私が意識心理学研究会に参加させていただき、しばらくしてから、岩下先生に「早稲田心理学会の会報に部会の活動報告の原稿を提出してもらえないか。内容は、あなたが部会で最近発表した内容ではどうか」とのご指示をいただき、早速、自分の発表内容を要約して学会にご提出したことがありました。ただ、岩下先生はおそらく、簡潔・コン

パクトに整理したものをイメージされていたと思うのですが、私は、そのような岩下先生のご指示の趣旨を十分に理解できておらず、かなりボリュームのあるものを提出してしまったのです。このため、会報の編集において、多くの方に大変なご迷惑をおかけしてしまいました。今でも、もう少し別の対応をさせていただけなかったかと思いつつに後悔しています。

3. 部会での活動について

冒頭で申し上げた通り、部会での発表のテーマは、特に意識心理学との関係性に拘らず、部会の会員さらには招待講師の方達からの多岐にわたる内容となっていましたので、とても、私などが概括できるものではありません。そのため、私が幹事となって以降の大きなイベントとなった、早稲田心理学会の大会での発表に限定して整理させていただくことをご容赦いただければと思います。

ご存知の通り、1995年より3年間、早稲田心理学会の大会で意識心理学部会を含む各部会が広く会員に向けて発表することとなりました。それまで、部会での活動は、あくまで部会の会員を中心とした少人数での発表という形を取っていましたが、早稲田心理学会の会員の方に向けて広く、発表することとなり、私にとっては大きなプレッシャーとなりました。幸い、当時、早稲田大学商学部の鈴木宏昌先生の研究会に参加させていただき、この研究会で当時行っていた早稲田大学卒業生のキャリア調査の内容について、鈴木先生をはじめとする研究会の方達と「企業で働き続けるということー早大OB1236名の履歴書ー」というタイトルで共同発表させていただくことにしました。大会も卒業生の方達が多く訪れますので、比較的興味を持っていただけるのではと思ったのですが、幸い、多くの方に発表を聞きに来ていただき、私としては、なんとか無事に終わることができたのではと思っています。

また、その次の年は、私が修士課程で所属させていただいた浅井邦二先生（以下「浅井先生」とさせていただきます）のゼミの先輩であり、かつ、私の所属先の株式会社日通総合研究所の先輩である、立正大学教授の所 正文先生と共同で「経済行動における意識について」というテーマで発表させていただきました。その内容は、今でいう行動経済学のような、経済行動の分析における心理学的知見の活用の可能性について取り上げたものですが、この時は、部会の方以外に、企業人となった会員の方達が何人か来ていただき、浅井先生も聞きに来ていただきました。

このように、最初の2回の大会発表は、他の方の力をかなりお借りして終えることができたのですが、3回目の大会では、いよいよ自分だけで発表しなければならなくなりました。その時のテーマが「心理学における、正しい『エンジニアごっこ』のあり方について」というもので、かなり奇をてらった感が強いものになってしまっていたかもしれませぬ。その内容は、少なくとも私が大学院にいたころの心理学は、パソコンのスキルの高さ等、エンジニア的なスキルが重視される傾向が強いように思われ、そのことに

対して、何か問題提起をしようという、今さらながら大それたものでした。私自身は秋葉原にパソコンを触りに行ったのが中学生の時であり、パソコンをはじめとする理数系のスキルに対する興味そのものは元から強かったのですが、実は大学進学後に心理学科に入るまで、パソコンのスキルが心理学の世界で重視されているとは知らず、心理学会に入った後で、たまたま趣味と実益が一致したようなところがありました。ただ、それゆえに、もともとパソコンを心理学のツールとするために勉強していたわけではなかったことから感じていた違和感のようなものがあり、それに基づいた発表を何とか行いたいということが発表の動機になっていました。

この3回目の発表は、正直、それまでの2回に比べて、部会の方以外はほとんど聞きに来ていただけないという結果になりました。ただ、発表前に浅井先生がわざわざ会場に顔を出して下さり、「今日は他の部会をお聞きすると約束しているため、参加できないが、非常に面白いテーマだと思う。資料だけもらいたい」と言っていたのが非常に嬉しい思い出です（ただ、資料の内容そのものは、必ずしも先生の期待に沿えるものにはなっていたか自信は全くないのですが）。そして、この発表が実質的に意識心理学部会として最後の活動になってしまいました（その後、かなり経過してから、活動を再開しようと、会員の方達に開催案内と資料の郵送まで行ったことがあったのですが、会場の確保に不手際があり、急遽中止となってしまい、最後まで至らない幹事でした）。

ただ、今考えると、この最後のテーマでの発表を行えたのは、意識心理学部会だったからこそとも言えるかもしれません。繰り返しになりますが、意識心理学部会の発表テーマは、戸川行男先生の意識心理学に必ずしも拘ることなく、非常に多岐にわたっていました。ただ、意識心理学は当時の心理学に対して疑問を呈す性格を持っていたと私は理解しており、また、意識心理学部会での発表とそれに対する議論も、そのような姿勢で行われる傾向にあったかと思われ、それは、部会としての活動の根底にあるものだったと言えるかもしれません。そのような部会だからこそ、上記の発表も行うことができたのかと、この原稿を書きながら、改めて感じております。

4. おわりに

今回、意識心理学研究部会における思い出について記す場をいただき、記憶を整理しようとする、自分の失敗、不手際、至らなさといったものを改めて認識することになってしまったようです。そのような私にも発信の機会を与えてくださり、何より、多くの方の貴重な研究成果について直接お聞きできる貴重な場となったのが意識心理学研究部会でした。限られた年月でしたが、そのような場に参加できたことに、改めて感謝いたします。

「押山さん、お願いがあります」という、いつもの物腰の低い、恩師からの連絡に、「わたしでよろしければ」と言ってお引き受けしたのが、2014年の第一回目の教養講座となりました。6月、戸山キャンパスにて、障害児への音楽療法をテーマに、ワークショップを中心とした内容で、教養講座を行わせていただきました。参加者は30名程度、ワークショップを行うには最適の人数、いつもながらの理事の皆様の大なるサポートのおかげもあり、大好評にて（と本人は思っています。笑）執り行うことができました。参加者の皆様からの生の反応は、とてもいい勉強になりました。皆様には行動変容のために音楽を使うという視点に気づいていただくことが出来たように思います。その時から、教養講座に関して、理事の先生方と一緒に、計画し、可能な範囲でお手伝いさせていただくようになりました。様々な先生にお声掛けさせていただきました。筑波大学湯川進太郎先生、大正大学長谷川智子先生、福島医大の丹羽真一先生、千葉大学の山本利枝先生、大島郁葉先生、早稲田大学の岩田浩康先生、向後千春先生、そして、我々理事の中から小林源先生、ざっと上げただけでも、非常に多岐にわたる濃い内容でした。新聞による衆知から情報を得てこられる一般市民の方々からの反応も実に様々であったと思います。非常に豊かな知識を社会に還元出来たのではないかと思います。

教養講座の計画と実施をお手伝いさせていただくことは、私自身にとって、非常に有意義なことでもありました。心理学会を運営される理事の皆様との交流からも得るものがたくさんありました。私の思いになってしまうことをお許しいただけたらありがたいのですが、このような教養講座にピリオドが打たれてしまうことが、非常にもったいないように感じております。アカデミックな情報を、一般レベルで気軽に得る機会は、そんなに多くはありません。そして、教養講座を開かれる先生方も、一般の方にわかるように、講義をされます。先生方の科学的な裏付けのある知識は、講座に参加された方々自身の生活に、安心して取り入れられたことと想像します。昨今、危ない情報や、拡大解釈された情報、偏りのある情報などが多くみられますが、教養講座は、先生方が手塩にかけてこられた研究に関連した技術と結果が情報源となっています。そして、参加には何の壁もなく、無料でその情報を得ることが出来ます。何百人も参加する大きな、参加費用が高い講座ではないということも魅力のひとつだったように思います。

早稲田大学心理学会は、その歴史を閉じますが、これまで会を取り仕切り、教養講座を含めた様々なイベントを進めてこられた理事の先生方に、心から敬意を表します。最初に追お声掛けくださいました恩師の木村裕先生、いつ何時でも優しくフォローしてくださいました石井康智先生、本当にありがとうございました。学会の先輩・同輩・後輩のみなさま、お世話になりました。

1. 早稲田大学心理学会と私

小林 源（一文・1962）

かつて猛烈社員という四字言葉が世に精彩を放っていた。ある時、「早稲田大学の春木様という方からお電話です」との取り次ぎが、当時の私の職場にあった。

「はい、小林源です。ご無沙汰しています」

「小林…源さんか。元気かい。急な話だけどねえ、今度の早稲田大学心理学会でパネルディスカッションをすることになって、源さんにパネルメンバーの1人になってもらおうと思っただけの電話なんだけど、どうかな？」

冒頭の四字言葉を地でいっている私～例えば、未だ週休二日制が普遍化されていない頃の休日出勤（つまり一週間無休日）は日常茶飯、月間100時間残業もほぼ当然視されていた頃とあって～が、答えあぐねていると、

「早稲田の心理学専修卒で社会に出た人たちが、どんな風に活躍しているかを聞きたくて立てた企画で、リクルートの山下潤三君からは、すでに出席の内諾を得ている…」

と、ここまで聞いて、他社に行った人たちの情報が得られる、悩みも聞ける、成功体験など知りえたらもっといい、などと参加することへの前向きな考えが次々と浮かび、結局、

「伺います。ご期待に副えるかどうかは分かりませんが」

となってパネラーとなった。パネラー3人のうちのあとの1人は、どうしても思い出せない。

要は、私が早稲田大学心理学会と縁ができたのは、この“春木コール”であったのです。

理事の末席を汚すようになった上、何かのハズミで副会長にされた?!ものの、まるで役立たず、これを自覚していたため、木村前会長、石井現会長にこの旨と辞任の申し出をしたものの、一笑に付され、諦めた。が、少し考えれば、私が不適任で辞めたとなれば、私を副会長に祭り上げた?!側にも責任があることとなるわけで、いい歳をしての愚行に忸怩したことをうっすらと思い出したりもする。

悲しい話に変わるが、その春木先生は今春天寿を全うし天に召された。仏教に造詣が深く、時には参禅もされていた同先生が、昨年キリスト教に帰依し、受洗もされ、帰らぬ人となられたお心の軌跡には、遠く思い及ぶべくもないが、早稲田大学心理学会の閉会と春木先生の天への旅立ちがほぼ同時期であったことに、私は深い感慨に浸らざるを得ない。私の早稲田大学心理学会の会員としての歩みは、春木さんに始まり春木先生で終わったわけだから。

◎書くほどに かく恥が増え 擱筆す

源

2. 三島二郎先生直筆講義ノート

吉川政夫（教育・1973）

私は、早稲田大学教育学部教育学科教育心理学専修に、1969年（昭和44年）に入学し1973年（昭和48年）に卒業しました。その後、同大学大学院文学研究科心理学専攻修士課程・博士課程で学びました。

学部では、三島二郎先生、服部清先生、牧野達郎先生、橋本仁司先生、富田達郎先生、森川靖夫先生、東清和先生、浅井邦二先生、戸川行男先生に、大学院では三島二郎先生、本明寛先生、その他の先生方に教育研究でお世話になりました。

多くの先生方から教えを受けましたが、本稿では、学部と大学院の研究指導教員として、またその後教員となってからもご指導いただいた三島二郎先生の直筆講義ノートについて書かせていただきます。

先生は、1919年長崎市出身、1942年早稲田大学文学部哲学科心理学専攻卒業、1947年活水女子専門学校教授、1949年早稲田大学文学部講師、1958年同大学文学部教授、1959年同大学教育学部教授、1962年文学博士、1990年早稲田大学定年退職、そして2008年に亡くなりました。

2009年11月に教え子が集まり、奥様とご子息をお迎えして「三島先生を偲ぶ会」を大隈会館で開きました。その後、ご遺族から生前の講義ノート等の資料が託され、折原茂樹先生が国士舘大学の研究室に保管され、整理とPDFファイル化をされました。教え子の平岡幸雄先生もご尽力されました。その折原先生は在職中の2014年に62歳で亡くなりました。以下で直筆講義ノート等について紹介できるのはご遺族と折原先生、平岡先生のお陰です。

在職中に執筆された講義ノートは133冊です。心理学21冊（1950年～1958年）、心理学概論14冊（1962年～1988年）、教育心理学25冊（1949年～1975年）、教育心理学原論18冊（1964年～1989年）、発達心理学14冊（1960年～1988年）、大学院講義・大学院演習23冊（1973年～1989年）、その他18冊（1950年代、1960年代）です。いずれも市販の横書き細

います。

1990年1月20日に大隈小講堂で行われた最終講義ノート最終ページの、すなわち講義を終えるにあたり原文を紹介すると次の通りです。

省みれば、昭和15年切羽詰まって始まった歩行速度の研究から精神テンポへの過程は全く実験心理学の、したがって物理科学的研究に終始していたものであり、第2には生態学的、生物科学的な地域差研究に進み、第3には生物社会科学的な乳幼児研究、発達障害の研究、第4には高年発達の研究に精神テンポから得られた普遍原理を応用し、第5番目に人格発達階層の仮説を得るという人文科学研究、最後にこの仮説の検証の意味を含んで、個性原理追求としてのcounselingの提起と進んできた所で今日の定年に至ったというわけであります。

そのことにおいて私のこのささやかな研究といえどもそのすべては疑いなく早大の恩師・先輩の御指導と多くの同僚教職員の方々の御援助と文心、教心の学生のご協力なしにはあり得なかったことから、ここに早稲田大学の学恩に対して尽きぬ感謝の気持ちをもつものであります。

それとともに何よりも本日の、私のつたない講義を最後まで我慢強く御清聴を賜りました皆様に対し特に心よりのお礼を申し上げる次第であります。

私にとりまして矢張り忘れ難い早大での大切な思い出となることは間違いないことですから、最後になりましたが、唯今のこの会を準備、設営して下さった教育学部、大学教務部、学生部ならびに早大教育学会、教育心理学教室の方々に厚くお礼申し上げて最終講義の結びとしたいと思います。

本日は誠に有難うございました。

最終講義はノート22ページを1時間40分で行うことがノートにメモ書きされています。講義の最終においてご自身の研究生活を簡潔に振り返っておられるのが興味深いです。

70歳で定年退職された後も先生はノートを執筆し続けられました。1990年から2004年までの間に136篇を書かれました。資料を読むために中野区の図書館に通い詰めたと先生ご自身から伺っています。それらは各種の研修会や研究会、大学や研究所、三島先生を囲む会等でお話しされました。通称、三島ノートと呼ばれてきた直筆ノート原稿のテーマは、日本思想、仏教思想、古代中国思想、古代インド思想、キリスト教思想、イスラム教思想、近現代西欧思想、人間実現への道やシニアライフ等の人間学など多岐にわたっています。

以上が三島二郎先生直筆講義ノートについてです。

先生と学生、教え子との交流については、早稲田大学在任中、教育心理学研究会（通称、教心研）の会長を長く務められました。教心研の夏合宿と春合宿には、駄菓子を詰めた段ボール箱を持参され、講演をされました（写真資料）。私も1977年の長野県白馬



1986年教え子との研修会（水上温泉）



1986年教心研夏合宿（苗場）

村から1986年の新潟県苗場の合宿に車の運転手としてお供しました。

また、定年退職後の1995年から2004年まで毎年、教え子有志により催された「三島先生を囲む会」で2時間を超える講演をしていただきました。

やはり、どのような場合でも、講演をなさるときには直筆ノートを持参され、それを読みながら話を進められました。その姿勢は最後まで続けられました。

先生はすべての人に対して分け隔てなく「さん付け」で呼ばれていました。いつも帽子をかぶって外出されました。背広は茶系でした。歩行はかなりの速さでした。食には淡泊でした。お好きな食べ物はコーヒーとトーストでした。旅もお好きでした。

先生の生き方と生活スタイルは哲学者のカントのようでした。他者や世界に対して開かれていましたが、真理の探究や学問に対して真摯かつ律儀で持続性が強固でした。まさに学者と呼ぶにふさわしい先生でした。

3. 臨床教育と早稲田大学心理学会

柴田良一（一文・1973）

私が入学した年は大隈講堂が占拠された昭和44年で、入学後間もなく構内がロックアウトされ授業が翌年までないという学生運動が盛んな頃でした。そのためか学会も活動を休止していたようで、私自身も後年まで承知していませんでした。その後の学会の再発足時の第一号会報では活動休止の事情はあまり書かれてはいませんが、当時の学内事情と深い関係があったのではないかと推察しています。

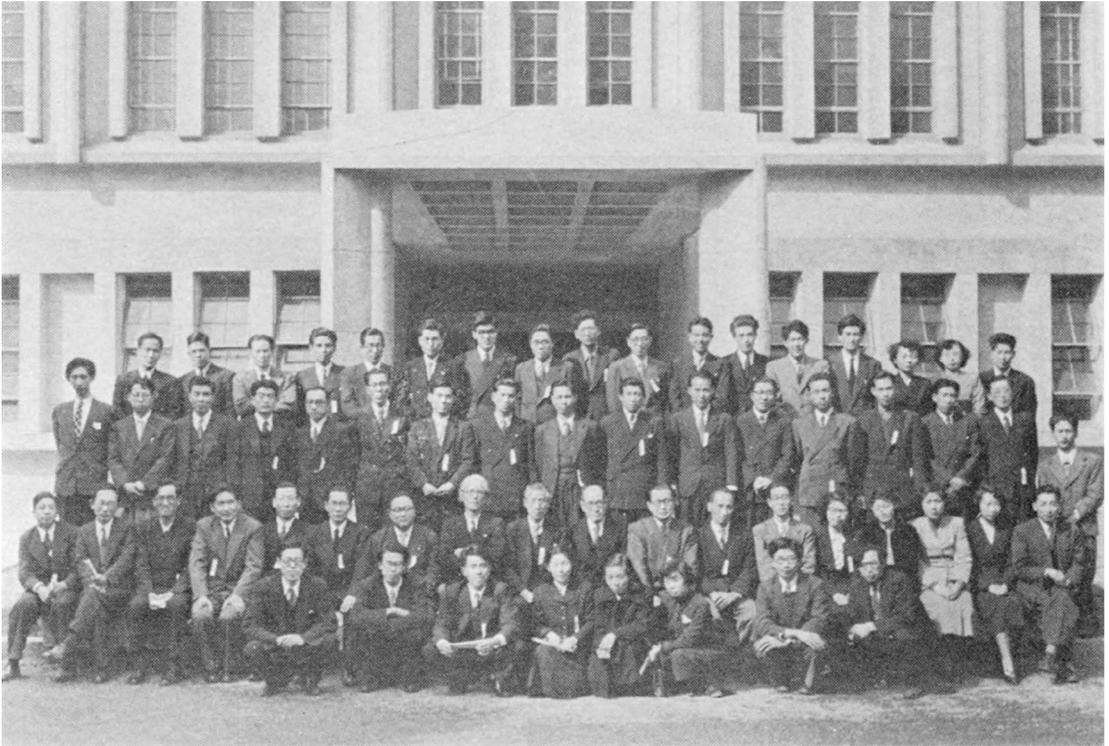
私が学会と始めて関わったのは、足立区で教育相談をしていた時に石井先生から会報に載せるから職場紹介を書くようにと言われた時でした。昭和60年にデンマーク留学から帰国し常勤の心理職として、いじめ、不登校対策、そして女子高生コンクリート殺人事件の対応に奔走していた平成元年の暮だったように記憶しています。

その後、臨床現場から大学に移り、岡山の大学にいた際に、同期の市原君から学会の仕事を手伝ってくれないかと言われ、今日まで関わることになりました。当時はすぐ2、3年で終わるだろうと軽く考えていたのですが、結果として20年以上関わりクロージングまで関わることになったのですが、会員数の減少に歯止めをかけることができず歴史ある学会を閉鎖することは誠に残念ですが、果たすべき役目が終わったのではないかと今は考えています。

私は臨床を専門としてきたのですが、在学中は臨床をやっているのは「飯は食えない」と周りからよく言われたものです。臨床は文献を読み、勉強しても、実際に現場でクライアントに接しないとよく理解できないところが多いと考えています。場合によってはミスや勘違いを起こしてしまうと考えています。しかし今までは学生が臨床に触れる機会は少ないのが実情でした。学会が果たしてきた役割のひとつに、卒業生が学生に現場の様子を生で伝えるということがあったと考えていますが、これは臨床を志す学生にとっては貴重な機会になったのではないかと考えています。しかし臨床心理士も社会に周知され、国家資格もスタートし、臨床教育も整備された今はその役割は終えても良いかもしれないと考えています。

第 2 章

活動記録



第1回 早稲田大学心理学会（昭和29年2月27日）

早稲田大学心理学会のこと

相馬一郎（一文・1953）

早稲田大学心理学会会報No.7に、第6回早稲田大学心理学会大会開催が昭和56（1981）年12月13日に決ったことがのっている^注。現在ある早稲田大学心理学会は実をいうと中断されていた学会を復活したものである。

早稲田大学心理学会大会が最初に開催されたのは、昭和29年2月27日である。昭和29年頃は、新制度の大学、大学院がほぼ完成された時期である。心理学の卒業生も、旧制度の時代とくらべ大幅に増えている。また現在とは比較にならないとはいえ、外国からの情報もかなり入るようになり、諸外国での心理学の発展に、わが国の心理学がおおいに刺激されているときでもあった。当時は、学生心理学会なども開かれ学会活動も盛んになりつつあった。このような背景のもと、早稲田の心理学がこれまでやってきたことをさらに発展させると同時に、他の心理学の領域との情報交換、卒業生との連けい、相

互の親ぼくということ在意図し、早大心理学会が発足したといえよう。

第2回は昭和29（1954）年10月16日に、第3回は昭和31（1956）年11月10日に、第4回は昭和33（1958）年11月8日、第5回は昭和35（1960）年11月12日、第6回は昭和36（1961）年11月、第7回は昭和41（1966）年5月29日にそれぞれ開催されている。第1回大会プログラムは次の通りであった。

早稲田大学心理学会第1回大会プログラム

I. 開会の辞		赤松保羅
II. 研究発表（午前の部）		
	10時30分～12時	座長 宮田義雄
		橋本鍵一
1. 中学校における担任によるガイダンスの一方法（他）	文京第二中学	岸 俊彦
2. ヒステリー精神病質少年の犯罪とその予防について	横浜少年鑑別所	砂山延雄
3. 連想検査について	群馬大学	潮田武彦
4. 文学の社会心理学的研究についての一つの試み	関東学院大学	永丘智郎
5. 職場報告	浦和児童相談所	吉井武雄
6. 職場報告	文部省教育研究所	山本研一
III. 総会（昼食の時間を含む）12時～1時30分		
教室現状報告		戸川行男
写真撮影		
IV. 研究発表（午後の部）		
	1時30分～3時	座長 渡辺祥輔
1. 両眼融合法による錯視像の観察結果について	福井大学	服部 清
2. 金属製品の工程分析に就いて	日本建鉄	谷村富男
3. 職業適性検査とその信頼度	東京都適性研究所	井坂 正
4. 内田・クレペリン作業検査について知られる二、三の事について	精神技術研究所	外岡豊彦
V. 懇親会	3時30分～6時 大隈会館	
VI. 閉会の辞		赤松保羅

第1回より第7回までの間に昭和37（1962）年には教育学部に教育心理学専修が新設されたことにより従来までの心理学教室が拡大され、早大心理学会の会員に教育心理の卒業生も含まれることとなった。そこで、学会としても会則を整備することになり、その原案作成にとりかかり、ほぼその原案を作成しおえ、総会での承認を求めることとなった。丁度その頃（昭和40年頃）より、授業料問題に端を発した大学紛争が起り、そ

れ以後約10年間にわたり大学で学会などを開催できない状態が続いた。このため早大心理学会も、第8回以後全く開催することが不可能になった。昭和49（1974）年頃になり学内もやや平静な状態になったので、清原健司教授が中心となり、早大心理学会の復活が計画された。心理学教室の50周年も間近かであることもあり、その両者についての会が10回程度50年、51年にかけてもたれた。この再開準備会には、清原教授を中心とし、早大心理学会が開催されていた当時、会に関与していた卒業生および教育心理の卒業生、それに41（1966）年以後の文学部心理学専攻の卒業生、更に文・教育・体育局・システム研の教員が加わった。そして会則の練り直し、大会のあり方、さらに50周年の企画などが議題となった。そして、昭和51（1976）年に早大心理学会の大会を開催すること、会則の原案をそれまでに再度練り直し、大会で承認をうること等が決められ、最初の大会開催は準備委員会がおこなうこととなった。この間準備委員の方々には多くのご苦勞をおかけしてしまったが、51年に復活第1回の大会を開催することができた。そこで会則の決定、会長、副会長、理事が選出され、以後の大会開催が準備委員会の手をなれたわけである。このように早大心理学会は学内事情により活動停止をよぎなくされた時期をはさみ、現在に至っている。ただ真に残念なことは、早大心理学会の再発足においてその中心となられた清原教授が第2回の大会をまたず急逝されたことである。心理学教室50周年記念をも含めて、清原教授がおられなかったらこれ程スムーズにいったかどうかわからなかったと思う。

早大心理学会の再発足はまさに清原教授によってできたというべきであろう。

※原文は、『早稲田大学心理学教室五十年史』（「早稲田大学心理学教室五十年史」編集委員会（編）、昭和56（1981）年12月13日出版、早稲田大学出版部）の115～117頁。

著者の相馬一郎氏（現 名誉教授）から、原文の掲載、文中に西暦を加えること、一部誤記の訂正、理解補助のための脚注を付けること、これらの許可を得ました。

注）早稲田大学心理学教室は昭和7（1932）年に創設され、昭和56（1981）年に50周年を迎え、昭和56年12月13日に第6回早稲田大学心理学会大会（体育局3階）を開催し50周年記念式典（大隈小講堂）を執り行った。

1. 早稲田大学心理学会再発足にあたって

早稲田心理学会会長 本明 寛 (文・1941)

早稲田大学心理学教室も間もなく50周年の日を迎える。教育学部の教育心理学科の卒業生を加えて、ここに新しく早大心理学会が再発足したことはまことに喜ばしいことだ。両学部では多少研究の分野も異なっている。従って広い視野が開かれた学会になったといえるだろう。学問の進展は急であり、研究情報はほう大である今日の心理学状態をみると、こうした学会が参会者に大きなてがかりを与えてくれるものと思うのである。

早大心理学会はもうひとつの側面をもっている。それは職業によって、疎遠になっている会員が、旧交をあたためる機会をもてる点である。このところ懇親会は盛会である。胸をひらいて話し合えるのは、同学、同級の者の間でなくては不可能であろう。

1人でも多くの会員に、再開された早大心理学会のことを知らせていただき、御参加を願いたいものである。

2. 近ごろ感じたこと

早稲田心理学会副会長 橋本鍵一 (文・1935)

学校を出てから、女学校、医学部の研究室、公務員と転々としながら、片足を刑務所につっこんで生活してきた。その間、母校とはご無沙汰しがちであったが、ここ2年程、再発足した早稲田心理学会の大会のお手伝いをさせて頂くことになって、いわゆる“在京世話人”の方々とたのしく仕事ができ、2回の大会の当日お集り頂けた約200人の同窓生も各々種々のシンポで非常にアット・ホームに討論されているように見受けられたことは、わたくしには誠にうれしかった。

わたくしのみるところでは、大会に集った入々が内的フィーリングをわかり持っていたせいで、そこでの活動が知的にも、感情的にもよい状態であったのだと思われた。われわれは、生まれて始めて見たものに、後に触れた時、心の安らぎを感じると同じように、始めて心理学を学んだところでの集りに安定感を持つせいなのかもしれない。わたくしたちは、このような集りの中での対話を通じて学的情報を整理する機会を持つことを是非考えなければならないのではなかろうか。

3. 早稲田大学心理学会の新発足によせて

早稲田心理学会副会長 三島二郎（文・1942）

早稲田大学に心理学を専攻する学科が創設されてほぼ半世紀になるのを機会に、従来の規約・組織を新たにした早大心理学会の再発足は誠に喜ばしいことである。特にこの学会の設立に中心となって尽力された清原建司教授の逝去は誠に痛恨にたえないものがあるが、創設者である赤松保羅先生ならびに戸川行男先生がご列席されて迎えることのできる50周年は本当に素晴らしいことである。

新しい本学会の母胎は昭和37年発足した教育学部教育心理学専修の卒業生を合わせて、総数2,000名を越え、あらゆる心理学関係の職域に活躍することにおいて、わが国の心理学を語る場合、これを抜きにしてはあり得ない一大勢力となっている。そこで50周年を迎えるに当り、既往を省みることも大切であるが、それに止ることなく、ここで一人一人が自らの雄大な未来図を描き、それに向って前進してゆく覚悟を新たにする機会としたいものである。

4. 第2回早稲田大学心理学会大会と総会（1977年）

1976年度の第1回大会に引き続き、1977年度の第2回早大心理学会が「心理学の将来」という統一テーマをもとにして、多数の参会者をえて開催された。大会の概要、およびシンポジウムのテーマは次のようであった。

- 期 日 1977年10月23日(日)
- 会 場 早稲田大学体育局校舎
- 参会者 235人（懇親会出席者を含む）

今大会のプログラムはシンポジウムを中心として生まれ、会長（旧）の戸川行男先生の特別講演、および大会総会（詳細は別項に記す）および懇親会が行われた。

シンポジウムの概要

シンポジウムは次のA～Eの6つのテーマに分かれ体育局の各室で行われた。この他に特別シンポジウムとして「21世紀の心理学のあり方」が開催された。各シンポジウムのテーマおよび話題提供者、司会者〔（ ）内〕は次のようであった。

A 「心身障害児の教育」(早大大学院 阿部健一)

横田 滋 調布中学校特殊学級

三谷嘉明 あけぼの学園

山田 孝 リハビリ学園

- B 「最近の老人問題」(職業研究所 兼子宙)
 守屋国光 東京都老人総合研究所
 田中徳明 老人開発研究所
 谷口幸一 愛国学園短期大学
- C 「最近の英米の心理学の状況」(群馬大学 木村駿)
 酒井 誠 三菱生命化学研究所 (現・佐賀医科大学)
 深沢道子 聖マリアンナ大学
 内山 勉 神奈川県立リハビリテーションセンター
- D 「現場の心理学教育に何を望むか」(与論科学協会 岡本淑人)
 大庫孝二 ライオン油脂
 小林 源 RVC株式会社
 山下順三 リクルートセンター
 佐藤慎一 立川児童相談所
- E 「人間における動機づけの諸問題」(早大文学部 織田正美)
 八尋華那雄 杏林大学
 吉田辰雄 東洋大学
 森谷信吾 日本建鉄

特別シンポジウム

- 「21世紀の心理学のあり方」(早大文学部 浅井邦二)
 生熊譲二 早大大学院博士課程
 黒須正明 早大大学院博士課程
 久保田新 早大大学院博士課程

10月23日の大会当日は午前9時より大会出席者の受付が開始され、9時30分から上記のシンポジウムが開催された。途中午前11時～12時の間、会長戸川行男先生の特別講演が行われ、引き続き午後の部のシンポジウムが4時まで行われた。当日は大会事務関係者を含めて約200名の参加者が集り、各会場とも、活発な議論がなされ盛況のうちに閉会した。

なお、A～Eの6つのシンポジウム終了後、会場は、体育局教室から22号館2階大教室に移され、ここで特別シンポジウムと総会が行われた。

懇親会の概要

総会に引き続き、大隈会館1階宴会場にて懇親会が約100人の参加者を集めて、早大富田正利氏の司会で開催された。教室の大先輩である赤松保羅先生、橋本鍵一先生(大会委員長)、戸川行男先生、伊藤安二先生などのあいさつのことばがあり、次いで新会

長の本明寛先生の紹介とあいさつが行われ、会は和気合々の雰囲気ですぐ午後9時過ぎまで続けられた。

シンポジウム終了後、早大心理学会総会は約100名の出席者により早大22号館2階大教室で行われた。早大心理学会再発足、新規約、50周年記念事業などに関するいくつかの重要議題が検討された。

5. 近況報告

早大心理学会名誉会長 赤松保羅（文・1917）

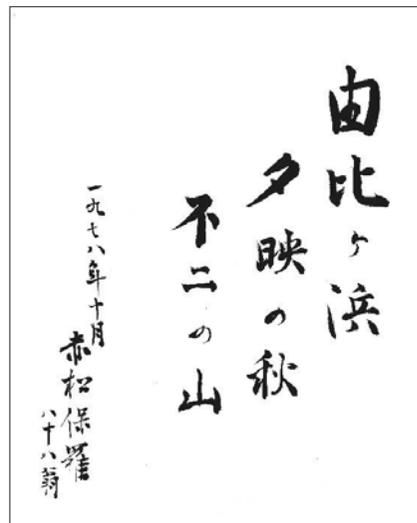
先日、新学年最初の講義（関東学院大学）の最中、急に後頭部が頸にかけて熱く感じ眩暈を起した。医師の診察を受けたが、特に何所にも病気はないが、御年（高齢）だからと露骨には言わぬが老化現象だとのことであった。立ったままで一時間半の講義は無理だから腰をかけるなどして楽に講義をすれば、今すぐにも大学を止める程のことはないという診断であった。

昨年の暮頃から急に体の衰弱を自覚したので鎌倉に新設の墓所をハガキの写真に作り、永遠の眠りの場所が出きたが、まだ心の準備が出来ていないと親しい者に便りなどをした。近頃も生死の問題と特に復活について宗教的解釈を思索している。然し思索する限り信仰の実存的意味の体験は不可能である。

読書の時間をさいて庭いじりをするが、今は躑躅（つつじ）の花盛り、パラは丹念に世話をした効があって今年は成績がよいだらうと楽しみにしている。長く書くとまた辻説法と言われるのでこれで近況の報告とする。



早稲田心理学年報第13巻（1981）より



米寿の時の色紙（1978年10月）

6. 赤松先生を偲ぶ 早稲田心理学年報 第13巻 1981

戸川行男 (文・1929)

赤松先生は昭和54年2月9日夕刻、関東学院大学の試験の答案の採点を終えられた時にお倒れに成りその後、1ヶ月半の闘病生活をなさいましたが翌55年8月29日、東京セントラル病院で、89歳でおなくなりになりました。ご病名は脳血栓との由です。心理学教室主催のご葬儀・告別式は9月18日、大隈講堂で挙行了しました。誠に残念です。心からご冥福をお祈りいたします。お墓は鎌倉の妙本寺とうかがっております。

さて私にとって赤松先生は私が大正15年に文学部哲学科に入った時からの先生ですから、先生の思い出を語れば際限がありません。私が先生になれたのも先生のおかげですが、心理学専攻の設立も心理学教室の設置も、みな先生のお力によるものです。心理学専攻には他専攻とちがって実験の器具が必要ですし、諸経費が必要ですが、こうした点についての本部との交渉は全部、先生におんぶした形でした。先生は名実ともに早稲田大学の心理学の生みの親です。

戦後、新制大学にきりかえられましたが、そのとき先生は高等師範部の学部長でしたので、これを教育学部に組織がえして、その中に理科系の専攻を設置し、また心理学専修を作るという大変厄介な仕事をなされました。当時高等師範部には国漢と英語といまひとつ社会教育という三科があったのですが、これを新制大学の学部にしようということになりますと文学部の国文・英文と重複しますし、さらに心理と教育の専攻を作ることに成りますといずれも文学部と重複するわけですし、理科系の科目についても同じ事情がありますので、ずい分いろいろな議論がありまして先生のお骨折りは大変なものであったと思います。赤松先生がおられてはじめて実現できたのだと思います。その他、大学の理事もなされ、体育局長をもなされ、特に記念会堂の建設にあたっては募金などで大変な苦勞をされました。

先生は大正6年から10年までアメリカに留学されました。ウッドワースの講義をきかれたそうでした、ウッドワースをいつも先生と呼んでいられました。その頃は米国でも心理学の学生に哲学の講義が多かったそうでした、ジェームスやデューキーのプラグマチズムの本を広くお読みになったそうです。私は学部の専攻は西洋哲学でしたので先生から哲学の講義と心理学の講義と半分半分おそわった形です。

先生の学的立場はそれですから、一学派に固執されない広いお考えでしたが、心理学の自然科学的傾向には賛同しておられ、学習研究や動物実験に深い関心をお持ちでした。ただ先生のわれわれ後進に対する態度は自由な幅の広いものでしたので、私達は全く思い思いの自分のテーマに取り組むことができました。早稲田大学心理学教室のひとつの特徴は自由な空気であると思いますが、これは赤松先生が作られた学的雰囲気であると思います。

先生は保羅（ポーロ）というお名前でおわかりますように、ご生家は紀州の新宮のキリスト教のご家庭でした。大学ご定年後、とくにここ10年ほど先生は強い宗教的関心をお持ちでして、靈魂不滅の信仰のことなど私達にもよくお話になりました。先生は戦前から戦後にかけてずい分ながい間、文学部の哲学会の会長をしておいでになりました。先生は心理学者であるだけでなく1人の哲学者でもあられ思索家でもあられたと思います。

私はかけ出し時代からこの年まで先生に終始ご厄介になり御教えを受けて参ったのですが、先生のお口から他人の悪口というものをきいたおぼえがありませんし、どなられたことも、お説教された記憶もありません。思い出されますのはただ、いつも慈父のような先生のお顔です。

第3節 歴代の会長と副会長

期間	会長	副会長		
1954年～1962年3月	赤松保羅 (文・1917)			
1962年～1973年3月	戸川行男 (文・1929)			
1966年～1976年	(学会活動中断期)			
1976年3月～1977年10月	本明 寛 (文・1941)	橋本鍵一 (文・1935)	三島二郎 (文・1942)	
1977年10月～	本明 寛 (文・1941)	橋本鍵一 (文・1935)		
1984年11月～1986年	島津貞一 (文・1941)	浅井邦二 (文・1948)	小野 顕 (文・1948)	
1986年～1989年10月	島津貞一 (文・1941)			
1989年10月～1992年11月	浅井邦二 (文・1948)	本間弘光 (文・1947)	小野 顕 (文・1948)	橋本仁司 (一文・1952)
1992年11月～1994年10月	小野 顕 (文・1948)	本間弘光 (文・1947)	岡本淑人 (文・1950)	橋本仁司 (一文・1952)
1994年10月～1996年総会	木村 裕 (一文・1965)	本間弘光 (文・1947)	岡本淑人 (文・1950)	橋本仁司 (一文・1952)
1996年総会～1998年総会	木村 裕 (一文・1965)			
1998年総会～2000年総会	木村 裕 (一文・1965)			
2000年総会～2002年総会	木村 裕 (一文・1965)	本間弘光 (文・1947)	朝岡美好 (一文・1990)	

2002年総会～2004年総会	木村 裕 (一文・1965)	本間弘光 (文・1947)	朝岡美好 (一文・1990)	
2004年総会～2006年総会	木村 裕 (一文・1965)	本間弘光 (文・1947)	朝岡美好 (一文・1990)	
2006年総会～2008年総会	木村 裕 (一文・1965)	本間弘光 (文・1947)	市原 信 (一文・1973)	
2008年総会～2010年総会	木村 裕 (一文・1965)	市原 信 (一文・1973)		
2010年総会～2012年総会	木村 裕 (一文・1965)	市原 信 (一文・1973)		
2012年総会～2014年総会	石井康智 (一文・1970)	市原 信 (一文・1973)		
2014年総会～2016年総会	石井康智 (一文・1970)	小林 源 (一文・1963)		
2016年総会～2018年総会	石井康智 (一文・1970)	小林 源 (一文・1963)		
2018年総会～2020年	石井康智 (一文・1970)	小林 源 (一文・1963)		

第4節 会員数の推移

早稲田大学心理学会は1954年に発足、1976年に再発足であるが、以下の表は、会員数、賛助会員の記録が確認できた結果に基づいている。

年度	会員数	出典
1987年度	363名	1
1988年度	－	
1989年度	－	
1990年度	－	
1991年度	340名	1
1992年度	306名	1
1993年度	300名	1
1994年度	301名	1
1995年度	337名	1
1996年度	321名	1
1997年度	277名	1
1998年度	275名	1
1999年度	273名	1
2000年度	227名	1
2001年度	221名	1
2002年度	167名	1
2003年度	157名	1

年度	会員数	出典
2004年度	140名	1
2005年度	153名	1
2006年度	249名	2
2007年度	240名	2
2008年度	231名	2
2009年度	201名	3
2010年度	190名	3
2011年度	184名	3
2012年度	182名	3
2013年度	174名	3
2014年度	168名	3
2015年度	157名	3
2016年度	154名	3
2017年度	148名	3
2018年度	146名	3
2019年度	146名	3
2020年度	146名	3

- 出典注記 1 収支決算資料における会費納入者数
 2 会員名簿における会員数
 3 会員名簿における正会員数

■ 賛助会員

(対象期間については記録があるもののみ記載)

実務教育出版	1987年～2001年
金子書房	1987年～2001年
日本文化科学社	1987年、1994年～2001年
くもん子ども研究所	1994年～2001年

第5節 | 年次大会開催：公開講演会の記録

1. 開催記録一覧（第1回～第25回）

回	開催日／会場	講演名／演者
第1回	1954年2月27日 (昭和28年度)	I. 開会の辞 赤松保羅 (早稲田大学) II. 研究発表 座長：宮田義雄・橋本鍵一 1. 中学校における担任によるガイダンスの一方法 (他) 岸 俊彦 (文京第二中) 2. ヒステリー精神病質少年の犯罪とその予防について 砂山延雄 (横浜少年鑑別所) 3. 連想検査について 潮田武彦 (群馬大学) 4. 文学の社会心理学的研究についての一つの試み 永丘智郎 (関東学院大学) 5. 職場報告 吉井武雄 (浦和児童相談所) 6. 職場の報告 山本研一 (文部省教育研究所)

回	開催日／会場	講演名／演者
		Ⅲ. 総会 教室現状報告 戸川行男 (早稲田大学) 写真撮影 Ⅳ. 研究発表 座長：渡辺祥輔 1. 両眼融合法による錯視像の観察結果について 服部 清 (福井大学) 2. 金属製品の工程分析に就いて 谷村富男 (日本建鉄) 3. 職業適性検査とその信頼度 井坂 正 (東京都適性研究所) 4. 内田・クレペリン作業検査について知られる二、三の事 について 外岡豊彦 (精神技術研究所) Ⅴ. 閉会の辞 赤松保羅 (早稲田大学)
第2回	1954年10月16日 (昭和29年度)	
第3回	1956年11月10日 (昭和31年度)	
第4回	1958年11月8日 (昭和33年度)	
第5回	1960年11月12日 (昭和35年度)	
第6回	1961年11月10日 (昭和36年度)	
第7回	1966年5月29日 (昭和41年度)	
再発足後		
第1回	1976年3月25日 (昭和51年度)	
第2回	1977年10月23日 (昭和52年度)	特別講演 (タイトル不明) 演 者：戸川行男 (早稲田大学名誉教授・元会長) シンポジウムA 「心身障害児の教育」 司 会：阿部健一 (早稲田大学大学院) 話題提供：横田 滋 (調布中学校特殊学級) 三谷嘉明 (あけぼの学園) 山田 孝 (リハビリ学園)

回	開催日／会場	講演名／演者
	22号館2階 大教室	<p>シンポジウムB 「最近の老人問題」 司 会：兼子 宙（雇用職業総合研究所） 話題提供：守屋國光（東京都老人総合研究所） 田中徳明（（財）老人福祉開発センター） 谷口幸一（愛国学園短期大学）</p> <p>シンポジウムC 「最近の英米の心理学の状況」 司 会：木村 駿（群馬大学教育学部） 話題提供：酒井 誠（三菱生命科学研究所） 深澤道子（聖マリアンナ大学） 内山 勉（神奈川県立リハビリテーションセンター）</p> <p>シンポジウムD 「現場の心理学教育に何を望むか」 司 会：岡本淑人（与論科学協会） 話題提供：大庫孝二（ライオン油脂） 小林 源（RVC株式会社） 山下順三（リクルートセンター） 佐藤慎一（立川児童相談所）</p> <p>シンポジウムE 「人間における動機づけの諸問題」 司 会：織田正美（早稲田大学文学部） 話題提供：八尋華那雄（杏林大学） 吉田辰雄（東洋大学） 森谷信吾（日本建鉄）</p> <p>特別シンポジウム 「二十一世紀の心理学のあり方」 司 会：浅井邦二（早稲田大学文学部） 話題提供：生熊讓二（早稲田大学大学院） 黒須正明（早稲田大学大学院） 久保田新（早稲田大学大学院）</p>
第3回	1978年11月19日 （昭和53年度）	
第4回	1979年9月8日 （昭和54年度）	
第5回	1980年8月28日 （昭和55年度）	
第6回	1981年12月13日 （昭和56年度） 体育局3階	「心理学の将来」
第7回	1982年 期日不明 （昭和57年度）	
第8回	1983年11月20日 （昭和58年度）	<p>シンポジウムI 「老年期の臨床心理」 司 会：小杉正太郎（早稲田大学）</p>

回	開催日／会場	講演名／演者
		<p>話題提供：井上勝也（東京都老人総合研究所） 長田久雄（東京都老人総合研究所） 谷口幸一（愛国学院短期大学）</p> <p>シンポジウムⅡ 「校内暴力のメカニズム」 司 会：島津貞一（東海女子大学） 話題提供：砂山延雄（尚美音楽短期大学） 中島武二（横浜少年鑑別所） 高桑益行（仙台少年鑑別所）</p>
第9回	1984年11月11日 （昭和59年度）	<p>シンポジウムⅠ 「コマーシャル・メッセージと心理学」 司 会：中村宣夫（博報堂） 話題提供：実川万里栄（日産自動車） 中村 博（博報堂）</p> <p>シンポジウムⅡ 「離婚と子ども」 司 会：瓜生 武（東京家庭裁判所） 話題提供：藤沼みどり（横浜家庭裁判所調停委員） 片倉昭子（立川婦人相談センター）</p>
第10回	1985年10月19日 （昭和60年度）	<p>特別記念講演 「現代心理学の動向」 「高年発達研究の視点」 演 者：本明 寛（早稲田大学文学部） 三島二郎（早稲田大学教育学部）</p>
第11回	1986年11月8日 （昭和61年度）	<p>特別講演 「早稲田社会心理学と私」 演 者：伊藤安二（本学名誉教授）</p> <p>シンポジウム 「所沢新学部（人間科学部）の紹介」 話題提供：浅井邦二（本学教授） 相馬一郎（本学教授） 上田雅夫（本学教授） 春木 豊（本学教授）</p>
第12回	1987年11月14日 （昭和62年度）	<p>特別講演 「企業組織とストレス」 演 者：田崎醇之助（本学教授）</p>
第13回	1988年12月10日 （昭和63年度）	<p>シンポジウム 「心理学とコンピューター」 司 会：黒須正明（日立製作所デザイン研究所） 話題提供：中山 剛（富山大学工学部） 野島栄一郎（人間科学部）</p>
第14回	1989年10月28日 （昭和64年度） 文学部第1会議室	<p>講演 「環境における認知」 司 会：木村 裕（早稲田大学文学部） 演 者：相馬一郎（早稲田大学人間科学部）</p>

回	開催日／会場	講演名／演者
		シンポジウム 「時代の流れと行動表現」 「中学生のすがた」 「非行にみる時代」 司 会：木村 駿 (群馬大学) 話題提供：横尾武成 (国分寺市立教育研修センター) 川邊 譲 (東京少年鑑別所)
第15回	1990年11月10日 (平成2年度) 人間科学部	小講演 「人間科学部と心理学 ―心理学最前線―」 司 会：春木 豊 (早稲田大学) 児玉昌久 (早稲田大学) 「モチベーションに関する1、2の問題」 演 者：青柳 肇 (早稲田大学) 「認識の生態学」 演 者：佐々木正人 (早稲田大学) 「空間と場所の心理」 演 者：佐古順彦 (早稲田大学) 「臨床実践研究の客観化を求めて」 演 者：門前 進 (早稲田大学) 「精神生理学の現状と将来」 演 者：山崎勝男 (早稲田大学)
第16回	1991年10月26日 (平成3年度) 文学部第1会議室	シンポジウム 「いま、臨床現場では」 司 会：新田泰生 (宝仙学園短期大学) 「増えている摂食障害」 話題提供：中村延江 (日本大学板橋病院) 「コラージュ療法の試み」 話題提供：杉浦京子 (日本医科大学) 「思春期の事例 ―個人から家族へ―」 話題提供：多賀谷篤子 (東京都教育研究所)
第17回	1992年11月7日 (平成4年度) 文学部第1会議室	シンポジウム 「現代の男性を考える」 司 会：春木 豊 (早稲田大学人間科学部) 河合美子 (成城墨岡クリニック) 「非行家族における男性像」 話題提供：湯谷 勝 (埼玉県警察本部) 「臨床ケースにみる女性との関係」 話題提供：中村延江 (中央心理研究所) 「現代の役割は何か」 話題提供：木村 駿 (明星大学)
第18回	1993年月日不明 (平成5年度)	
第19回	1994年10月29日 (平成6年度) 文学部第1会議室	シンポジウム 「トークバトル『異文化体験』―世代差を感じる時」 司 会：岡本淑人 (白鷗大学) 話題提供：小野崎博 (博報堂)

回	開催日／会場	講演名／演者
		<p>話題提供：西川洸一（花王） 高見澤たか子（生活評論家） 吉川政夫（東海大学） 阿部健一（大泉保育福祉専門学校） 岡島陽子（文学部） 大和かすみ（文学部） 佐藤保子（文学部） 川崎友嗣（日本労働研究機構） 寺西美恵子（大和スポーツランド） 休徳直子（日本テキサス・インスツルメンツ） 高際ひろみ（日電プリンティング）</p> <p>講演会 「気功におけるからだところろ」 司 会：石井康智（早稲田大学文学部） 演 者：仲里誠毅（日本気功科学研究所所長）</p>
第20回	1995年5月20日 （平成7年度） 文学部453教室	<p>シンポジウム（1）臨床心理学研究 「阪神大震災被災者の心理」 コーディネーター：河合美子（日本福祉教育専門学校） 話題提供：島津貞一（東海女子大） 北村圭三（神戸女学院大）</p> <p>シンポジウム（2）障害児教育研究会 「障害児教育の現状」 コーディネーター：武藤直子（全国療育相談センター） 話題提供：大見川正治（文教女子短大）</p> <p>シンポジウム（3）生理心理学・精神生理研究会 「精神生理学のトピックス」 コーディネーター：市原 信（東京家政学院大） 「夢を追って」 話題提供：竹内朋香（学術振興会特別研究員） 「先端技術によるアプローチ」 話題提供：佐々木由香（郵政省通信総合研究所） 「やる気と脳波」 話題提供：正木宏明（早稲田大学大学院）</p> <p>シンポジウム（4）非行心理学研究会 「鑑別業務と処遇の仕事から見た最近の少年非行の特質」 コーディネーター：高桑益行（早稲田大学） 話題提供：川邊 讓（水戸少年鑑別所） 藤野京子（法務省） 浜井浩一（法務省）</p> <p>シンポジウム（5）意識心理学研究会 「企業で働き続けるということ ―早大OB1236名の履歴書―」 コーディネーター：矢野裕之（日通総研・早大大学院文研） 話題提供：鈴木宏昌（早稲田大学商学部） 内藤雄大（早大大学院商研） 話題提供：矢野裕之（日通総研・早大大学院文研）</p>

回	開催日／会場	講演名／演者
		<p>シンポジウム (6) マスコミ研究会 「阪神大震災の報道を振り返って」 コーディネーター：本間弘光 (早稲田大学) 岡本淑人 (白鷗大学) 川本直彦 (電通ブロックス)</p> <p>話題提供：嶋内義明 (読売テレビ) 井徳正吾 (博報堂)</p> <p>公開講演会 「新しい時代における人間の問題」 司 会：川崎 徹 (文化女子大) 演 者：本明 寛 (女子美術大学理事長・早稲田大学名誉教授)</p>
第21回	1996年5月18日 (平成8年度) 本部7号館 小野講堂	<p>ポスター発表 大学院生</p> <p>シンポジウム (1) 臨床心理学研究会 「日本の集団における個のあり方—臨床心理学の観点から—」 コーディネーター：新田泰生 (宝仙学園短期大学) 司 会：深澤道子 (早稲田大学教授) 話題提供：横山哲夫 (経営コンサルタント) 角張憲正 (東部中央病院) 新田泰生 (宝仙学園短期大学) 越川房子 (早稲田大学講師)</p> <p>シンポジウム (2) 障害児教育研究会 「カウンセリング終了後のクライアントとカウンセラーの対話—不登校をめぐる—」 コーディネーター：武藤直子 (全国療育相談センター) 話題提供：伊藤正雄 (武蔵病院小児科外来) 小泉桃代 (杉並区「さざんか教室」)</p> <p>シンポジウム (3) 非行心理学研究会 「非行少年と会うことの意義—治療構造論の視点から—」 コーディネーター：高桑益行 (早稲田大学) 話題提供：瓜生 武 (家庭問題情報センター)</p> <p>シンポジウム (4) 意識心理学研究会 「経済行動における“意識”について」 コーディネーター：矢野裕之 (日通総合研究所) 話題提供：所 正文 (国士館大学政治経済学部)</p> <p>シンポジウム (5) マスコミ研究会 「テレビを考える」 コーディネーター：本間弘光 (早稲田大学) 話題提供：松井光史 (電通) 寺沢美彦 (日本福祉教育専門学校) 松井陽通 (博報堂)</p> <p>シンポジウム (6) 発達臨床心理学研究会 「発達臨床とは」 コーディネーター：中田洋二郎 (精神・神経センター精神保健研究所)</p>

回	開催日／会場	講演名／演者
		<p>コーディネーター：井原成男（公衆衛生院） 司 会：馬岡清人（日本女子大学） 話題提供：井口由子（こどもの城小児保健クリニック） 中田洋二郎（精神・神経センター精神保健研究所） 奥山真紀子（大宮小児保健センター）</p> <p>パネルディスカッション 「現代のいじめを考える —子どもがいじめ・大人のいじめ—」 司 会：八木亜希子（フジTVアナウンサー） パネラー：田崎醇之助（早稲田大学システム科学研究所） 今村洋子（名古屋刑務所） 海野千細（八王子教育センター）</p>
第22回	1997年5月31日 （平成9年度） 文学部第2会議室 文学部第1会議室	<p>ポスター発表 大学院生・卒業生</p> <p>公開講演 「最先端の脳研究」 司 会：宇津木成介（神戸大学） 演 者：杉下守弘（東京大学音声言語研究所所長・教授）</p> <p>文学部第1会議室 シンポジウム (1) 臨床・非行・発達臨床心理学研究会 合同シンポジウム 「女性・家族・仲間・社会 —新しいサポートのありかた—」 「女性の回復の場」 「家庭における育児力の低下をどう補うか —今後の臨床心理士の役割—」 コーディネーター：河合美子（日本福祉教育専門学校） 司 会：深澤道子（早稲田大学教授） 話題提供：岡島陽子（フリッカ・ビーウーマン） 三沢直子（鉄道弘済会福祉相談所）</p> <p>文学部大学院演習室305 シンポジウム (2) 障害児教育研究会 「知覚障害者の職業をめぐる諸問題」 コーディネーター 武藤直子（親子相談センター） 話題提供 館 暁夫（職業訓練大学校）</p> <p>文学部大学院演習室306 シンポジウム (3) 生理心理学・精神生理学研究会 「生理心理・精神生理学研究室の動向」 コーディネーター・司会：市原 信 話題提供：正木宏明（早稲田大学）</p> <p>文学部大学院演習室307 シンポジウム (4) 意識心理学研究会シンポジウム 「心理学における、正しい『エンジニアごっこ』のあり方について」 コーディネーター：矢野裕之（日通総合研究所） 話題提供：矢野裕之（日通総合研究所）</p> <p>文学部大学院演習室308 シンポジウム (5) マスコミ研究会 「政治とテレビへの警鐘」 話題提供：田中義英（日本自動車連盟） 松本光史（電通） 本間弘光（早稲田大学）</p>

回	開催日／会場	講演名／演者
第23回	1998年5月30日 (平成10年度) 文学部第5会議室	ポスター発表 大学院生・卒業生 早稲田大学キャンパスツアー
第24回	1999年5月29日 (平成11年度)	ポスター発表 大学院生・卒業生 パネルディスカッション 「スクールカウンセラー：現場からの報告」 司 会：伊東孝郎（早稲田大学大学院） 基調講演：岡本淳子（東京都立多摩教育研究所・東京臨床心理士会運営委員） パネラー：谷田部多賀子（青葉クリニック） 滝川桜子（福生教育相談室） 伊東孝郎（早稲田大学大学院）
	1999年9月25日 文学部38号館 Avホール	早稲田大学心理学会公開講演会 「こころ・脳・薬 —脳ホルモンと行動—」 演 者：亀山 勉（名城大学薬学部名誉教授・ジャパン精神薬理研究所所長）
第25回	2000年5月27日 (平成12年度)	ポスター発表 大学院生・卒業生 パネルディスカッション 「『スピリチュアル・ケア』—ホスピスでの実践とDeath Educationの視点から—」 司 会：重村朋子（日本医科大学学生相談室） パネラー：小澤竹俊（横浜甕生病院ホスピス病棟長） 鈴木康明（国士舘大学）

2. 開催記録一覧（第26回～第43回）：開催概要・要約記事掲載URL

回	開催日／会場	講演名／演者／掲載瓦版／URL
第26回	2001年5月27日 (平成13年度) 文学部453教室 (34号館)	パネルディスカッション 司 会：八木亜希子（一文1988；フリーアナウンサー） パネラー：今井保次（一文1974；(財)社会経済生産性本部メンタルヘルス研主任研究員） 岩佐実次（一文1976；(株)リソー教育代表） 小豆川裕子（一文1981；ニッセイ基礎研主任研究員） 志田一彦（一文1981；(株)イクスピアリ総務部長） 掲載瓦版：2001年パネルディスカッションレポート URL： http://www.waseda.jp/assoc-wpa/kawara2001_r3.htm 4人のパネラーは、心理学専修を卒業後、様々なキャリアを経ながら自己実現を求めて来られた。成長を促す要因として、

回	開催日／会場	講演名／演者／掲載瓦版／URL
		客観的視点、環境の変化や困難、出会いと人間関係、しっかりした目標、などの重要性が論じられた。
第27回	2002年6月22日 (平成14年度) 文学部453教室 (34号館)	コミュニケーションはどのように形成されていくか —人間とロボット— 司 会：大藪 泰 (早稲田大学文学部教授) 話題提供：「言葉の発生」小嶋祥三 (京都大学霊長類研究所教授) 「ロボットと行動、言葉、心」高西淳夫 (早稲田大学理工学部教授) 掲載瓦版：2002年秋号 URL：http://www.waseda.jp/assoc-wpa/kawara3_5_1102.htm 人間と類人猿はDNAの塩基配列ではほとんど差がない。だが、その表われには大きな差がある。特に人間の言語は隔絶している (小嶋)。人間型ロボットの開発を通して、人間の運動、感情、言葉の本質に迫りたいと考えている (高西)。
第28回	2003年6月28日 (平成15年度) 文学部453教室 (34号館)	脳と創造 演 者：岩田 誠 (東京女子医大附属脳神経センター教授) 掲載瓦版：2003年秋号 URL：http://www.waseda.jp/assoc-wpa/kawara5_5_1103.htm 現実と幻覚と創造の境界はいかに曖昧なのか。前頭葉は「嘘つき脳」。私に見える映像、聴こえる音は、後頭葉が捉えた現実世界に記憶を重ねて作られたもの。それがスマタナに曲を作らせ、関根正次に絵を描かせた。
第29回	2004年6月19日 (平成16年度) 文学部453教室 (34号館)	クオリアとは何か —脳と心の関係を探る— 演 者：茂木健一郎 (ソニーコンピュータサイエンス研究所シニアリサーチャー・東京工業大学大学院客員助教授) 掲載瓦版：2004年秋号 URL：http://www.waseda.jp/assoc-wpa/kawara7_5_021505r.htm クオリアという言葉キーワードとして、人間の意識の謎に迫りたいと考えている。脳という物質から意識という現象が現れるのはなぜか？そのメカニズムはまだ解明されていない。
第30回	2005年6月18日 (平成17年度) 文学部453教室 (34号館)	コトバとコトバのない世界 —認知症 (痴呆症) を通して見るコミュニケーションの構造— 演 者：大井 玄 (東京大学名誉教授) 掲載瓦版：2005年春秋合併号 URL：http://www.waseda.jp/assoc-wpa/kawara8_7_042606.htm 若いころは理性、言語、論理によって多くのことが理解できると考えていたが、認知症の高齢者と接するうちに、世界観が変容した。コトバとコトバのない世界。
第31回	2006年6月10日 (平成18年度) 小野記念講堂	生命の時間 演 者：本川達雄 (東京工業大学教授)

回	開催日／会場	講演名／演者／掲載瓦版／URL
		<p>掲載瓦版：2006年秋号 URL：http://www.waseda.jp/assoc-wpa/kawara10_6_101106.html</p> <p>ナマコには目もなく、脳もない。動きも遅いが、ちゃんと生きている。個々の生命には、それぞれの世界があり、時間がある。大自然のリズムの中に、すべての生命が適応し、ながらえている。</p>
第32回	2007年6月16日 (平成19年度) 小野記念講堂	<p>「身体心理学の提唱」～東洋の身体論に注目し欧米の心理学に新しいパラダイムの提案を試みるものである～</p> <p>演 者：春木 豊（早稲田大学名誉教授）</p> <p>掲載瓦版：2007年秋号 URL：http://www.waseda.jp/assoc-wpa/kawara12_7_1007.html</p> <p>人間の動作は随意的、内臓の動きなどは不随意的。しかし呼吸はその中間にある。身体と心は相互に影響を及ぼしあっている。心身の相関について考える。</p>
第33回	2008年6月28日 (平成20年度) 文学部453教室 (34号館)	<p>現代社会の分析</p> <p>演 者：小田 晋（帝塚山学院大学教授、国際医療福祉大学客員教授）</p> <p>掲載瓦版：2008年秋号 URL：http://www.waseda.jp/assoc-wpa/kawara14_7_020309.htm</p> <p>古今東西にわたる広範な学識を背景に、秋葉原殺傷事件のようなトピカルな話題や英国の昔の猟奇的な事件などを淡々と冷静に解説された。</p>
第34回	2009年6月27日 (平成21年度) 文学部453教室 (34号館)	<p>皮膚と心</p> <p>演 者：山口 創（桜美林大学准教授）</p> <p>掲載瓦版：2009年秋号 URL：http://www.waseda.jp/assoc-wpa/yamaguchi2009_1r.pdf</p> <p>触覚という未知の領域に関心と呼び覚まされる知見の数々、子どもの頃の身体接触が人への安心感や自尊心を育むという研究成果に惹きつけられた。一方で、親の育児ストレスにも配慮するバランス感覚も人気の理由と納得した。</p>
第35回	2010年6月19日 (平成22年度) 文学部453教室 (34号館)	<p>ネガティブ・マインド ～うつを知って、うつと付き合う～</p> <p>演 者：坂本真士（日本大学文理学部心理学科教授）</p> <p>掲載瓦版：2010年秋号 URL：http://www.waseda.jp/assoc-wpa/sakamoto2010_1.pdf</p> <p>ネガティブ・マインドは社会心理学と臨床心理学に共通の態度・対人感情・印象形成・スキーマといったこととつながる。「うつ状態を知り・付き合う」ことは臨床の問題であるが社会心理学のテーマにもある。</p>

回	開催日／会場	講演名／演者／掲載瓦版／URL
第36回	2011年6月25日 (平成23年度) 小野記念講堂	仮想的身体運動としての心 演 者：月本 洋 (東京電機大学教授) 掲載瓦版：2011年秋号 URL：http://www.waseda.jp/assoc-wpa/kawara20.ppt 心の発達を脳内の運動指令のはたらきに焦点を当て実証的に解明するアプローチは興味深かった。心と身体運動の相互作用について考える良い機会を与えていただいた。 [詳しくはP53]
第37回	2012年6月23日 (平成24年度) 小野記念講堂	災害と人間行動 ～災害に負けないしなやかな社会の創造～ 演 者：林 春男 (京都大学防災研究所巨大災害センター教授) 掲載瓦版：2012年秋号 URL：http://www.waseda.jp/assoc-wpa/kawara22_2012.pdf 巨大地震の様相を踏まえて、防災のあり方が論じられた。阪神淡路大震災 (1995年)、東日本大震災 (2011年) が参照され、レジリエンスを備えた都市構築の必要性が指摘された。都市の復興に10年かかること、また、被災者には住居と人間関係の回復が最重要事項であることなどが示された。 [詳しくはP56]
第38回	2013年6月22日 (平成25年度) 文学部453教室 (34号館)	プロダクティブ・エイジング2040年高齢者4割の社会を考える キーノートスピーカー：谷口幸一 (東海大学教授) 指定討論：所 正文 (立正大学教授) 掲載瓦版：2013年冬号 URL：http://www.waseda.jp/assoc-wpa/kawara24_010214.pdf 「プロダクティブ・エイジング：2040年高齢者4割の社会を考える」のシンポを実施。前半は聴衆との問答形式で高齢者イメージや高齢社会の認識を問うエイジングクイズを実施、後半は老年学研究や2040年問題の質疑を行った。 [詳しくはP60]
第39回	2014年6月28日 (平成26年度) 文学部33号館 第1会議室	目からウロコの睡眠学 ～ホットミルクから金縛りまで～ 演 者：福田一彦 (江戸川大学社会学部人間心理学科教授) 掲載瓦版：2014年冬号 URL：http://www.waseda.jp/assoc-wpa/kawara14_122714.pdf さまざまな機器の発達により、睡眠中の脳の働きを観察することが可能になり、金縛りとか幽体離脱とか、今まで神秘的と考えられていた現象も科学的に説明ができるようになってきた。 [詳しくはP65]
第40回	2015年6月6日 (平成27年度) 文学部382教室 (36号館)	腰痛を解く心のナゾ 演 者：丹羽真一 (福島県立医大会津医療センター特任教授・福島県立医科大学名誉教授)

回	開催日／会場	講演名／演者／掲載瓦版／URL
		<p>掲載瓦版：2015年冬号 URL：http://www.waseda.jp/assoc-wpa/kawara122115.pdf</p> <p>近年、腰痛に心が関係し、原因の大きな部分を占めているという事がわかった。丹羽先生は福島県立医科大学にて整形外科の先生と共同でこの解明のためのご臨床研究に当たってこられた。腰痛の裏にある心について多角的に御講義いただき、聴衆の皆様方にも腰痛に対する新たな視点としてご納得いただいた。心理は医学の中で扱われる痛みともこんなに深くかかわっているのだということを深く認識した。</p> <p>[詳しくはP68]</p>
第41回	2016年6月18日 (平成28年度) 文学部453教室 (34号館)	<p>生体リズムに基づいた健康法</p> <p>演 者：柴田重信（早稲田大学理工学術院教授・先端生命医学センター）</p> <p>掲載瓦版：2016年冬号 URL：http://www.waseda.jp/assoc-wpa/kawara010617_r1.pdf</p> <p>1日の活動を支える体内時計にサーカディアンリズムがある。この時間軸からは食・栄養問題（「時間栄養学」）の視点からは朝食抜き行動、夜型タイプの行動、老人と食など、時間軸からの健康科学が必要である。</p> <p>[詳しくはP72]</p>
第42回	2017年6月24日 (平成29年度) 小野記念講堂	<p>高次脳機能からみた大人の「発達障害」</p> <p>演 者：坂爪一幸（早稲田大学教育・総合科学学術院教授）</p> <p>掲載瓦版：2017年秋号 URL：http://www.waseda.jp/assoc-wpa/kawara2017_12.pdf</p> <p>「融通が利かない」「自己中心的」等の対人関係の特徴が、高次脳機能の発達の遅れや偏りに起因することが知られるようになってきた。大人になるまでの苦悩の影響や、多面的な支援の在り方について紹介いただいた。</p>
第43回	2018年6月23日 (平成30年度) 小野記念講堂	<p>発達障害の医療・教育・療育の最前線 ―連携と今後の方向性に向けて―</p> <p>司会・コーディネーター：坂爪一幸（早稲田大学教育・総合科学学術院教授）</p> <p>シンポジスト：林 寧哲（ランディック日本橋クリニック） 丹野哲也（東京都教育庁指導部） 湯汲英史（公益社団法人発達協会）</p> <p>掲載瓦版：2018年冬号 URL：http://www.waseda.jp/assoc-wpa/kawara_010619.pdf</p> <p>言葉は広まっても理解・対応が追い付かない発達障害を、精神科医療・教育行政・療育、3つの専門領域の取り組みから立体的にとらえることができた貴重な機会。連携のために何を学び何を強みとするか、心理職の課題も見えてきた。</p>

3. 仮想的身体運動としての心

月本 洋（東京電機大学）

研究分野ですが、元々は人工知能で、私の研究室は、人工知能研究室という名前を付けていますが、身体性人工知能というテーマを掲げるとですね、どうも従来の人工知能では納まらないようになって来ました。もうひとつは、脳機能画像からのデータマイニングです。データマイニングとは、大量のデータからの知識やパターンの発見ということです。

約10年前ですか、人工知能には身体が必要であるという結論に達しました。これを聞くと、「えっ」と思われる方が多いと思うのですが、ふつう人工知能の研究では、知能と身体は関係ないというのが前提で、コンピュータで人間の知能の真似事をするということになっていますが、それに対し、そうではないのではないかとということで、人工知能からは距離を置くようになりました。

著書ですが、2002年ごろには「ロボットのこころ」だったのですが、それ以降は「想像」とか「脳機能画像解析入門」とか「日本人の脳に主語はいらない」とか「日本語は論理的である」とか、そういう方に行っています。今日は、一番新しい、去年の4月ナカニシヤ出版から出した、「心の発生」の中から、いくつかお話ししたいと思います。

仮想的身体運動としての心

最初は仮想的身体運動としての「心」ではなくて、「想像」ということです。藤原喜愛さんの「イメージと人間」(1974年)という本の中に「たばこ」と「スキー」の例があります。たばこを吸っているのをイメージして下さいと言うと、当時はまだ今みたいにセンサーが無いので、電圧計と電流計を付けて筋電図みたいのを撮ると、唇の筋電図が出て来るのです。だからイメージを作るというのは、頭の中でやっているのではなくて、身体の一部を使っているということが分かるわけです。スキーのできない人に「スキーのイメージをして下さい」と言う、筋電図の反応がバラバラですが、スキーのできる人に言うと、腕と足の動きが連動して出て来る。できる人とできない人の差がそこで現れる。だからスキーのイメージをするとき、頭だけを使っているのではない、身体を使っているということが分かります。

これは私が数年前にやった実験ですが、指のタッピング。「指のタッピングのイメージをして下さい」と言う、中々難しいです、そう簡単には出来ない。眼を閉じて、頭の中に指の形を描いて、こうすると言うのはダメですね。それは視覚像を作っている、眼球を動かしていることになるのです。気を指先に集中させる。そして、まさに動かんとする状態にする。動かしてはいけないけど、動かす寸前まで力を入れる。訓練しますと、幻の指が、若干、内側に入って来る感じになる。それが指のタッピングのイ

メージです。fMRIの画像を見てもらうと分かりますが、ちょっと指の運動野のところ
がうっすらしています。指だけに限らず、身体のある部分を実際に動かすときと、イ
メージするときと同じ部位を使っているというのは、ほぼ確定した事実、これからひっ
くり返るということは無いと思います。

高度な認知は関係ないだろうというふうな反応が時々あるのですが、ソロバンの上手
な人に聞くと、やはりソロバンの玉を眼で頭の中に作っている。それから玉を動かす動
作を仮想的に作っている。指先や眼球を仮想的に使っている。ということで認知とか高
度な知的な作業も身体的部位を使いながらやっているという風に言えるんじゃないかと
思います。想像とは仮想的な身体運動だということなのです。

運動の抑制でイメージが生成される

脳の中には運動を円滑に行なうための予測器が存在します。自分で脇腹をくすぐって
も、くすぐったくない。しかし他人に触られるとくすぐりたい。私が指で脇腹をくすぐ
ると運動野から指令が出て、私の脇腹をくすぐる。すると、くすぐりたいという感覚が
出て来る。しかし脳は運動野から出る運動指令をコピーして、脳の中の予測器に送る。
脳はどのような感覚が脇腹に起こるかを予測して、その感覚をキャンセルする。だからく
すぐったくない。脳は自分の運動が引き起こす感覚を予測して、それをキャンセルしに
行くということをやっている。他人にされる場合は、私の運動野は動かない。運動指令
も出ないし、指も動かない。予測器も動かない。他人の場合は、くすぐりたいという感
覚が残る。キャンセル掛かりませんから、そのままくすぐりたい。目的は何かと言いま
すと、感覚が運動の邪魔をしない。邪魔な感覚は殺すというのが、脳の基本的な設計原
理みたいなのです。

今まで予測器と呼んで来ましたが、予測モデルというふうに変えます。何故モデ
ルかと言いますとですね、これを見てもらうと分かるのですが、腕を動かしてそこまで
行くのに、身体とか環境を含めた、自分の周辺部分のモデルを持っていないと計算でき
ない。自分の周辺の物理世界のモデルを持っているからこそ計算が出来る。モデルとい
う言い方をします。

ここで抑制というのが入って来ますが、先程、「指のタッピングをイメージして下さい
」とありましたが、指を動かさないで動かすイメージをするというのは難しい。抑制
が掛かると筋肉の方は動かない。それを仮想的身体運動と言います。遠心性コピーはそ
のまま予測モデルに送られ、予測感覚が作られる。これがイメージだというふうに最
近、言われています。だからイメージは運動指令のコピーなのだ、イメージは運動をし
ているときに常に出ている。常に出ているけど、実際の運動や知覚、感覚の方が信号の
強度が大きく、圧倒的にイメージの方が小さいので、それに気付かない。運動や感覚が
おさまったときに初めて気が付く。

一般的な身体運動を話しましたが、運動能力で人間が他の動物と比べて優れてい

るのは、舌、しゃべることだと思うのですね。チンパンジーが人間に一番近いのですが、チンパンジーは中々声を出せない。喉の造りが人間と違う。他の動物と比べて、運動能力で人間が一番優れているところだと思うのですね。眼でいろんなものを見ますけれども、それをですね、自分の身体で真似ようとすると、鉛筆とかクレヨンとかクレパスで描かなくてはいけない。自分の身体だけじゃ出来ない。ところが音に関しては、耳から入って来る音に関しては、我々は飛行機の音であろうが、豚の鳴き声であろうが、こういう叩く音であろうがですね、ほとんど真似することが出来る。

言葉ですけど、これが有名な記号＝記号表現＋記号内容という表記です。これを今のですね、神経的な表現に使うと、こういう風になるのじゃないのかな。記号表現をいちおう音声にしておきますと、私が頭の中で、「机」とか言いますと、抑制を掛けているから音は出て行かない。机という音のイメージだけ頭の中に浮かぶ。そうして眼を閉じると、机という視覚像が頭の中に浮かぶ。実際に絵を作ろうとすると、まぶたを閉じないと出来ないですね。でイメージを作る。視覚イメージが記号内容となる。こんな形が、いわゆる記号表現と記号内容の神経的なモデルではないかと思えます。

乳幼児における心の発生

乳幼児のうちにイメージが発生するためには、①予測モデルの発達が必要である。それから②記憶の発達が必要です。当然、運動記憶の発達も必要なわけですね。これが発達しても、③抑制を掛けられないと、動いちゃいますので、抑えなければいけない。3つが必要なわけですね。発達はひとことで言うのですね、運動ですね。子どもを見ると、同じことを何度もやっている。それで出来るようになって来る。

抑制はいろんなところでやっている。一番重要なのは、この大脳基底核。ここが抑制センターになって、脳全体に対して、抑制信号を常に出している。大脳基底核等の抑制機能の発達により、まず①独立二足歩行が出来るようになる。また運動の抑制による②イメージの発生。3つ目は③共感覚的表象から感覚独立表象へということで、大脳基底核が抑制センターで、それが歩くこと、イメージを作ること、この感覚の独立にも関わっていると思えます。

二足歩行と心の発生ですが、言葉の数が増える時期と心の発生がほぼ同時期、18カ月20カ月ぐらいですね。一人で歩けるようになると言葉の数が増える。言葉の数が増える時期、急激に増える時期は、心の発生と同期していると考えていいのではないかな。私の仮説としては、大脳基底核の発達が、二足歩行と同時にイメージの発生、それがひいては心の発生と繋がると思うのですね。

我々、生まれてきたときは感覚が独立していない、共感覚状態で生まれて来る。それを抑制機能の発達によって分離する。大脳基底核等の抑制機能の発達で、共感覚表象から感覚独立的表象になる。これが何故、重要かと言いますと、音声の神経的基盤と視覚イメージの神経的基盤が分かれている。聴覚と視覚が分かれるからこそ、初めて記号表

現、記号内容、つまり言葉に対応したイメージを作ることが出来る。

ここでは記号表現と記号内容が分離しているという前提でお話ししていますが、乳幼児では、たぶん分離されていない。そこが分離して、初めて言語的な表現になるわけです。分離されていないとき、そういう時、指差しが出るのですね。指差しというのは、記号的な動作なのですが、言語的な記号ではない。何故かというと、目の前にあるものしか差せない。これが分離することによって、目の前に無いものを記号内容に出来る。目の前に無いものを指し示すことが出来るようになるということは、抑制機能の発達、イメージが感覚独立的になるということは、同時に言語的になるということですね。記号表現、記号内容、両方とも目の前に無いもので構成される。そこで初めて、言語が発達する条件がそろう。

思考というのは、対話の内化というか、そういう訓練をして一人で出来るようになる、という風に言えるのではないかと思います。音声イメージ、聴覚イメージが内部で作れるようになる。イメージが最後には心というものになる。言葉は音声の組み合わせであるが、その音声を現実には存在しないものを意味するように組み合わせることが出来る。その組み合わせにより、自分の内部に、外部の物理的世界とは別の世界が存在するような感じが生まれる。これが心の実感に繋がるのではないかと思います。

まとめ

仮想的身体運動としての心ですが、別の表現をすると、運動指令としての心なのですね。運動指令というと、神経的な知識を前提としないと出て来ないと思うんですが、心とは（身体）運動指令の「世界」。物とは身体運動の「世界」。デカルト以来、心理学としての哲学、心身二元論というのがありまして、物と心の乖離ですね、どういう風に調和しているのか？それは、そもそも別のものと設定するからですね。二元論を克服するのは難しいし、どういう風に調和しているのか分からないですけども、そうじゃなくて、心とは（身体）運動指令の「世界」、物とは身体運動の「世界」と考えれば、これで完全に解消するわけではないですけども、心身二元論を克服出来るのではないか。心と物の乖離、統合失調症なども、運動指令と運動が乖離している、ということで説明することが出来るのではないかと思います。

4. 災害と人間行動 ～災害に負けない しなやかな社会の創造～

林 春男（京都大学防災研究所）

東日本大震災

去年の3月11日の午後、マグニチュード9という、たいへん大きな地震がございました。海底を震源としていましたので、ほぼ日本中、大津波警報が出るというような津波

になりました。この地震は実際には2つの地震が引き続き起こってしまったために、結果的にものすごく大きな地震になってしまいました。海の底が盛り上がる、とくに宮城県の沖合がひどかったわけですが、25メートル盛り上がったと言われてますから、4,000メートルの海底が25メートル上るということで、大きな津波に襲われました。これは毎年1月に政府の地震調査研究推進本部というところが出す、日本中どこで地震が起きやすいかという地図です。一番高かったのはどこかというところ宮城県の沖合です。宮城県沖地震と書いてあります。マグニチュード7.5から8程度が99%、それからそのちょっと外側に三陸沖南部海溝寄りというのが80から90%というのが予想されておりました。3月11日はまさしくそこが出発点となって地震が起きた。だから政府の地震調査研究推進本部が言っていたとおりに地震が起きた。

今回の震災は戦後はじめて2万人近い死者が出てしまいました。それまでの最大は阪神淡路大震災の6,500人弱でしたから、とてつもなく死者の数が多かったわけです。2万人も亡くなって、たいへんな被害だと思いますけれども、人口比で見ると一番ひどい宮城県で見ても0.6%くらいにしかなりません。逆に言うと、地震がいくらずいと言われても、99.4%の人は、それを生き残って、また生きて行かなくてはならないという課題があるんですけれども、いささか防災というのは、生命を救えばいいというところで話が終わっているというの、注意をして良いかもしれません。

防災の考え方の進化

防災そのものが、東日本大震災を受けて、いろいろ様変わりしつつあるように思いますけれども、防災の世界にずっと首を突っ込んでいると、僕が始めて以来でも、少なくとも3つのアプローチがあって、少しずつニュアンスが変わっているんだということが感じられます。1970年代と21世紀に入ったところ、この2つにターニングポイントがあるように思います。①70年代までの日本の防災というのは、基本的には“消防”とほぼ同義というふうに思っていた方がいいと思います。火災予防をするとかが防災でした。グラッと来たら火の始末というのをたいへん大事なことにしてきたわけです。それが②70年代に入るところで、いろいろ様変わりをします。災害に強い街を作ろうというようなことを一生懸命にしました。右肩上りでいろんなものがどんどん豊かになっていった時代、ものが作られていった時代、と考えて良いのかもしれませんが。そういうことで街がどんどん様変わりをし、災害に強いということを実現できるんじゃないかという思いがあった時代でした。脆弱性をつぶしていくことが防災であり、災害に強い街になるというように考えました。その延長で、東京は今どんどん綺麗な街になっているのも事実ですけれども、そうやって街にあった脆弱性がどんどん減っていくんだという考え方です。ところが、それが根本的に破綻をしたのが③2001年のあの9月11日です。アメリカで同時多発テロが起きます。あのテロというのは、まさかと思っていたことが現実に起こる。それこそ“想定外”です。敵がハッキリしていれば、それに対す

る脆弱性も明らかになるのですが、敵がどんどんどんどん増えてしまうと、そのいろいろなリスクに対して対抗していかなくてはいけない。むしろ大事なのは、災害に遭って少し凹むかもしれませんが、それに負けない、もう一度立ち直れる、そういう社会を造っていかなければいけないというのが基本になります。

災害に負けない しなやかな社会

それで最近のキーワードはというので、今日のタイトルの副題にさせていただきましたけれども、“災害に負けない しなやかな社会”、そういうものを造っていこうというようなことを考えています。“災害に負けない社会”というのは具体的にどういう社会かということ、それぞれの組織が自分たちの本来やらなければいけないことをどんな状況になっても継続できる力、それをそれぞれの組織が高めていこうということを意味していると考えていただいて良いと思います。その事業継続能力というのをレジリエンスという言葉で表わせます。レジリエンスというのは心理学の分野ではわりと普通に使われている言葉だと言われていますが、防災の分野でも21世紀に入ってからたいへん重要なキーワードになりました。

レジリエンスのイメージというのを見ていただくために、ここにこんな絵を描きました。普段はそれぞれの組織が100%の機能を果たしている。災害が起きて被害が発生してしまうために機能喪失が起きる。その上で、それを一生懸命復旧しようとする。その間、三角形のくぼみができるわけですが、これが事業中断の部分である、あるいは組織が持っている脆弱性だという風に考えていただいてもいいかもしれません。そうするとそれを減らしていく、つまりこの三角形の部分減らしていくことが事業継続能力の向上になるわけですが、基本的に2つの方向がある。面積を半分にしよと思えば、三角形ですから落ち込みを減らせれば良いわけですね。それから立ち上がりを早くしても減るわけです。この2つのオプションを適切に組み合わせる。あるいは資源の当て方を工夫する。そういうことを総合的に進めていくことが新しい防災の姿なのではないかと思えます。

レジリエンスというのは回復力です。立ち直る力です。残念ながら立ち直る力は有限です。有限の立ち直る力を最大限生かすためには、あらかじめヤバイと分かっているハザードについては予防措置をしてパッチを当てておく。リスクを順番に並べることにしたのは、そういうパッチをどこまで当てるかを冷静に考えることが必要なんじゃないかということです。パッチが当たっていれば、それを抜けて、いきなり回復力を働かせなければならない危険は減っていくわけですので、全体としての立ち直りのチャンスというのは増えると思います。何が予防されるべきで、どこまで予防されるべきか決めるのは、じつはレジリエンスの側の判断だと思うようになりました。それはとくに東日本大震災以降、強く思っているところです。この重み付けを間違えると総合性が失われていくのだという風になるのだと思います。

社会のストックの再建（復興）

幸か不幸か災害というの、発生直後は、非常に早い周期というか、時間の経過でどんどん状況が変わっていきますので、次々と場面が展開していく。そういう混乱というのは数カ月で社会的には終わる。この東日本大震災でも夏までに、ある意味では、表面上落ち着きは取り戻しているわけですが、それで問題が終わったわけではなくて、実は何年も掛かるたいへん大きな長いプロセスです。ところがイベントとして見ると、ほとんど無いんです。そういう辛い日常を毎日毎日繰り返していく。最終的にはそれを受け入れる。そういう自己受容のプロセスみたいなものが、復旧復興期の特徴なのです。

そうやって考えると、応急対応期と復旧復興期というのは全然違うメカニズムで区分をし、対応というのもして行かなくてはいけないのではないかと思います。

この復興ということですが、今、東日本はここに入ったところですが、どうなるのかと言うと、実はたいへん複雑な問題があります。まず社会基盤を戻す。それをしないと住まいも戻りませんし、経済も戻らない。住むところが出来て、働く場所がないと、生活が戻らないということを考えていただくと、こういう複雑な構造の中で、様々な事業を同時に進めるのが、復興事業と思っていただいてもいいかもしれません。阪神淡路大震災のときには、全部で1000、こういう事業が復旧、復興の中で実行されていますから、非常に複雑だということもお分かりいただけると思います。あの当時はまだ場所が小さかったですし、人もたくさん居ましたので、社会基盤は2年で戻りましたし、住宅は5年で戻りました。都市計画もほぼ10年で元に戻ったのですが、97年以降の経済不況のために経済は戻らない。ということは結論として被災地の生活も戻らないという状況がずっと続いているということになります。

創造的な復興を実現するために

どうしたら生活再建が出来るのかというのを、震災から5年経ったところで調査をしてほしいと神戸市の方から頼まれて、被災者自身に聞いてみたら、こういう風に答えてくれました、というのをご紹介したいと思います。7つの要素がありました。その中で、みんなが一番大事だと言ったのは、「自分の住まいが戻ること」でした。2つ目に大事だと言ったのは、「人間関係」でした。私も社会心理学をやっていると言いながら、まさかそんなものが出るとは思わなかった訳ですけども、いきなりこのグラフでいうと2番目になっちゃった。どういうことかと言うと、正直に言って神戸の人達がそんなに豊かな人間関係の中で暮らしていた訳ではありません。ただ人との関係無しには暮らすことは出来ない。以来、ほとんど仮設住宅というのが集落単位で、通常の人間関係を切らずに動くようになりましたけれども、それはどちらかと言うと、ここから出発しているのかもしれない。

今、そういう阪神の経験を踏まえて、いろんなところで「復興のためにこうしたら」と申し上げているのは、復興の一番の基本は経済再建ではないかという風に言っていま

す。それをするための道具として都市の再建というのがある。都市の再建というのは公費が投入できる訳ですから、国としてはこれが一番やりやすい。だけど、これを自分たちの好き勝手にやってもらおうと、一番大事なときにお金が入らない。ですから経済再建のグランドビジョンのもとに適切なタイミングで資金が投入されるような仕組みにしないと、結果として復興というのはいかない。被災者から生活再建が大事、大事と言われるんですが、そうやってお金をもらって暮らすような生き方というのは、余り健全だとは言えない訳で、むしろ経済を活性化することによって、いわば余剰の税金をもって、それを自分たちで配分するような仕組みにしたらどうでしょうというようなことをずっと言っています。

5. プロダクティブ・エイジング 2040年 高齢者4割の社会を考える

キーノート・スピーカー 谷口幸一
指定討論者 所 正文

【谷口】

私達は過去10年あまり、本学会の一研究部会として老年学研究部会を運営して来ました。超高齢社会を迎えた老人問題は、老いの世代だけでは解決できない、全世代が当事者意識を持って立ち向かわなければ解決できない、最重要の課題であると考えます。しかし、まだ他人事のように我関せずの若年世代も多く居ることも事実です。本日のシンポジウムを、若い人々が、この難題に前向きに取り組める意識変革をはかるひとつの機会にしたいと思います。

PART 1. 高齢者についてのイメージを問う

最初に皆様が会場に入られるときに用紙をお渡ししました。高齢者にどういうイメージを持たれるかということで、御回答をいただきたいんですけども。評価表のAというのをお持ちの方と、Bというのをお持ちの方と別々に居られると思いますが、

評価表Aの方は、「あなたの考える『健康状態の良好な自立した高齢者（複数人）』を思い浮かべ、次の観点から、その方々の行動を振り返り、イメージで評価してみてください」。

評価表Bの方は、「あなたの考える『健康状態の悪い要介護の高齢者（複数人）』を思い浮かべ、次の観点から、その方々の行動を振り返り、イメージで評価してみてください」。

さまざまなイメージテストがありますが時間がありませんので、最終的に集約された“老い”というものに対して、どういう観点から評価するかということが6つの因子に集約されているというスケールがございます。1から7の評価点のいずれかに、直感的

で良いですから評価をしていただきたいと思います。

- ①「有能性」について
- ②「活動自立性」について
- ③「幸福度」について
- ④「協調性」について
- ⑤「温和性」について
- ⑥「社会的外向性」について

プラスに該当する場合は5とか6とか7に評点が寄ると。1か2に寄るということはマイナスである、そのような簡便な形で評価をしていただきますが、まずそれをやっていただけますか。

アンケートAの回答（健康な高齢者をイメージ）

健康な高齢者というイメージは中間の4よりも高い評価が多いという結果が出ました。

アンケートBの回答（虚弱な高齢者をイメージ）

皆さんの挙手をいただいた傾向を見ると、やはり要介護、虚弱な高齢者の人のイメージというのは、低い傾向があると、こういう結果が出ました。

身体が不自由な方はどうしても自立能力が、身体的な自立も、精神的な認知機能も十分に無いということで、どうしても評価点が下がる傾向があります。高齢者と言っても様々な健康レベルの方が居られるということ、まず理解していただきたい。

PART 2. 高齢社会の認識をクイズで問う

（参加者に問題用紙を事前に配布。設問のあとに「Yes」「No」で回答して貰う。）

①70歳の方は自分のことを高齢者だと思っているか？

「自らを高齢者と思う人」は、70歳前半で42%です。60歳代ではわずか13%ぐらいしか居ない。ほとんどの高齢者が自分を老人であると思っていることは、「否」であるということですね。

②結晶性知能と流動性知能はともに衰えるか？

高齢者になっても低下しない知能があるということで「正」。結晶性知能と流動性知能という2つの知能があり、結晶性知能（言語性知能）は、20代の人よりも、むしろ80代の方が優れている。日常生活ではこういう知能のほうが大事だということ、認識していただきたい。

③記憶の加齢変化は一樣か？

意味記憶というのは歳を取ってもほとんど落ちない。様々な生活経験の中でどんどん蓄積され、経験がものを言う。それに対してエピソード記憶、これは昨日あったこと、さっきあったことを丸ごと思い出せる能力というのは極端に落ちる。また、運動技能の

記憶とか、朝晩の生活習慣など、手続記憶はあまり加齢の影響は無い。無意識の内に色々なことが出来る。こういうことで、一口に我々の記憶と言っても、加齢の影響を受けやすい記憶とそうでない記憶があります。

④高年齢ドライバーの急増で事故が増えるか？

右折事故とか出会い頭事故は高齢者が多いが、40歳以下の人は逆にスピードの出し過ぎとか脇見運転の事故死が多い。運転技術への過信が若者の事故率を高めていると言える。

⑤高齢者は変化や新たな挑戦を嫌う？

「否」です。これも枚挙に暇がないのでありますが、最近では三浦雄一郎さんが80歳でエベレストに登頂したと。そういう活動的で挑戦的な人はたいへん多いと思います。

⑥高齢者は他の世代よりも詐欺に引っ掛かり易い？

これも「否」です。高齢者だけが詐欺に引っ掛かり易いんじゃない。50代が一番多いそうです。架空請求詐欺の被害は20代が最も多い。融資保証詐欺は40代が最も多い。

⑦性格の年齢変化は好ましくないか？

「性格に好ましくない変化が起こるか?」。「否」です。主要5因子性格検査（ビッグファイブ・テスト）をやりますと、大方の性格特性は加齢による変動は少なく、むしろ、好ましい、安定した性格に向かうという結果が出ています。

⑧巧緻性、上肢筋力の年齢による低下は少ない？

体力、運動能力は、種類によってはそんなに落ちない。手先の器用さとか、筋力はあまり落ちない。ところが膝の伸展力とか、速く歩きなさいとか、柔軟性はものすごく落ちが大きい。手先を使う運動とか、細かい作業、あるいは握力などは思ったほど落ちない。

⑨高齢者の3割は認知症になる？

ついこの間の全国調査によると認知症の発症率は15%、軽度認知症の人が約400万人ということですが、それでも85%の人はならないということですし、予防が出来る。軽度認知症のときにトレーニングをすると、認知症へ移行することを防ぐことが出来ると考えられています。

⑩高齢者の日常的問題解決能力は若者より優れている？

これは「正」です。日々の問題解決能力、対人関係能力は50代後半、60代から増える。20代の人より遥かに高い。実際的な問題解決能力、対処能力も高齢になればむしろ増える。社会的問題解決能力や対人関係調整能力、日常のトラブル解決能力も60歳代後半から高くなる。

以上、こんにちの研究成果で言われていることをクイズ形式で並べたものですが、10点満点という人は？ ああ一人居られましたね。5点以下の人は？ …5～6人居られました。必ずしも我々の思っていることが実態とはそぐわないということをお考えいただければと思います。

まとめ

老年学、ジェロントロジーが、加齢変化の科学的研究、中高年の問題に対する研究である。人文学からの研究、歴史、哲学、宗教、文学からのアプローチも必要である、成人や高齢者に役立つ知識をいかに応用するか、こういったことを総合的に研究するのが、“老いの学”ということで、心理学だけではとても解決できない、医学だけではとても解決できない、というのが“老いの問題”ではないかと、こういうことでございます。

【所】

1. プロダクティブ・エイジングの真の意味

エイジングと言うと、まず老化と衰退ということで、老いるということについてはネガティブなイメージが持たれています。これに対して、従来アンチ・エイジングという考え方があり、ひとつには老化と衰退ということに抗して、“ピンピンコロリ”という風に、老年期ということを経験せずに中年期の元気な状態でポックリ死にたいということです。もうひとつは知恵と熟達というプラスの面に着目する。ただ、このアンチ・エイジングは、個人の生活にしか注目をしておらず、社会との結び付きという点において少し欠落している面があるのではないかと思います。

そこで今日のプロダクティブ・エイジングです。これの重要性、2つほどあると思うんですが。

ひとつは高齢者の社会貢献意欲への着目ということです。自分だけが楽しんで、それで老後を生きていけば良いというのではなくて、社会貢献していきたいという、こういった考え方は非常に重要じゃないかと思います。もうひとつは生涯発達として老いの受容ですね。これはピンピンコロリではなく、老化と衰退の面も全体として受け入れるのが生涯発達ということですね。

2. 従来の老年学研究の問題点

今までの老年学研究は、高齢者だけにしか着目していなかった。人口全体に占める割合に高齢者比率がいかに高くなるとはいえ、そうした社会に若者がどうやって生きていくのかという視点が明らかに欠落している。若い人の視点でこうした講座が開かれないということが、まずあるわけで、それで若い人が集まって来ない。要するに高齢者の視点でしかものを見ていないのではないかと私は訴えたいと思います。

3. 21世紀中頃の日本社会展望 (1)：異文化共生社会

21世紀中頃の日本社会は異文化共生社会になるだろうと予測をしています。総人口9000万人、65歳以上人口比率40%という超高齢社会になると、経済の活力を維持するためアジア近隣諸国から外国人労働者を受け入れることが避けられない。現在の若い人は、こうした大変革を遂げる時代を生きていくわけであり、それを踏まえて人生設計を

組み立てていてほしい。日本の高齢社会というのは合わせてこういうことが起こるんだということですね。

3. 21世紀中頃の日本社会展望 (2)：緩やかな下り坂社会

医療、介護等、サービス分野への需要が大幅に高まる。労働の現場としては女性の活躍の場が広がる。一方、人口が減るので製造業や建設業など男の職場は減少する。グローバル企業の人材争奪戦が激化し、優秀な人材を獲得しないと生き残れない。インド、中東、北アフリカ、東欧等からの採用が活発化し、日本の本社は従業員トレーニングのための場になるという予測もある。人口減少により、地方社会での無居住化地域はさらに広がって行くだろう。

まとめ

高齢者人口が増えて、認知症の人たちが増えると。それは確かにそうなんですが、ただ80%の人たちは自立可能な人たちであるわけです。元気な高齢者の方々は、積極的に持続可能な社会のために、何をしてもらえるかということよりも、何が出来るかを考えて、社会貢献活動を行なっていくべきなのではないかということが、プロダクティブ・エイジングのまずひとつ目のことなのではないかと思います。2番目が生涯発達としての老いの受容ということですが、これはポジティブな面とネガティブな面を包括して受け入れるということが生涯発達であると。冒頭に申し上げたことですが、高齢者も社会の一員として共存しているという自覚を持つべきであろうということです。

— 質 疑 応 答 —

質問A (女性)

昔と比較して寿命が延びたときに、65歳といったところに、どのくらい意味があるのですか？

谷口

現代の65歳というのは、あくまでも法律上の65歳で、医学的にはそれほどの意味はない。WHOが統計を取るために今は65歳で分けている。70歳以上にしようという話も出ています。

質問B (男性)

個人的な努力でプロダクティブに生きるというのも必要ですし、社会的な工夫と両方必要。その相乗効果を高めていくのが課題なのではないかと思いますが。

谷口

最後は安心して介護されることの出来る社会にしないと本物じゃない。安心して甘えられる人間関係作りだとかいうものが、最後の勝負どころじゃないかと思います。

6. 目からウロコの睡眠学 ～金縛りからホットミルクまで～

福田一彦（江戸川大学社会学部人間心理学科）

眠りのデマ

「生まれてこの方眠ったことなどない」などという人は1人もいない。眠りはほとんどの人々が1日に1回は経験する非常に身近な現象である。毎日経験する現象であるので、ある程度、常識的な知識はすでに持っていると感じている人が多いのではないか。また、残念なことに日本は世界有数の「不眠大国」とも呼ばれ、そのおかげか、睡眠について興味を持ってくださる方も多い。しかし、巷にあふれる睡眠についての「常識」は、われわれ睡眠研究者の目から見ると神話やデマと呼んだほうが良いものが多いのが実態である。しかも、その多くは、あたかも「科学的な」装いをまとい様々な自称「専門家」が書籍やネット上で公表しているので、一般の人にとっては、それらの真贋の見極めは非常に困難である。

代表的な眠りに関するデマには、90分倍数説がある。レム睡眠の出現周期である90分の倍数の睡眠時間で目覚まし時計をかけるとちょうど、「浅い」睡眠であるレム睡眠で起こされるので目覚めが良いとするものである。しかし、レム睡眠の90分周期というのは、時計のように正確というわけではなく、1時間から2時間の間隔で繰り返され、平均すると約90分というのが実態なので、倍数の睡眠時間にしたらと言って、ちょうどレム睡眠で起こされるわけではない。また、明け方はレム睡眠と浅いノンレム睡眠である睡眠段階2の繰り返しなので、規則的な睡眠習慣である限り、わざわざレム睡眠を選んで目覚める必要はない。また、レム睡眠で目覚めると夢をよく覚えているが、夢はどちらかと言えば楽しい夢よりも怖い夢のほうが多い。わざわざレム睡眠で目覚めるように努力してもその結果は、1日が悪夢から始まるということになりかねない。これ以外にも「夜10時から12時はお肌のゴールデンタイム説」「健やかな眠りにはホットミルク説」など、一見すると「科学的」だが、ほとんど何の役にも立たない「トンデモ説」が横行している。

睡眠の基礎知識と「夢」や「金縛り体験」

寝ている人を外から眺めても実際に眠っているのか眠っている振りをしているだけなのかは分からない。眠っているのかいないのか、また、どのような眠りなのかは脳波や眼球運動や筋電図の記録を行って始めて知ることが出来る。最近レム睡眠やノンレム睡眠という用語はマスコミなどを通じて一般の方の中にも知識として浸透しているようだが、「ノンレム睡眠」という用語は睡眠段階1から4という4つの異なる睡眠段階から成り立っている複合概念である事はほとんど知られていない。ちなみにレム睡眠のレムとはレム睡眠中に出現する急速眼球運動（Rapid Eye Movements）の頭文字REM

に由来している。レム睡眠で覚醒させると約80%の確率で夢が報告される。通常は夢を見ている睡眠段階だが、このレム睡眠が少し特殊な出現の仕方（入眠時レム睡眠：Sleep Onset REM Periods）をすると、（心霊現象と見做されることもある）いわゆる「金縛り」が体験される場合がある。金縛り体験の最中に体験される幻覚は、自身が覚醒して眺めていると信じている寝室の光景も含めて、すべて脳内で再現されているバーチャルリアリティ体験である。詳しくは拙著「金縛りの謎を解く」(PHPサイエンスワールド新書)を参照していただきたい。

健康な生活を手に入れるために

前述したように、睡眠については様々な「説」が信じられているが、その中で最も問題なのは「寝だめができる」という誤解であろう。徹夜をした翌日の夜は、いつもよりも長く寝る傾向があるなど、睡眠には「足し算と引き算」で割り切れる側面がないわけではない。しかし、徹夜の翌日には2日分眠るわけではない事からも単純な足し算・引き算ではないことは難しい説明などしなくても理解出来るであろう。睡眠時間が短すぎる事も問題だが、睡眠時間が長過ぎても問題なのである。睡眠時間が短過ぎても長過ぎても、死亡率は上昇し、動脈硬化のリスクは上昇し、子どもの成績も落ちるのである。我々の睡眠と覚醒は、脳の中にある生物時計の支配下にある。夜は起きていようとしても眠くなり、昼間は寝ようとしても中々寝付けないのは、眠ったり起きていたりするタイミングを脳の中の「時計」が制御しているからである。この生物時計の働きを無視して昼間に長い昼寝をとったり、夜更かし朝寝坊をしたりなどの生活を繰り返す事は心身にとって非常に重大なリスクである。不登校の子どもの睡眠覚醒リズムの規則性を数値化し、家庭内暴力の頻度との相関をもとめると有意な逆相関が認められる。また、徘徊や興奮などを顕著に示す認知症高齢者の睡眠覚醒リズムを規則的にすることでこれらの症状が顕著に低減する。

本来、幼児期には、昼寝は徐々に減って行き、小学校入学時には自然な状態で昼寝をとる子どもは皆無となる。これは、日中に自分自身の脳を覚醒状態に保っておく脳機能の発達的变化と考えられる。ところが、このような発達的变化を無視して保育園で行われている「午睡」の日課は、顕著に夜間睡眠の位相を後退させる。つまり、夜更かしの子どもを作り出すのである。夜更かしの程度は子どもたちの朝の機嫌の悪さや園への行き渋りの頻度などに有意に影響している。発達によって昼寝の無くなった子どもに昼寝を課す事には子どもたちにとって何の利益もないどころか、顕著な悪影響があるのである。著者の関わる東京都足立区保育課では4歳児と5歳児の午睡の日課を中止した。その結果は顕著であり、起床時刻には変化がなく、就床時刻は有意に前進し（早寝となり）、寝かしつけなくても自分で眠りに行く子ども割合が増加し、子どもたちの寝付きも改善し、朝の機嫌も改善された。

思春期の子どもたちには、夕方から夜にかけて長い「仮眠」をとる習慣を持つものが

多い。これは前述の保育園児の昼寝と同様な悪影響を持つ。就床時刻の遅い子どもほど、日中の居眠りが多く、イライラが顕著で、不安や抑うつも悪化する。さらに、就床時刻が同じ子どもでも、夕方の長い仮眠をとっている子どもの方が、仮眠のない子どもよりも、日中の眠気、イライラ、不安、抑うつが全て悪化する。これらは、全て統計的に有意な結果である。睡眠と成績との関連を見ると、睡眠時間が短過ぎても長過ぎても成績は悪くなり、夜更かしであるほど成績は悪く、休日の起床時刻が遅くなればなるほど成績は落ちる。

常に時差ぼけ状態におかれている航空機の乗務員で脳の萎縮が進んでいるというデータがある。また、放射線被曝が避けられない医療従事者よりも、交代制勤務者の発癌リスクが高いとのデータもある。

「早寝早起き」は古いと思う人もいるかもしれない。しかし、我々が脳の中に持っている時計の24時間のリズムは、地球の自転周期に合うように長い進化の過程で造り上げてきた機能であり、これが人工照明などの文明によっておいそれと変わるわけが無い。心身ともに健康な生活を手に入れるためには、暗くなったら眠り、明るくなったら起きるという昼行性生物としての当然の生活習慣の価値を再認識する必要がある。

睡眠と覚醒のリズムを整えるためのノウハウ

睡眠と覚醒のリズムには、光と温度が強く影響する。我々の生物時計は目から取り入れた光の情報をもとに時刻合わせを行うが、本来は暗いはずの夜に強い光を目から入れる事は強力な夜更かしの原因である。最近話題のブルーライトは特に強い悪影響を及ぼしている。我々の網膜には物を見るための視細胞とは別に生物時計に直結している細胞があり、これらが青い光に対して反応するためである。夜にブルーライトを含んでいる照明（つまり、白い蛍光灯や特にLED照明）を夜の照明として使うのは夜更かしを強力に助長する。特にスマートフォンは、目の近くで操作するため、強さは距離の二乗に反比例するという光の性質を考えると、小さな光源だからと言って決して軽視はできない。夜は生物時計に影響を与えにくいオレンジ色の暗い照明のもとで眠る準備をするべきである。

また、睡眠は深部の体温が低下しないと起きない現象である。リラックスのためと考えて眠る時間の直前に風呂に入るのはかえって眠れなくなる原因となる。寝る予定の時刻の1時間以上前に入浴は済ませておくようにしたい。また、夜間の冷房を嫌う人も多いが、冷房の有無は体温に直接的な影響を与える。夜間に熱中症になる例もあり、また、夜間電力は余っている。身体の健康を考えれば夏の夜に冷房を節約しすぎるのは考えものである。

このように、日中の生活や寝る前の光環境や温熱環境を整える事で解決のつく眠りに関する問題も多い。ちなみに、ミルクの中に含まれるトリプトファンが眠りのホルモンと呼ばれる（こともある）メラトニンとして働くためにはどのくらいのミルクを飲むべ

きかを計算した先生がいる。それに基づくと、ドラム缶半分くらいだそうである。ドラム缶半分のミルクは健康な眠りどころか永遠の眠りを促してしまうだろう。また、メラトニンというホルモンは、夜に分泌されるホルモンだが、実は徹夜をしても夜間に分泌される。生体時計に直結してはいるが、睡眠そのものに直結したホルモンでないという事も知っていてほしい。できれば、決してそれらしい睡眠のデマに踊らされないようにしてほしいものである。

7. 腰痛を解く心のナゾ

丹羽真一（福島県立医科大学・会津医療センター）

腰痛の原因

腰痛をめぐるお話し、とくに心と病気の関係がどんな風に理解されているのかをお話ししていきたいと思います。日本人が病院に通っていらっしゃる理由は色々ありますが、1位は高血圧、2位に腰痛症、3位に虫歯となっております、腰痛に悩んでいらっしゃる方が多い。その腰痛ですが、医学的に説明のつかない痛みを抱えている方が多い。整形外科的な原因がある腰痛は20%程度で、残りの80%の方は説明がつかない。でも痛みを訴えて受診して来られた方に対して、整形外科の先生方は対処しなくてはならず、ときには手術をする。でも手術をしたからといって、良くなるどころか、かえって痛くなったということも訴えられる方も多い。

リエゾン診療

福島医大では、整形外科と心身医療科の2つの科で、腰痛あるいは下肢痛、そういったものが慢性的に続いてしまう、しかし整形外科から見ると何でこれが痛いかわからないという方を一緒に診るということ、これをリエゾン診療と言っているのですが、20年ぐらいしてきました。福島医大の整形外科の方を受診されにきた方で、心身医療科と一緒に診察した方が良いと思われる方を診るというわけです。何か所かで治療を受け、手術も受けたけれど良ならず、福島医大に来られる方が多い。リエゾンカンファランスを受診された方のうち、社会的要因が関連があると認められた方の割合が63%ありました。中味としては、家族問題、職場の問題、学校の問題、交通事故、労災といったところ。心身科では、どういう病名が付く方であったかということ、大きな括りとしては、身体表現性障害、つまり身体の問題なのだけれども心の問題から来ている、そういう精神医学的な診断が付く方が結構多い。その他にうつ病、適応障害、不安障害といった病名がつく方が居られる。これを全部、お話しするわけには行きませんので、今日はその中から代表するものとして、①気分の障害、うつですね。それから②疼痛性障害と言われるもの。心の何らかの問題なのだけれども、外に出てくる障害としては、と

にかく足腰が痛い。痛いという訴えが前提に出ているもの。その2つについて重点的にお話ししたいと思います。

(1) 痛みと気分障害（うつ）

リエゾンカンファランスを受けていらっしゃる方の中で、ウツを訴えていらっしゃる方が結構、多い。そういう場合、ウツの治療をすると症状が改善してくる。何か所も回って治らなかったのが、心の問題の治療をすることによって治る。なぜウツが痛みと関係してくるのかということを考えてみないといけないわけです。

うつ病の発症には…

どういう風にウツが起こってくるかということで考えてみると①社会的なストレス、②個人の身体状況。個人の身体状況というのは、高齢になるとか、お産をしたとか、といった個人の問題。それから、③モノアミンという神経伝達物質が、脳の中で情報の伝達をするために働いている物質、たくさんの物質が神経伝達物質としてあるのですが、モノアミンとしてひとつのグループとしてまとめて呼ばれている。その中にはセロトニンとかノルアドレナリンとかドーパミンなどが含まれている。ウツには、その中でセロトニンが関わっていると言われていています。④もうひとつ、ウツの人の場合、脳の中で、あるいは身体全体で、ストレスに対応して上手く調節していくというシステム、ストレス対処系といわれているのですが、そこに働きの悪さがあるのではないかとされているのですね。

そこをまとめて言いますと、ウツには、その人の素因と身体状況、その人の置かれている状況、とくにその人の性格特徴、あるいはその人の心理的葛藤を生むような社会的要因、などがあると考えられています。

ストレス対処系

身体の中のストレスに対処するシステムというのがあって、ストレスを感じるとコルチゾールが身体全体の細胞に届いて働きを調節する。そのことによりストレスに対処しやすいように調節する。それをストレス対処系HPAという。その調子を乱しやすい傾向を持った方が、出産されたとか、過労の状態になったとか、葛藤を起こすような心理的、社会的なことがあったりすると、もともとあった神経の働きとか、ストレス対処系の働きの乱れやすさが起きて、余計に身体の具合が悪くなる。悪循環を起こす。その結果、ウツという状態になる。

うつ病の脳血流

うつになった人の脳の中の血流量を調べると、広い範囲で血液の流れが悪くなっている。腰の痛み、足の痛みが起きてくるといときには、痛みを受容する神経というのがあるわけなんです、それが抹消から脊髄を通り、脳に行く。そこで神経の働きという

のを強く感じすぎないようにするシステムというのが働いてストレス対処系となっているのですが、このコルチゾールの働きが悪いということになって、全身の調節系が乱れ、そのことで痛みがあちこちに出て来てしまうのではないかと推測されます。うつと痛みというのにはかなり関係があるように考えられます。

(2) 疼痛性障害

身体表現性障害というものも治療が難しく、結構いらっしゃる。この中にもいくつかのグループがありますが、今日は疼痛性障害についてお話しをします。疼痛性障害というのは、とにかく身体のあちこちが痛い痛いということばかりが起きるといって、その背景には心の問題があるということです。

DSMの定義をみますと、疼痛性障害というのは「1つまたはそれ以上の解剖学的部位における疼痛が臨床像の中心」。これだけ痛いのなら、やはりお医者さんは何かやらなくてはいけないんだらうとなる、そういう痛みを訴えるというのが第一。2番目は、その痛みが著しい苦痛感を生じたために社会的、職業的な機能に障害を生じてしまっている、単に痛い痛いというだけでなく、生活が上手く行かなくなってしまった、そういう状況です。3番目に心理的要因が痛みの起こる原因とか痛みを強くしている原因として重要な役割を果たしているという場合です。そういうものを疼痛性障害と定義しています。

治療

疼痛性障害があるときの脳の機能の問題点が詳しく分かっているかということ、今のところ詳しくは分かっている。ただ患者の脳の血流を調べると、症状が良くなると前頭葉も側頭葉も血流量が回復している。だから、こういう場合でも、やはり心の問題だけではなくて、脳の働きが変調を来しているということがあるので、痛みのコントロールというメカニズムが上手く働かないという可能性が強いと思われる。心理療法を行ない、お薬ということでやっていますが、とにかく脳の働きを良くして、痛みに対するコントロールが上手く行くようにすることが大切だと思われます。

リエゾン診療の課題と問題点

福島医大では整形外科と心身・精神科が共同で診療をやっている、それがリエゾン診療というわけですが、それが実際にどの程度効果があるのか無いのか、という話ですが、我々、いつも上手くいっているとは限らないし、全国的にみてもリエゾン診療が上手くいっているかということ、そうとも限らない。何が問題であり、何が課題かといいますと、まず患者本人が心身科なり、精神科を受診するということに拒否感がある。だから整形の先生が精神科を受診してみましようと言うと、「私のことをキチガイ扱いするのか」ということになって、帰ってしまうということがある。もうひとつは精神科の先生がみな、こういうことに長けているかということがあるのです。精神科のお医者さ

んを悪く言うわけではないですが、うつ病が増えていたり、ストレス障害が増えていたり、そちらの問題で精一杯というのが実情だと思います。痛みの問題に時間を割くゆとりが無い。そういう時間を確保していくことが課題となります。

(3) 薬物療法

薬物療法として使うものとして抗うつ薬、抗精神病薬、抗不安薬などがあります。精神科の治療で使われている薬は痛みの場合にもほとんど使われています。抗うつ薬には元々、鎮痛効果があります。ウツが良くなって痛みが軽減するということももちろんありますが、整形外科では、こういったリエゾンとかいう話しになる前から痛みに対しては抗うつ薬を使うといったことが行なわれてきているのです。それは何故かという、抗うつ薬には痛みを軽減する作用が動物実験なんかで確かめられていたということなのです。

抗うつ薬のはたらき

脳のレベルでトーンを下げる役割を果たしている薬を飲むと、脳だけでなく脊髄にも行く。脊髄のレベルでもセロトニンの働きを活発化させるわけです。そうすると痛みの感じ方というのが抑制されるわけです。脳のレベルで働けばウツを治す働きがあるし、脊髄のレベルで働けば痛みを和らげる働きがあるというわけです。だからウツと痛みというのは関係があるというわけです。

下降性抑制系

大脳皮質では「どこがどのくらいの強さで痛むのか」ということを示している。扁桃核から島のほうへ伝わっていくのは「それがどのくらい危険なのか」という感情的な評価を行なっている。両方が痛みにとっては重要です。下降性の抑制系というシステムが、単に伝わるだけではなくて、その痛みの感じ方を調節するシステムが、今度は脳から脊髄の方へ行っているんです。それが下降性の抑制系といわれているものです。

(4) まとめ

多くの腰痛に心理・社会的要因がかかわる。

その心理・社会的要因には、

- ・こころの病
- ・パーソナリティ

がふくまれる。

心が腰痛にかかわるメカニズムには、

- ・心に変調をきたす脳病態が、痛み制御の機構にも変調をきたす
- ・脳神経モノアミン系がその変調にかかわる

8. 生体リズムに基づいた健康法

柴田重信（早稲田大学理工学術院）

生体リズムというのは体内時計とも言い、我々の体内に備わった機構です。我々は昔から、地球上に生まれて以来、あるいは生物が出来て以来、こういうものを持っているわけです。持っているから、地球上に適応して、繁栄しているわけですが、その実態がよくわからなかった。それが、およそ20年前の1997年がエポックメイキングの年で、そのときに時計遺伝子という、時計に関係する遺伝子が見つかり、それ以来、いろんなことが分かってきました。体内時計を上手く使えば、健康や医療、そのほか産業にも応用できるのではないかと期待されるようになりました。

我々は体内時計というものを持っているわけですが、一般的に周期というか長さですね。90分周期というのは短い周期の代表的なもので、これは皆さんが眠りに入って、浅い眠りから深い眠りになる、それがだいたい90分周期、1.5時間。4回来れば6時間ということになります。次のサーカディアンリズムというのが、ひじょうに大事な時計機構でありまして、日本語に訳すと概日リズムということになります。24時間ぴったりではなくて、最近の研究では、24時間より15分から30分長いということで、皆さんも毎日15分から30分ぐらいを調節して地球の自転周期に遅れないようにしているという状況です。

20年ほど前に時計遺伝子が見つかったときに、我々が一番驚いたのは、その当時は脳の中には時計が1個あって、それが大事な働きをしていると思われていたのに、我々の60兆個の細胞のすべてが時計を持っていることでした。これはすごい驚きだったのですね。だから肺にもあるし、腎臓にもあるし、あらゆるところにある。だから皆さんも時計が1個か2個なら分かるけれど、ものすごい数の時計があったら「どの時計を見ればいいんでしょう？」ということになる。そうならない仕組みとして、脳の中にあるメインの時計、まあ標準時計ですね。その主時計がオーケストラの指揮者の役割をしていて、それ以外の臓器の時計は楽器のパートみたいな働きをしている。それぞれの臓器にはそれぞれの時計があって、脳幹が一番いい時間を教えている。だからタクトを振る指揮者がおかしくなったら全体がバラバラになる。ハーモニーが取れなくなって、いわゆる時差ボケの症状というのは、じつはそういうことです。

体内時計と食・栄養

時間栄養学という領域を私が作りまして、今その学会も作っています。太るとか太らないとか、どんなものを食べたら良いのか、お年寄りだったら寝たきりにならないためにはどんなものを食べたら良いのか？ これまでは1日の摂取カロリーという基準しかなかった。つまり、1日に2,000キロカロリーを取るときに、お相撲さんみたいに1回でガバーッと食べるか、何回かに分けて食べるかで、どちらが正しいのか。そのことを

誰も言っていなかったんですね。それはよくよく考えるとおかしいじゃないか、ということになりました。1日にどれだけ食べるのかも重要だけど、それをどう食べたら良いのか、どう分割して食べたら良いのか、あるいは朝食が重要なのかどうか、そういうことが分かってきました。じつは昨年（2015年）の4月から「日本人の食事摂取基準」というのが施行されて、その総論の中に時間栄養学的観点が書かれるようになりました。これは初めてのことですね。実は私はこの委員に入っていて、ありがたいことに時間栄養学的視点を入れてもらいました。今までは5W1HのWhenが無かったんですね。誰と、どんなものを、どれくらい食べるかということも大事なのですが、いつ食べるかという時間的なことも重要である、ということになりました。

体内時計に効果をもたらす食品

食べ方が時計を合わせられますか？というお話をしたいと思います。ネズミに夜中だけ食事をしてみろというようなことをしてみます。ネズミは辛いわけですよ。本当はまじめに食べたいのに、夜中に起こされて食べさせられるわけですから。そこしか食べ物がないから仕方なく食べるわけですね。朝、昼、晩と普通に食べていれば、肝臓の働きは正常だが、夜中だけの食事になると肝臓の働きのピークが夜中になるのではないかという仮説の実験をしたわけですね。やはり、肝臓の働きが夜中にピークになるように変化しました。しかし、この実験の結果は当たり前で面白くない。そこで食事の内容を変えてみた。それで分かったことは、インシュリンを上げやすい食べ物が体内時計を動かしやすい、つまりインシュリンはシグナルとして重要になる。ヒトの研究でも朝ご飯と夜ご飯、どちらがインシュリンの感受性が高いかということ朝ご飯なのですね。朝ご飯でインシュリンが活発に反応しやすいということが分かってきています。

次に我々が考えたのは人間の生活でも、朝ご飯、昼ご飯は普通の時間に摂っても、夜ご飯を食べる時間だけがおかしい人があるじゃないかということです。とくにサラリーマンとか塾に通う子供たちは、家に帰ってきて22時、23時に夕飯を食べる、みたいなことになっているわけです。夜遅い時間に食べるということは、やはり体内時計を夜中の方向に動かす結果になってしまう。これではいけないということで、今まで23時におにぎりを2個食べていたのを、19時に1個、23時に1個というように変える。つまり塾に行く前の19時におにぎりを1個食べ、家に帰ってくる23時に1個食べるようにすると時計は元のリズムに戻る。実は、これは肥満防止にもなる。だから我々は「小腹が空いたら食べよう」ということに賛成なのです。

社会的時差ボケ

社会的時差ボケというのは何かといいますと、先ほどお話したように夜型の人は深夜2時頃に寝ているんですね。そして朝6時頃起きています。4時間ぐらいしか寝られない。会社がある、学校があるから仕方がない。そういう人が多い。そういう人は休みの

日ぐらいゆっくり寝ていたいと言って11時頃に起きて来るわけですね。そうすると、この人の体内時計は本当はこっちなのですね。朝6時に起きるとするのは仮の姿で、本性は11時起きのタイプです。夜型を別の面から探る場合、「普通の日に目覚ましをかけて起きていますか？」と聞くと、「目覚ましをかけないと起きられません」という人は、典型的に夜型なのですね。この人をよくよく見ると、(睡眠、覚醒の)明暗が3~4時間ズレている(遅れている)。ズレているということは体内時計が例えば日本に居ながらインド人と同じ時間帯の生活、ということなのですね。我々は、4時間ぐらいズレてくると時差ボケを感じるんですが、夜型の人は時差ぼけを感じていないですね。だからおかしい。そういう人は社会的時差ボケなのですね。こういう人はどうしたら良いか？ひとつは生活の時間を前に持っていくしかない。早寝早起き朝ご飯をやってもらう。何とか前へ持って行って2時に寝ていたのを12時に寝て貰おうじゃないか、そうしたら少しは良くなる。

朝食時差ボケ

朝活や朝社会が良いと言いながら、夜型になるとどうしても朝ご飯が食べられない。食べられないと色々な弊害が出て来る。これは私に言わせれば、時差ボケに似ているなあと思い、朝食を食べない人は一種の時差ボケを起しているのだと思い、朝食時差ボケと名付けました。忙しいので菓子パンを1個だけくわえて走っているような人が想像できる。こういう人達に時差ボケ症状を聞いてみる。「身体が重いな」、「目が覚めた気がしないな」、「学校へ行きたくないな」というようなことを言うわけです。それから、もうひとつ出て来る症状は胃腸症状ですね。便秘気味、下痢気味、食欲が無い。朝ご飯を食べていないのに、「腹が痛い」とか「胃が痛い」とか言うわけですね。欠食者は文句ばかり言っている。全体的に言えることは、バランスのよい食事を腹八分目、摂ることが良い。少なくとも、おにぎり1個、パン1個よりも良い。また、何も食べないより、せめてバナナの1本でも食べたほうが良いですよ、ということですね。

時間軸の健康科学

我々は時間軸の健康科学というのを提唱してしまして、今までの体内時計の研究を上手く結びつけて、健康寿命を延伸しようと思っています。研究は、まだ2年目の終わりなのですが、大掛かりな学際的な研究をやっています。お年寄りになると、だんだん運動もしなくなり、食も細くなって来る。そしたら食と運動を組み合わせ、少量の食事と少量の運動で良い効果が出れば、寝たきりにならないじゃないか。早稲田の力を結集して、オール早稲田でやりましょうということで、スポーツ科学部と人間科学部と理工学部が一緒になって所沢の方でやっています。3年後に早稲田ブランドで「早稲田オヤツ」のようなものを出そうとしています。

1. 障害児教育研究部会

■ 開催記録一覧

回	開催日／会場	講師／演題
1	1993年1月23日 本部キャンパス14号館4階 大学院演習室	湯汲英史（精神発達障害指導教育協会） 医療・教育・福祉・労働に関連する障害児の評価にか かわる諸問題
2	1993年5月15日 14号館4階大学院演習室	武藤直子（全国療育相談センター） 自閉症の認知発達治療
3	1993年7月17日 14号館4階大学院演習室	富田真紀（台東区松が谷福祉会館） 自閉症の認知的究明の動向とアスペルガー症候群
4	1993年10月25日 精神薄弱者更生施設虹の家	※自閉症の成人施設の見学会
5	1993年12月4日 14号館4階大学院演習室	福田哲治（世田谷区立桜木中学校） 思春期のLDの指導
6	1994年4月16日 14号館4階大学院演習室	伊澤雅雄（国立大蔵病院） 地域と結びついた治療活動…不登校児を中心として…
7	1994年7月2日 6号館416-3 第4実験室	庄司順一（日本総合愛育研究所） 小児虐待
8	1994年12月17日 レストラン スエヒロ	横田 滋 障害をもつ幼児、問題をもつ幼児の20数年後の姿か ら、幼児保育を考える
9	1995年3月18日	高頭利広（新宿区立あゆみの家） 重度障害者通所施設の職員として
10	1995年5月20日	大見川正治（文京女子短大） 障害児教育の現状 早稲田大学心理学会第20回大会 コーディネーター：武藤直子（全国療育相談センター）
11	1995年9月9日	内山 勉（富士見台幼児聴能言語訓練教室） 難聴児の早期治療教育
12	1995年12月9日	光廣純子（神奈川県立小田原城東高校教諭） 県立商業高校の障害児受け入れの一例紹介
13	1996年3月23日 文学部心理実験室	土佐林一（聖徳大学） 吃りの治療
14	1996年12月14日 文学部心理実験室	前田茂則（千葉県中央児童相談所所長） ゲシュタルト療法による自己への気づき体験

回	開催日／会場	講師／演題
15	1997年3月8日 文学部心理学実験室	赤池信夫（筑波大学附属盲学校） 視覚障害者のコミュニケーション ～コンピューター普及による視覚障害への影響
16	1997年5月3日 文学部心理学実験室	館 暁夫（職業能力開発大学福祉工学科） 知覚障害者の職業をめぐる諸問題
17	1997年5月31日 文学部大学院演習室305	館 暁夫（職業能力開発大学福祉工学科） （タイトル不明） 早大心理学会（第22回）シンポジウム コーディネーター＆司会：武藤直子（親子相談センター代表）
18	1997年10月25日	三浦勝男（都立松沢病院精神科心理） 他害に多く孤立に長かった自閉症青年の遊虚面接に関する一検討
19	1998年1月31日 文学部心理学実験室	平井 保（国立特殊教育総合研究所） 障害のある子どもの教育相談を巡る今日的課題
20	1998年3月14日 文学部心理学実験室	大見川正治（文京女子短大） 障害と言葉
21	1998年10月31日 文学部心理学実験室	武藤直子（全国療育相談センター、ワークホームつばさ理事） ワークホームつばさの1年
22	1998年12月5日 文学部心理学実験室	小野 顕（株社会福祉研究所） 障害児福祉の先覚者とその時代
23	1999年3月20日 文学部心理学実験室	山澤 清（愛媛大学大学院教育心理学） 車椅子の使用者から見た大学の施設・設備
24	1999年11月6日	中田洋二郎（国立精神神経センター精神保健研究所精神保健研究室長） 発達障害児の親の「障害認知について」
25	2000年1月8日	堀 彰人（千葉県特殊教育センター） 吃音の指導について
26	2000年3月18日	荒井 聡（豊島区児童女性部子育て支援課、子ども発達係） 豊島区での学童保育クラブの障害児巡回指導の実際
27	2000年6月24日	高橋淳子（千葉県立東金養護学校） 病弱養護教育について
28	2000年9月30日	中根 晃（実践女子大学教授外部講師） カオスから自閉症を考える—脳科学的自閉症論
29	2001年1月20日	林 弥生（早稲田大学大学院文研博士課程1年） 摂食障害の予防
30	2001年3月10日	廣崎彰吾（埼玉県自閉症児者親の会「けやきの郷」初雁の家施設長） 施設に感動はあるのか？

回	開催日／会場	講師／演題
31	2001年6月23日	阿子島茂美（明星学園教諭 東京LD教育研究会） 教室の中のLD（学習障害）の子どもたち
32	2001年10月6日	矢田部多賀子（青葉クリニック） ある夜間の電話相談の報告
33	2002年1月19日 文学部36号館3703教室	太田昌孝（学芸大学特殊研究施設教授） ADHDと関連障害の生物学的基礎
34	2002年3月16日 文学部32号館334教室	武藤直子（全国療育相談センター心理相談員） 太田ステージから見た『心の理論』
35	2002年9月21日 文学部32号館334教室	横田 滋 発達助成の原理から学んだこと
36	2003年2月8日 文学部32号館334教室	松友 了（全日本手をつなぐ育成会） 知的障害者福祉の現状と課題
37	2003年5月10日 文学部32号館334教室	小泉浩一（旭出養護学校） 臨床現場で生かすマカトン—自閉症児のための手話—
38	2003年10月4日 文学部32号館334教室	三浦勝雄 実存分析を用いたあるケースについて
39	2007年11月10日 早稲田大学戸山キャンパス会議室	渡辺勸持（東日本国際大学教授、1965文卒） 知的障害者の脱施設化について

2. 臨床心理学研究部会

■ 開催記録一覧

回	開催日／会場	講師／演題
1	1983年1月21日	台 利夫 心理学臨床におけるケース研究の意義 —主として精神病患者と心理劇について—
2	1983年3月18日	春木 豊 自己効力（self-efficacy）について
3	1983年5月18日	今井保次 職場におけるメンタルヘルス運動の展開
4	1983年6月17日	瓜生 武 最近の非行事例の特徴と問題
5	1983年7月15日	木村 駿 日本人の対人恐怖
6	1983年10月14日	種村 純 半側視空間失認のリハビリテーション

回	開催日／会場	講師／演題
7	1983年11月18日	深沢道子 精神療法におけるスーパービジョン
8	1983年12月9日	詫摩武俊 最近の西ドイツ青年の問題傾向について
9	1984年1月20日	辻 祥子 ある境界例の治療から
10	1984年3月16日	北山 修 日本の民話と精神分析
11	1984年5月18日	小野 顕 社会福祉の現場では今…ノーマリゼーションの意味するもの
12	1984年6月15日	滝沢清人 高速社会と心の病理
13	1984年9月21日	谷中輝雄 精神障害者グループ活動とともに
14	1984年10月19日	稲松信雄 老人研究について
15	1984年12月8日	見学会 社会福祉法人 鶴風会 東京小児療育病院・みどり愛育園
16	1985年3月15日	島津貞一 内田クレベリン事始め
17	1985年5月17日	松本基子 難民定住者の臨床社会心理
18	1985年6月14日	西本武彦 証言の信頼性について
19	1985年7月12日	柴田 出 イメージ分析療法について
20	1985年11月15日	窪 竜子 四本足のニワトリ —その背景分析の試み—
21	1986年6月20日	井上勝也 生きがいの心理学
22	1986年11月14日	大村政男 血液型と性格
23	1987年3月20日	八尋華那雄 対人距離テストについて
24	1987年4月17日	福澤一吉 色と文字の神経学
25	1987年5月15日	高林秀夫 相談事例より見た継母子関係の問題

回	開催日／会場	講師／演題
26	1987年6月19日	福澤一吉 読むことと書くこと
27	1987年10月23日	門前 進 自己催眠イメージ分析について
28	1987年12月4日	坂野雄二 最近の認知行動療法の動向について
29	1988年5月21日	外岡豊彦 うつ状態の心得 (臨床心理・意識心理の合同研究会)
30	1988年12月2日	角張憲正 自殺志願者に自殺を勧める法 “認知行動療法について”
31	1989年3月24日	福澤一吉 失語症とはなにか
32	1989年6月30日	深沢道子 心配性の人のためのワークショップ
33	1989年7月21日	木村 駿 認知行動トレーニング
34	1989年9月29日	北山 修 言葉と精神療法 ―精神分析の立場から―
35	1990年6月29日	菅野 純 登校拒否 ―相談治療学級における実践と課題―
36	1990年7月20日	田中 健 体験的カウンセリングについて
37	1990年10月19日	八木孝彦 自律訓練法の基礎的実験的検討
38	1990年11月30日	石崎幸一 現代の離婚の動向について
39	1991年4月26日	六角浩三 心理療法諸学派の最近の動向
40	1991年6月28日	根建金男 ストレス免疫訓練の日本への適用
41	1991年7月19日	三沢直子 母子関係の予防的アプローチ
42	1991年11月29日	篁 一誠 自閉症について
43	1992年6月26日 文学部第2会議室	山下澄子 婦人相談の現状 ―女性相談センターの窓口より―
44	1992年7月17日 文学部第2会議室	大野 裕 認知療法とその臨床的位置づけ

回	開催日／会場	講師／演題
45	1993年7月23日 文学部第5会議室	市井雅哉 子どもの認知行動療法 — Temple大学での経験を通して—
46	1993年11月19日 文学部第5会議室	田辺幸喜 私の芸術療法
47	1994年10月14日 文学部第2会議室	小野光季 障害者と家庭裁判所
48	1995年5月20日 文学部大学院ゼミ室	島津貞一・北村圭三 (コーディネーター：河合美子) 「阪神大震災被災者の心理」 (早稲田大学心理学会 第20回大会シンポジウム)
49	1995年7月11日 文学部第2会議室	新田泰生 コメンテーター：原 裕視 産業組織におけるメンタルヘルス
50	1995年10月27日 文学部第1会議室	深澤道子 CISD (Critical Incident Stress Debriefing) について
51	1996年5月18日 本部7号館	横山哲夫・角張憲正・新田泰生・越川房子 (コーディネーター：新田泰生) 日本的集団における個のあり方 — 臨床心理学の視点から— (早稲田大学心理学会 第21回大会シンポジウム)
52	1996年10月25日 文学部第1会議室	Reiko Homma True サンフランシスコ市における精神衛生行政 — アメリカ社会における心理学の役割—
53	1997年5月31日 文学部第1会議室	岡島陽子・三沢直子 (コーディネーター：河合美子、司会：深澤道子) 「女性・家族・仲間・社会 — 新しいサポートのありかた—」 (臨床・非行・発達臨床心理学研究会合同シンポジウム)(早稲田大学心理学会 第21回大会)

1～28は臨床研究会、29～47は臨床心理研究会、48～53は臨床心理学研究部会として実施

3. 生理心理学精神生理学研究部会

■ 開催記録一覧

回	開催日／会場	講師／演題
	※1987年以前の活動（第1回～第15回）は記録が残されていない（文学部で開催）	
16	1988年12月20日 早稲田大学人間科学部特殊実験室（570室）	山崎勝男（早稲田大学人間科学部） 自律系よりみた定位反応
17	1989年5月13日	佐々木由香（早稲田大学） 入眠時REM睡眠の出現要因—REM睡眠サーカディアンリズムが及ぼす影響について 竹内朋香（早稲田大学） 夢体験と金縛り体験から検討した入眠時REM睡眠中の精神活動について
18	1989年9月16日 東京家政学院大学町田校舎	宮下彰夫（東京都神経科学総合研究所） 自律神経系のサーカディアン・リズム
19	1989年12月14日 早稲田大学人間科学部特殊実験室（570室）	岡村俊彦（早稲田大学大学院理工学研究科） 精神作業のプロセス変化とVEPの特性
20	1990年7月21日 早稲田大学人間科学部特殊実験室（570室）	宮内 哲（東京都神経科学総合研究所非常勤研究員） REM睡眠中の急速眼球運動・脳波と夢見
21	1990年12月8日 早稲田大学人間科学部特殊実験室（570室）	山崎勝男（早稲田大学人間科学部） ハイドログラフの使用経験
22	1991年5月25日 早稲田大学人間科学部特殊実験室（570室）	小島政滋（早稲田大学） 入眠期における生理指標、行動指標、意識体験の変容
23	1991年12月12日 早稲田大学人間科学部特殊実験室（570室）	佐々木由香（早稲田大学大学院文学研究科） 夜間睡眠の中途覚醒がその後の体温パターンに及ぼす影響
24	1993年7月29日 早稲田大学人間科学部特殊実験室（570室）	正木宏明（早稲田大学大学院人間科学研究科） 脳の準備電位とパフォーマンス
25	1994年10月15日 早稲田大学人間科学部特殊実験室（570室）	有路義敦（早稲田大学大学院人間科学研究科） 運動イメージ想起中の生理反応の変化と時間感覚
26	1994年12月10日 早稲田大学人間科学部特殊実験室（570室）	堀野博幸（早稲田大学大学院人間科学研究科） 全身運動時におけるEMGフィードバックと筋制御 竹内朋香（早稲田大学大学院文学研究科） REM期覚醒法による夢研究（夢特性評定尺度の作成）

回	開催日／会場	講師／演題
27	1995年3月11日 早稲田大学人間科学部特殊実験室 (570室)	福田秀樹 (労働省産業医学総合研究所労働保健研究部) 眼球運動発現に關与する精神生理学的要因
28	1995年5月20日 早稲田大学人間科学部特殊実験室 (570室)	竹内朋香 (日本學術振興會特別研究員) 夢を追って 佐々木由香 (郵政省通信総合研究所) 先端技術によるアプローチ 正木宏明 (早稲田大学人間科学部大学院) やる気と脳波 (早稲田大学心理学会第20回大会シンポジウム)
29	1995年8月5日 郵政省 通信総合研究所 共用実験室	宮内 哲 (郵政省 通信総合研究所 通信科学部) f-MRI (機能的磁気共鳴画像) による脳機能研究について
30	1995年12月16日 早稲田大学人間科学部特殊実験室 (570室)	山本由華吏 (東京都神経科学総合研究所研究生、早稲田大学大学院人間科学研究科研修生) REM睡眠とNREM睡眠における自覚体験の比較
31	1996年4月27日 早稲田大学人間科学部特殊実験室 (570室)	正木宏明 (早稲田大学大学院人間科学研究科) 運動準備電位に及ぼす課題難度の影響
32	1996年6月29日 早稲田大学人間科学部特殊実験室 (570室)	市原 信 (東京家政学院大学人文学部) マルチメディアとバイオフィードバックの可能性
33	1996年9月28日 早稲田大学人間科学部特殊実験室 (570室)	多喜乃亮介 (白梅学園短期大学) 欠落刺激を用いた誘発反応の研究
34	1996年12月7日 早稲田大学人間科学部特殊実験室 (570室)	福田秀樹 (産業医学総合研究所) 運動の抑制と発現について
35	1997年2月22日 早稲田大学人間科学部特殊実験室 (570室)	竹内朋香 (東京都神経科学総合研究所) When do we dream? 高原千佳 (早稲田大学大学院人間科学研究科) SPRと刺激予期、運動準備との関係
36	1997年5月31日 早稲田大学人間科学部特殊実験室 (570室)	正木宏明 (早稲田大学人間科学部スポーツ科学科) 動作の準備はいつ始まるのか — 運動課題と脳波の関係 — 山本由華吏 (早稲田大学大学院人間科学研究科) 夢の実験的研究 (睡眠変数からみた夢再生率の検討)
37	1997年7月26日 早稲田大学人間科学部特殊実験室 (570室)	佐々木由香 (通信総合研究所) 睡眠覚醒リズムによる体温リズムの同調可能について 本多麻子 (早稲田大学大学院人間科学研究科) 能動的・受動的対処に關する生理心理的研究 (皮膚電気活動と心拍数の変化)

回	開催日／会場	講師／演題
38	1997年12月6日 早稲田大学人間科学部特殊実験室 (570室)	久保淑子 (早稲田大学大学院人間科学研究科) CNVに及ぼす情動刺激の効果 山本由華吏 (早稲田大学大学院人間科学研究科) REM睡眠-NREM睡眠の発現経過と精神活動についての生理心理学的研究
39	1998年11月7日 早稲田大学人間科学部特殊実験室 (570室)	多喜乃亮介 (白梅学園短期大学) 聴覚性MMNにおよぼす、高頻度反復刺激提示の影響 正木宏明 (日本学術振興会特別研究員) 固定系列音刺激呈示に対するERP
40	1999年7月10日 早稲田大学人間科学部特殊実験室 (570室)	宮崎里司 (早稲田大学日本語研究教育センター) 外国人日本語学習者と日本語母語話者の脳内言語情報処理過程の比較
41	1999年12月11日 早稲田大学人間科学部特殊実験室 (570室)	梅沢章男 (福井大学教育地域科学部人間健康科学研究室) ストレス、情動による呼吸系変容とその調整についての現況と課題
42	2000年8月4日 早稲田大学人間科学部特殊実験室 (570室)	本多麻子 (早稲田大学大学院人間科学研究科) 第27回国際心理学会に参加して ―情動測定の現在、Dr. Peter Lang methodの有効性―
43	2001年2月10日 離宮 (所沢パークホテル内)	報告会 正木宏明 (日本学術振興会海外特別研究員)、2001年4月からドイツHumboldt University (Institut for Psychologie) で「事象関連電位による脳内情報処理過程の研究」 山本由華吏、「起床時の主観的睡眠感を形成する要因の精神生理学研究」等により学位取得 (早大・人間科学部)、2001年4月より花王株式会社の研究開発部門で生理心理学的研究に従事予定
44	2001年10月27日 早稲田大学人間科学部特殊実験室 (570室)	福田一彦 (福島大学教育学部) 生体リズムとしての睡眠と覚醒について 本多麻子 (早稲田大学人間科学部) 強度の異なる運動が感情と脳波の左右差に及ぼす効果
45	2002年8月5日 早稲田大学人間科学部特殊実験室 (570室)	本多麻子 (早稲田大学人間科学部) 快・不快感情の精神生理学
46	2002年12月7日 早稲田大学人間科学部特殊実験室 (570室)	田中秀明 (早稲田大学大学院人間科学研究科) エラー関連陰性電位によるエラー検出機能の研究
47	2003年5月24日 早稲田大学所沢キャンパス第1会議室	William J. Gehring (ミシガン大学) 内側前頭皮質のモニタリングと評価プロセス
48	2003年8月2日 早稲田大学スポーツ科学部 精神生理学実験室 (570室)	正木宏明 (早稲田大学スポーツ科学部) 脳内情報処理過程とERP ―偏側性準備電位とエラー関連陰性電位の機能的意義―

回	開催日／会場	講師／演題
49	2003年12月20日 早稲田大学人間科学部特殊実験室 (570室)	竹内成生 (早稲田大学大学院人間科学研究科) 情動の予期と刺激先行陰性電位 (SPN, stimulus-preceding negativity) の関連について
50	2004年 7月24日 早稲田大学人間科学部特殊実験室 (570室)	Grit Herzmann (Humboldt-Universitaet zu Berlin Institut fuer Psychologie Biologische Psychologie/ Psychophysiologie) Investigating familiar face recognition with SCR and ERPs 松田いづみ (科学警察研究所 法科学第四部 情報科学第一研究室) 生理学的知見に基づいた生理反応の多変量解析
51	2004年12月11日 早稲田大学人間科学部特殊実験室 (570室)	宮崎 真 (国立身体障害者リハビリテーションセンター研究所 感覚機能系障害研究部) 一致タイミング動作の制御について：fMRIによる関連脳部位の特定、およびベイズモデルによる展望
52	2005年 7月23日 早稲田大学人間科学部特殊実験室 (570室)	浅岡章一 (早稲田大学大学院人間科学研究科 (博士後期)) 大学生の睡眠習慣と精神的健康との関連
53	2005年12月10日 早稲田大学人間科学部特殊実験室 (570室)	本多麻子 (川村学園女子大学文学部) 感情喚起スライドに対する予期が主観的評価と心拍数に及ぼす影響
54	2006年 4月 8日 早稲田大学人間科学部特殊実験室 (570室)	Prof. Dr. Werner Sommer (Institut fuer Psychologie Humboldt-Universitaet zu Berlin) Movement preparation (lateralized readiness potential: LRP)
55	2006年 8月 3日 早稲田大学人間科学部特殊実験室 (570室)	高澤則美 (江戸川大学社会学部人間心理学科) 注意の集中は呼吸運動を抑制する
56	2006年12月15日 早稲田大学人間科学部特殊実験室 (570室)	小川景子 (早稲田大学 スポーツ科学学術院) レム睡眠中の急速眼球運動に伴う脳電位と夢見の精神生理学的検討
57	2007年 3月10日 早稲田大学人間科学部特殊実験室 (570室)	浅岡章一 (早稲田大学スポーツ科学部) 眠気とエラー反応モニタリング
58	2007年 8月 4日 早稲田大学人間科学部特殊実験室 (570室)	望月芳子 (早稲田大学) CNVパラダイムに反映するタイミング
59	2008年 8月 9日 早稲田大学人間科学部特殊実験室 (570室)	紙上敬太 (早稲田大学スポーツ 科学学術院) 身体運動は認知機能を改善する？
60	2008年12月22日 早稲田大学人間科学部特殊実験室 (570室)	小川景子 (早稲田大学スポーツ科学学術院PD) レム睡眠中の脳機能研究 ～ヒトとラットを対象とした夢の発生メカニズム検討～

回	開催日／会場	講師／演題
61	2009年8月7日 早稲田大学人間科学部特殊実験室 (570室)	玉置應子 (早稲田大学スポーツ科学学術院、日本学術振興会特別研究員) 視覚運動学習における睡眠の効果
62	2009年12月19日 早稲田大学人間科学部特殊実験室 (570室)	正木宏明 (早稲田大学スポーツ科学学術院) 行為と結果の随伴性と事象関連電位
63	2011年7月30日 早稲田大学スポーツ科学部	對間直也 (早稲田大学大学院スポーツ科学研究科修士1年) 運動学習における文脈干渉効果とERP
64		記載なし
65	2012年8月22日 早稲田大学人間科学部特殊実験室 (570室) 早稲田大学人間科学部特殊実験室 (570室)	ベソンリュウ (早稲田大学大学院スポーツ科学研究科D3) The effects of 12 weeks of low-volume walking program on structural brain changes in elderly adults Lu Xu (早稲田大学大学院スポーツ科学研究科D2) Effects of Response Complexity and Movement Duration on the Lateralized Readiness Potential
66	2012年12月22日 早稲田大学人間科学部特殊実験室 (570室)	望月芳子 (早稲田大学スポーツ科学研究センター招聘研究員) 若年者と比較した中高年者の運動反応と前期・後期CNV
67	2014年3月22日 早稲田大学所沢キャンパス第一会議室	浅岡章一 (江戸川大学社会学部人間心理学科) 演題：深夜の仮眠がエラーモニタリング機能 (ERN・Peの振幅) に与える影響 (The effects of a nighttime nap on the error-monitoring functions during extended wakefulness)
68	2015年3月13日 早稲田大学人間科学部特殊実験室 (570室)	本多麻子 (東京成徳大学応用心理学部健康・スポーツ心理学科) 筆記が楽観性と悲観性に及ぼす効果
69	2016年2月27日 早稲田大学人間科学部特殊実験室 (570室)	平尾貴大 (早稲田大学大学院スポーツ科学研究科博士課程1年) モンティ・ホール・ジレンマ課題における予期プロセス—刺激前陰性電位に着目して—
70	2017年3月11日 早稲田大学人間科学部特殊実験室 (570室)	松橋拓努 (早稲田大学大学院スポーツ科学研究科・修士課程) 運動学習とパフォーマンスモニタリング機能の関係 吉川直輝 (早稲田大学大学院スポーツ科学研究科・修士課程) 視線行動に着目したアスリートのあがり防止の研究
71	2017年8月5日 江戸川大学	高澤則美 (江戸川大学名誉教授) 生理心理学研究を目指す皆さんへ—気づくこと、何とかすること、気を付けること

注：早稲田大学スポーツ科学部 (旧：人間科学部) 精神生理学実験室

4. 老年学研究部会

■ 開催記録一覧

回	開催日／開催場所	参加者数	話 題
1	2002年9月20日 早大文学部第2研究棟会議室（第2研究棟会議室）	18人	本部会の設立趣旨の説明（谷口・所）、参加者の自己紹介、今後の運営と日程に関する意見交換
2	2002年11月15日 第2研究棟会議室	16人	幹事による老年学のフレームワークの概説、参加者同士のディスカッション
3	2003年1月17日 第2研究棟会議室	18人	地域実践活動の報告（シニアのためのサロン活動＜藤田愛・水谷玲子＞）、団地に開設した老人クラブの活動＜山田敏夫＞
4	2003年3月14日 第2研究棟会議室	14人	「古い」とボランティア（小野 顕）、本会に期待すること（外川勝己）、米国老年学会の研究の状況（宮内康二）
5	2003年5月16日 第2研究棟会議室	20人	老年学の研究課題発見のフレームワーク — 団子三兄弟（外川勝己）
6	2003年7月18日 第2研究棟会議室	17人	在宅介護の実態とサポートの在り方について考える（鈴木規子・張本保昌・加藤直子・谷口幸一）
7	2003年9月19日 第2研究棟会議室	16人	老若世代間交流の実践活動の在り方を考える（山田敏夫・安永明智・谷口幸一）
8	2003年11月21日 第2研究棟会議室	16人	今後の年金・医療問題について考える（張本保昌・大久保とよ子）、病院・福祉施設での患者・利用者のQOL向上の活動について（太田・牟田・田口・藤田・水谷・石井）
9	2004年1月26日 第2研究棟会議室	18人	傑出高齢者の人物研究（中村 誠）、ボランティア精神と福祉（特別講演・宮城 孝／法政大学現代福祉学部）
10	2004年3月19日 第2研究棟会議室	17人	孤立・孤独に陥らない生き方とその方策について考える（飯塚弘志・加藤直子・大久保とよ子）、英国留学帰朝報告（所 正文／国士館大学教授）
11	2004年5月21日 第2研究棟会議室	6人	高齢ドライバーの運転適性（講義・所 正文）
12	2004年7月16日 第2研究棟会議室	6人	高齢者生き方事例調査の進め方（谷口幸一・所正文）
13	2004年9月17日 第2研究棟会議室	8人	高齢者生き方事例報告Ⅰ-①（飯塚弘志・山田敏夫・加藤直子・大久保とよ子）
14	2004年11月16日 国士館大学政経学部会議室（政経学部会議室）	12人	高齢者生き方事例報告Ⅰ-②（加藤直子・飯塚弘志・山田敏夫）

回	開催日／開催場所	参加者数	話 題
15	2005年1月18日 政経学部会議室	6人	高齢者生き方事例報告Ⅰ-③（飯塚弘志・谷口幸一・中村 誠）
16	2005年3月15日 政経学部会議室	8人	高齢者生き方事例報告Ⅰ-④（張本保昌・大久保とよ子）
17	2005年5月17日 政経学部会議室	7人	前年度に会員が収集した高齢者の生き方事例を読み返しながらか、いくつかの視点からまとめる作業を行った。
18	2005年7月19日 政経学部会議室	6人	会員の目から見て、ユニークな生き方されている事例の検討
19	2005年9月20日 政経学部会議室	8人	会員の目から見て、平凡だが何かキラリと光る生き方をされている事例の検討
20	2005年11月15日 政経学部会議室	6人	会員の目から見て、様々な障害を乗り越えて超然とした生き方をされている事例の検討
21	2006年1月17日 政経学部会議室	8人	事例報告集の構成作業Ⅰ
22	2006年3月14日 政経学部会議室	7人	事例報告集の構成作業Ⅱ
23	2006年5月16日 政経学部会議室	8人	高齢者生き方事例検討Ⅱ-①：事例発表一例（張本保昌）
24	2006年7月18日 政経学部会議室	6人	高齢者生き方事例検討Ⅱ-②：事例発表二例（加藤直子・飯塚弘志）
25	2006年9月19日 政経学部会議室	7人	高齢者生き方事例検討Ⅱ-③：事例発表二例（信川京子・中村 誠）
26	2006年11月21日 政経学部会議室	6人	高齢者生き方事例検討Ⅱ-④；事例発表一例（師井和子）
27	2007年1月23日 政経学部会議室	6人	高齢者生き方事例検討Ⅱ-⑤：事例発表一例（張本保昌）
28	2007年3月11日-12日 富士五湖・山中湖畔研修所	6人	宿泊研修会（事例検討Ⅱ-⑥：谷口幸一および過去2年間の活動内容のまとめ）
29	2007年5月15日 政経学部会議室	6人	高齢者生き方事例集の編集作業①
30	2007年7月17日 政経学部会議室	7人	高齢者生き方事例集の編集作業②
31	2007年9月25日 政経学部会議室	7人	高齢者生き方事例集の編集作業③：本事例集に最終的に掲載された事例は、20ケースは、男性12例（73-97歳）、女性8例（65-87歳）
32	2007年11月20日 政経学部会議室	6人	ピア・ボランティアに関する勉強会①
33	2008年1月15日 政経学部会議室	7人	ピア・ボランティアに関する勉強会②

回	開催日／開催場所	参加者数	話 題
34	2008年3月12日 富士五湖・山中湖畔研修所	7人	生き方事例集の発刊祝と次年度のピア・ボランティアのスケジュールの検討・Volunteerに関するDVDの鑑賞
35	2008年5月20日 政経学部会議室	6人	ピア・ボランティア (Peer Volunteer : PV) の今後の活動方針・日程の検討
36	2008年7月22日 政経学部会議室	5人	PV活動の報告① 鎌倉市内の特別養護老人ホームでの活動 (利用者との会話、共同作業：塗り絵・似顔絵かき・囲碁・回想法・音楽療法など)
37	2008年9月16日 政経学部会議室	6人	PV活動の報告② 鎌倉市内の特別養護老人ホームでの活動 (利用者との会話、共同作業：塗り絵・似顔絵かき・囲碁・回想法・音楽療法など)
38	2008年11月18日 政経学部会議室	6人	PV活動の報告③ 鎌倉市内の特別養護老人ホームでの活動 (利用者との会話、共同作業：塗り絵・似顔絵かき・囲碁・回想法・音楽療法など)
39	2009年1月20日 政経学部会議室	7人	PV活動の報告④ 鎌倉市内の特別養護老人ホームでの活動 (利用者との会話、共同作業：塗り絵・似顔絵かき・囲碁・回想法・音楽療法など)
40	2009年3月11日-12日 富士五湖・山中湖畔研修所	7人	宿泊研修会 本年度のPV活動のまとめ：会員各位のボランティア活動の体験発表と次年度の活動についての検討
41	2009年5月19日 政経学部会議室	8人	2009年度計画の検討 老後へのソフトランディング移行過程に関する調査研究の企画—Discussion
42	2009年7月21日 政経学部会議室	7人	本年度の調査計画 定年退職後の生活適応① (話題提供：successful aging 5類型 谷口)
43	2009年9月15日 政経学部会議室	6人	本年度の調査計画 定年退職後の生活適応に関する調査内容の検討② (全員)
44	2009年11月26日 政経学部会議室	7人	本年度の調査計画 会員報告③：(中村 誠・坂井圭介)
45	2010年1月28日 政経学部会議室	6人	本年度の調査計画 定年退職後の生活適応に関する調査内容の検討④ (全員)
46	2010年3月7日-8日 富士山中湖畔ホテル	6人	宿泊研修会 定年退職後の生活適応に関する調査内容の検討⑤ (全員)

回	開催日／開催場所	参加者数	話 題
47	2010年5月27日 政経学部会議室	6人	サードエイジのライフスタイルに関する調査の内容と年度計画の検討（全員）
48	2010年8月31日 政経学部会議室	7人	サードエイジのライフスタイルに関する調査の内容と年度計画の検討（全員）
49	2010年9月30日 政経学部会議室	7人	サードエイジのライフスタイルに関する調査地・分析法の検討（全員）
50	2010年11月25日 政経学部会議室	7人	学校教材に見る子どもに教えるエイジングに関する研究発表（講師：柴崎裕美・明治学院大学）
51	2011年2月10日 政経学部会議室	7人	ライフスタイル調査の実施後のデータ分析作業（全員）
52	2011年3月6日-7日 富士山中湖畔ホテル	7人	ライフスタイル調査の結果報告書作成に向けての検討（全員）
53	政経学部会議室	6人	早稲田大学心理学会老年学研究部会の10周年記念報告書の企画の検討①
54	政経学部会議室	7人	老年学研究部会記念誌の編集作業②
55	政経学部会議室	6人	老年学研究部会記念誌の編集作業③
56	政経学部会議室	8人	老年学研究部会記念誌の編集作業④
57	政経学部会議室	7人	老年学研究部会記念誌の編集作業⑤
58	厚木市七沢温泉七沢荘	7人	老年学研究部会記念誌の完成と今後の活動について
59	2012年5月25日 政経学部会議室	6人	今後の部会活動の在り方についての検討（全員）
60	2012年7月20日 政経学部会議室	7人	今後の部会活動の在り方についての検討（全員）
61	2012年9月28日 政経学部会議室	7人	今後の部会活動の在り方についての検討（全員）
62	2012年10月14日 筑波大学大塚校舎		日本老年行動科学会15回大会 「定年退職前後の世代のライフスタイルに関する調査研究」(会員7人の連名口頭発表)
63	2012年12月14日 政経学部会議室	6人	会員の研究発表
64	2013年1月25日 政経学部会議室	6人	会員の研究発表
65	2013年3月19日-20日 宿泊研修（箱根・強羅）	7人	会員による話題提供（高齢者の介護、就労支援、老若世代間の交流活動、最新の高齢者心理に関するDVD鑑賞など）
66	2013年5月1日	7人	6月の全体シンポジウムの準備 6月22日の総会における全体シンポジウムの内容の検討（全員）と老年学研究部会10周年記念報告書の発刊に向けての作業

回	開催日／開催場所	参加者数	話 題
67	2013年 6月22日	6人	早稲田大学心理学会第38回大会（総会）全体シンポジウム プロダクティブ・エイジング—2040年高齢者4割の社会を考える（キーノートスピーカー：谷口幸一、指定討論：所 正文、司会：石井康智）参加者80人
68	2013年 9月 1日	6人	全体シンポジウム（2013年 6月22日）の総括 当日の参加者からの感想（エイジングクイズの回答等）を基に今後の老年学研究部会が担うべき活動についての意見交換を行った
69	2013年10月12日 2014年～2016年（老年学研究部会の休会期間） 立正大学品川校舎	6人	早稲田大学心理学会・老年学研究部会の会員を中心に、「21世紀日本研究セミナー」と称する社会貢献を目的としたセミナーを立ち上げた。老年学研究部会とは、緊密な連携をとっていくものの、運営上は一線を画した研究部会として位置付けた。次年度（2014）からは、老年学研究部会はしばし休会の扱いとすることになった。 老年学研究部会は休会 休会中は、老年学研究部会の会員を中心に、「21世紀日本研究セミナー」を各年に3回～4回実施した（各回、20～30名の参加者）
70	2017年 5月13日 高田馬場/喫茶ルノアール	6人	老年学研究部会の再開 3年間の休会后初めて集まり、今後の活動内容についてDiscussionを行った。
71	2018年11月10日	6人	老年学研究部会幹事2名による研究発表 ①所 正文「働き方のセオリーを探る」(「人生100年時代の生き方・働き方：所 正文著」)、 ②谷口幸一「簡易型睡眠認知行動療法の高齢者の睡眠改善と睡眠薬減量に対する効果」(日本公衆衛生雑誌掲載論文)

5. 意識心理学研究部会

■ 開催記録一覧

回	開催日／会場	講師／演題
1	1985年 5月18日	不明
2	1985年 6月21日	不明
3	1987年 4月25日	不明

回	開催日／会場	講師／演題
4	1988年5月21日	外岡豊彦（'40、文心） うつ状態の心得
5	1990年3月24日	望月享子 ブンゲ著『精神の本性について』
6	1990年5月12日	八木孝彦 自律訓練法の基礎的研究
7	1990年10月19日	斉藤 晃 子どもの自律性の獲得過程に関して
8	1991年3月23日	岩下豊彦 いわゆる科学的心理学の発足と初期に関する若干の史的確認
9	1991年5月12日	神原直幸 テレビ番組の視聴後の時間経過に伴う記憶の変容
10	1991年9月28日	田中徹二 “見えない人”の意識世界
11	1991年11月30日	矢野裕之 夜間の自動車事故に関する意識調査
12	1992年4月4日 文学部第5会議室	宮崎洋子 テレビ番組視聴後に自我へ堆積される観念について
13	1992年5月16日 文学部第6会議室	児玉憲典 特異な症状変遷の後に神経性食欲不振症を発生した一例について
14	1992年10月17日 文学部第6会議室)	中川作一 自己像の国際比較
15	1993年1月23日 文学部第5会議室	神原直幸 誤った関連づけについて
16	1994年1月15日 文学部第5会議室	前田忠彦 共分散構造分析について
17	1994年4月16日 文学部第2会議室	矢野裕之 年齢とlie scaleの関係について
18	1994年6月4日 文学部第2会議室	神原直幸 野外活動による子どもの社会的態度の変容
19	1994年3月23日 文学部第4会議室	前田忠彦 日本人の国民性調査について
20	1994年3月23日 文学部第4会議室	児玉憲典 自己視線恐怖症の一例について
21	1995年3月23日 文学部大学院ゼミ室	鈴木宏昌・内藤雄太・矢野裕之 早稲田大学心理学会第20回大会 シンポジウム (5) 「企業で働き続けるということ—早大OB1236名の履歴書—」

回	開催日／会場	講師／演題
22	1995年10月7日 文学部第5会議室	岩下豊彦 戸川心理学に関する一つの理解
23	1995年12月9日 文学部第6会議室	内田純平 作業障害者（?!）としての内田勇三郎あれやこれや
24	1996年5月18日 文学部大学院ゼミ室	所 正文・矢野裕之 早稲田大学心理学会第21回大会 シンポジウム（4） 「経済行動における“意識”について」
25	1996年12月7日 文学部第6会議室	岩下豊彦 データのねつ造について
26	1997年5月31日 文学部大学院演習室307	矢野裕之 早稲田大学心理学会第22回大会 シンポジウム（4） 「心理学における、正しい『エンジニアごっこ』のあり方について」

6. マスコミ研究部会

■ 開催記録一覧

回	開催日／会場	講師／演題
1	1995年4月15日 文学部心理学実験室	嶋内義明（読売テレビ） 阪神大震災と現地報道
2	1995年5月20日 文学部大学院ゼミ室	早稲田大学心理学会第20回大会・部会別シンポジウム 話題提供：嶋内義明（'59文、読売テレビ）、井徳正吾（'75文、博報堂） 「阪神大震災の報道を振り返って」 コーディネーター：本間弘光（'47文）、岡本淑人（'50文、白鷗大学）、川本直彦（'58文、電通プロックス）
3	1995年6月17日 文学部心理学実験室	本間弘光（早稲田大学） 大震災報道シンポジウムの回顧
4	1995年7月18日 文学部心理学実験室	川本直彦（電通プロックス） オウム真理教と社会不安
5	1995年10月21日 文学部心理学実験室	松本光司（電通） オウム真理教と報道
6	1995年11月6日 文学部心理学専修室	岡本淑人（白鷗大学） 社会心理学からみた新興宗教
7	1995年12月2日 文学部心理学専修室	本間弘光（早稲田大学） 世論調査事始めへの回顧

回	開催日／会場	講師／演題
8	1996年1月20日 文学部会議室	松本光史（電通） テレビ番組に関する問題提起
9	1996年2月3日 文学部会議室	川本直彦（電通ブックス） テレビ問題点の検討
10	1996年3月16日 文学部会議室	本間弘光（早稲田大学） テレビ調査票案について
11	1996年4月13日 文学部会議室	テレビ調査票の修正
12	1996年5月11日 文学部会議室	テレビ調査集計
13	1996年5月18日 早稲田大学心理学会第21回大会・部会別シンポジウム 早大本部7号館会議室	松井光史（電通）、寺沢美彦（日本福祉教育専門学校）、 松井陽通（博報堂） 「テレビを考える」 コーディネーター：本間弘光（早稲田大学）
14	1996年6月15日 文学部会議室	本間弘光（早稲田大学） テレビの第2回調査の結果
15	1996年7月13日 文学部会議室	小倉重男 選挙の『しらけ』について問題提起
16	1996年9月14日 文学部会議室	小川秀治（ネットワンシステムズ） 『しらけ』とマスコミの問題検討
17	1996年10月12日 文学部会議室	岡本淑人（白鷗大学） 『しらけ』とは何か
18	1996年11月16日 文学部会議室	田中義英（日本自動車連盟） 『しらけ』調査の方法
19	1996年12月14日 文学部会議室	寺沢美彦（早稲田福祉専門学校） 『しらけ』調査案の予備調査結果
20	1997年1月1日 文学部第9会議室	全員による討議：テーマ「しらけ」
21	1997年2月8日 文学部第4会議室	全員による討議：テーマ「しらけ」
22	1997年3月22日 文学部第9会議室	全員による討議：テーマ「しらけ」
23	1997年4月5日 文学部第4会議室	全員による討議：テーマ「しらけ」
24	1997年4月12日 文学部第4会議室	全員による討議：テーマ「しらけ」
25	1997年4月19日 文学部第4会議室	全員による討議：テーマ「しらけ」

回	開催日／会場	講師／演題
26	1997年5月10日 文学部第4会議室	全員による討議：テーマ「しらけ」
27	1997年5月17日 文学部第4会議室	全員による討議：テーマ「しらけ」
28	1997年5月24日 文学部第4会議室	全員による討議：テーマ「しらけ」
29	1997年5月31日 早稲田大学心理学会第22回大会・部会別シンポジウム	田中義英（日本自動車連盟）、松本光史（電通）、本間弘光（早稲田大学） 「政治とテレビへの警鐘」
30	1997年6月21日 文学部第4会議室	全員による討議：テーマ「マスコミの報道姿勢」
31	1997年7月26日 文学部第4会議室	全員による討議：テーマ「マスコミの報道姿勢」
32	1997年9月13日 文学部第5会議室	全員による討議：テーマ「マスコミの報道姿勢」
33	1997年10月4日 文学部第6会議室	全員による討議：テーマ「マスコミの報道姿勢」
34	1997年11月22日 文学部第7会議室	全員による討議：テーマ「マスコミの報道姿勢」
35	1997年12月12日 文学部第8会議室	全員による討議：テーマ「マスコミの報道姿勢」
36	1998年1月10日 文学部第4会議室	全員による討議：テーマ「マスコミの報道姿勢」
37	1998年2月6日 文学部第4会議室	全員による討議：テーマ「マスコミの報道姿勢」
38	1998年3月13日 文学部第4会議室	全員による討議：テーマ「マスコミの報道姿勢」
39	1998年6月26日 文学部第4会議室	全員による討議：テーマ「マスコミの報道姿勢」
40	1998年7月24日 文学部第4会議室	全員による討議：テーマ「マスコミの報道姿勢」
41	1998年9月18日 文学部第4会議室	全員による討議：テーマ「マスコミの報道姿勢」
42	1998年11月13日 文学部第4会議室	全員による討議：テーマ「マスコミの報道姿勢」
43	1998年10月17日 文学部第5会議室	全員による討議：テーマ「マスコミの報道姿勢」
44	1998年12月4日 文学部第6会議室	全員による討議：テーマ「マスコミの報道姿勢」

回	開催日／会場	講師／演題
45	1999年1月29日 文学部第4会議室	全員による討議：テーマ「マスメディア批判」
46	1999年2月4日 伊東会館	全員による討議：テーマ「マスメディア批判」
47	1999年3月26日 文学部第6会議室	全員による討議：テーマ「マスメディア批判」
48	1999年5月21日 文学部第4会議室	全員による討議：テーマ「マスメディア批判」
49	1999年7月2日 文学部第6会議室	全員による討議：テーマ「マスメディア批判」
50	1999年8月20日 文学部第4会議室	調査票案検討
51	1999年9月24日 文学部第6会議室	調査票案検討
52	1999年10月28日 文学部第4会議室	調査票案検討
53	1999年11月18日 文学部第4会議室	調査票案検討
54	1999年12月13日 文学部第4会議室	調査票案検討
55	2000年1月24日 文学部第第4／第6会議室	全員による討議：テーマ「マスメディア批判」
56	2000年2月8日 伊東会館	全員による討議：テーマ「マスメディア批判」
57	2000年3月27日 文学部第第4／第6会議室	全員による討議：テーマ「マスメディア批判」
58	2000年4月14日 文学部第第4／第6会議室	全員による討議：テーマ「マスメディア批判」
59	2000年5月19日 文学部第第4／第6会議室	全員による討議：テーマ「マスメディア批判」
60	2000年6月16日 文学部第第4／第6会議室	調査票案検討
61	2000年7月14日 文学部第第4／第6会議室	調査票案検討
62	2000年9月8日 文学部第第4／第6会議室	調査票案検討
63	2000年10月23日 文学部第第4／第6会議室	調査票案検討
64	2000年11月20日 文学部第第4／第6会議室	調査票案検討

回	開催日／会場	講師／演題
65	2000年12月11日 文学部第4 / 第6 会議室	調査票案検討
66	2001年1月22日 文学部第4 会議室	題目 「日の丸・君が代」 「ガイドライン」 「サッチー騒動」 「神の国発言」 「吉野川可動堰」 「参院定数判決」 「石原知事の三国人発言」 「金大中氏に平和賞」 「有事法制」
67	2001年3月12日 文学部第6 会議室	
68	2001年4月13日 文学部第4 会議室	
69	2001年5月18日 文学部第6 会議室	
70	2001年6月11日 文学部第4 会議室	
71	2001年7月10日 文学部第6 会議室	
72	2001年9月17日 文学部第4 会議室	
73	2001年10月19日 文学部第6 会議室	
74	2001年11月30日 文学部第4 会議室	
75	2001年12月21日 文学部第6 会議室	
76	2002年1月25日 文学部第4 / 第6 会議室	
77	2002年3月22日 文学部第4 / 第6 会議室	新聞社説の比較評価
78	2002年4月15日 文学部第4 / 第6 会議室	新聞社説の比較評価
79	2002年5月31日 文学部第4 / 第6 会議室	新聞社説の比較評価
80	2002年6月14日 文学部第4 / 第6 会議室	新聞社説の比較評価
81	2002年6月20日 文学部第4 / 第6 会議室	新聞社説の比較評価
82	2002年7月12日 文学部第4 / 第6 会議室	新聞社説の比較評価
83	2002年7月19日 文学部第4 / 第6 会議室	新聞社説の比較評価
84	2002年9月20日 文学部第4 / 第6 会議室	新聞社説の比較評価

回	開催日／会場	講師／演題
85	2002年10月25日 文学部第4 / 第6 会議室	新聞社説の比較評価
86	2002年11月15日 文学部第4 / 第6 会議室	新聞社説の比較評価
87	2002年12月13日 文学部第4 / 第6 会議室	新聞社説の比較評価
88	2003年1月17日 文学部第2 研究棟会議室	新聞社説の比較評価
89	2003年3月24日 文学部第2 研究棟会議室	新聞社説の比較評価
90	2003年4月18日 文学部第2 研究棟会議室	新聞社説の比較評価
91	2003年5月26日 文学部第2 研究棟会議室	新聞社説の比較評価
92	2003年6月23日 文学部第2 研究棟会議室	新聞社説の比較評価
93	2003年7月14日 文学部第2 研究棟会議室	新聞社説の比較評価
94	2003年9月8日 文学部第2 研究棟会議室	新聞社説の比較評価
95	2003年10月14日 文学部第2 研究棟会議室	新聞社説の比較評価
96	2003年11月27日 文学部第2 研究棟会議室	新聞社説の比較評価
97	2003年12月19日 文学部第2 研究棟会議室	新聞社説の比較評価
98	2004年1月23日 文学部第2 研究棟会議室	新聞で取り上げる社会現象の捉え方のケース研究 最近話題の憲法問題の調査の準備
99	2004年3月5日 文学部第2 研究棟会議室	
100	2004年4月30日 文学部第3 研究棟会議室	
101	2004年5月24日 文学部第4 研究棟会議室	
102	2004年6月17日 文学部第5 研究棟会議室	
103	2004年7月26日 文学部第6 研究棟会議室	
104	2004年9月24日 文学部第7 研究棟会議室	

回	開催日／会場	講師／演題
105	2004年11月12日 文学部第8研究棟会議室	
106	2004年12月6日 文学部第9研究棟会議室	

7. 非行心理研究部会

■ 開催記録一覧

回	開催日／会場	講師・話題提供者／演題（話題・テーマ）
1	1985年10月12日	
2	1986年1月18日	長谷川 孝（横浜少年鑑別所）、鈴木伸治（横浜少年鑑別所） 非社会的な非行少年の事例について
3	1986年7月5日	枝久保達夫（越谷児童相談所） 児童相談所からみた“いじめ”の問題
4	1987年1月17日	田中一哉（法務省保護局） 少年の保護観察について
5	1987年10月6日	麦島文夫（帝京大学教授） 遊び方非行とその後
6	1988年1月19日	翁川通輝（東京都児童相談センター） 児童相談所の概要と非行事例について
7	1988年7月16日	高桑益行（法務省中央研修所所長） 矯正施設における心理臨床家の活動状況について
8	1988年11月19日	翁川通輝（東京都児童相談センター） 児童相談センター見学とケース研究
9	1990年12月1日	（開催記録のみ）
10	1991年12月7日	司会 高桑益行 今後の運営方針について
11	1992年3月28日 文学部第2会議室	浜井浩一（川越少年刑務所分類審議室） アメリカ合衆国における非行予測・予防研究の最近の動向について
12	1992年6月20日 文学部第3会議室	原 俊明（警視庁少年第一課巣鴨少年センター） 不登校・家庭内暴力を伴った少年非行の事例について

回	開催日／会場	講師・話題提供者／演題（話題・テーマ）
13	1992年9月26日 文学部第2会議室	辰野文理（法務総合研究所） 地域の社会経済的特性と非行少年の“量”
14	1992年11月7日 文学部第1会議室	早稲田大学心理学会第17回大会 司会 春木 豊（早稲田大学人間科学部）・河合美子（成城墨岡クリニック） シンポジウム『現代の男性を考える』 湯谷 優（埼玉県警察本部）「非行家族における男性像」 中村延江（中央心理研究所）「臨床ケースにみる女性との関係」 木村 駿（明星大学）「現代の役割は何か」
15	1992年12月5日 文学部第3会議室	百瀬 泉（早稲田大学大学院文学研究科修士課程） 埼玉県親子カウンセリング制度の紹介と実践報告
16	1993年3月27日 文学部第2会議室	大橋靖史（早稲田大学人間科学部） 非行少年の時間展望
17	1993年9月26日 文学部第4会議室	瓜生 武（家庭裁判所調査官） 力動心理学的立場からの動機鑑定事例
18	1994年1月29日 文学部第4会議室	水田門彦（宇都宮少年鑑別所） 情報社会と青少年
19	1995年5月20日 文学部大学院ゼミ室	早稲田大学心理学会第20回大会・部会別シンポジウム 話題提供：川邊 譲（'79文、水戸少年鑑別所）、藤野京子（'84文、法務省）、浜井浩一（'84教育、法務省） 「鑑別業務と処遇の仕事から見た最近の少年非行の特質」 コーディネーター：高桑益行（'51文、早稲田大）
28	1996年5月18日 早大本部7号館会議室	早稲田大学心理学会第21回大会・部会別シンポジウム 瓜生 武（家庭問題情報センター）「非行少年と会うことの意義 —治療構造論の視点から—」 コーディネーター：高桑益行（早稲田大学）
37	1997年5月31日 文学部第1会議室	早稲田大学心理学会第22回大会・臨床・非行・発達臨床心理学研究会合同シンポジウム 「女性・家族・仲間・社会 —新しいサポートのありかた—」 岡島陽子（フリッカ・ビーウーマン） 女性の回復の場 三沢直子（鉄道弘済会福祉相談所） 家庭における育児力の低下をどう補うか —今後の臨床心理士の役割— コーディネーター：河合美子（日本福祉教育専門学校）、司会：深澤道子（早稲田大学教授）

8. 発達臨床研究部会

■ 開催記録一覧

回	開催日／会場	講師・話題提供者／演題（話題・テーマ）
1	1995年 9月30日 文学部327教室	小嶋謙四郎（早稲田大学名誉教授） メタファーの臨床的機能について
2	1995年12月 2日 文学部第5会議室	小嶋謙四郎（早稲田大学名誉教授） メタファーの臨床的機能について
3	1996年 2月 3日 文学部第5会議室	小嶋謙四郎（早稲田大学名誉教授） メタファーの臨床的機能について
4	1996年 3月16日 文学部第5会議室	小嶋謙四郎（早稲田大学名誉教授） メタファーの臨床的機能について
5	1996年 5月11日 文学部第7会議室	小嶋謙四郎（早稲田大学名誉教授） メタファーの臨床的機能について
6	1996年 5月18日 早大本部7号館	早稲田大学心理学会第21回大会・部会別シンポジウム コーディネーター：中田洋二郎（精神・神経センター 精神保健研究所）・井原成男（公衆衛生院） 司会：馬岡清人（日本女子大学） 「発達臨床とは」 井口由子（こどもの城小児保健クリニック）、中田洋 二郎（精神・神経センター精神保健研究所）、奥山真 紀子（大宮小児保健センター）
7	1996年 6月29日 文学部第7会議室	小嶋謙四郎（早稲田大学名誉教授） メタファーの臨床的機能について
8	1996年 7月 6日 文学部第7会議室	小嶋謙四郎（早稲田大学名誉教授） メタファーの臨床的機能について
9	1997年 5月31日 文学部第1会議室	早稲田大学心理学会第22回大会・臨床・非行・発達臨 床心理学研究会合同シンポジウム コーディネーター：河合美子（日本福祉教育専門学 校） 司会：深澤道子（早稲田大学教授） 「女性・家族・仲間・社会 ―新しいサポートのありか た―」 岡島陽子（フリッカ・ビーウーマン） 女性の回復の場 三沢直子（鉄道弘済会福祉相談所） 家庭における育児力の低下をどう補うか ―今後の臨 床心理士の役割―

1. 開催記録一覧

回	開催日／会場	講師／演題
1	2007年10月13日 文学部第二研究棟5階第5会議室	柴田良一（江戸川大学社会学部） 今学校で何が起きているか？
2	2007年12月15日 文学部第二研究棟5階第5会議室	朝岡美好（KPMGヘルスケアジャパン株式会社） 病院を取り巻く環境と病院内部の変化
3	2008年3月8日 文学部第二研究棟5階第5会議室	谷口幸一（東海大学健康科学部） 介護問題
4	2008年5月24日 文学部第二研究棟5階第5会議室	永田亮子（日本たばこ産業(株)食品事業部商品統括部長） 商品開発の舞台裏 ～大切な人に食べてもらいたい
5	2008年10月18日 文学部33-2号館（プレハブ）2階第2会議室	井上夏彦（宇宙航空研究開発機構（JAXA）） 話題の職場紹介 宇宙飛行士の健康管理
6	2008年12月6日 文学部31号館2階205教室	所 正文（国士舘大学政治経済学部） 交通社会における高齢者の問題
7	2009年10月3日 文学部31号館102教室	中村 誠（早稲田大学心理学会理事） 高齢期の生き方
8	2009年11月28日 文学部第二研究棟6階第7会議室	藤野京子（早稲田大学文学学術院） 非行とは何か
9	2010年5月22日 文学部第二研究棟6階第7会議室	笠原かほる（ピジョンウィル株式会社代表取締役） 会社でこんなに役立つ心理学
10	2010年10月2日 文学部第二研究棟5階第5会議室	木之下みやま（東京都職員共済組合） 職場復帰への取り組み
11	2011年5月21日 文学部第二研究棟5階第5会議室	松田英子（江戸川大学社会学部） 睡眠の正常と異常～臨床心理学からの理解と支援
12	2011年10月29日 文学部第二研究棟5階第5会議室	小林 源（産業カウンセラー・LEC東京リーガルマインド大学） 仕事との出会い方、その続け方 ～就労支援カウンセリング事例と、就活川柳・一人百句から考える～
13	2012年5月19日 文学部34号館3階355教室	西條剛央（早稲田大学大学院商学研究科MBA専任講師） なぜ構造構成主義は復興支援活動に役立ったのか？
14	2012年10月27日 文学部34号館1階151教室	野澤孝司（目白大学人間学部）、高橋カレン（笑いヨガ・ティーチャー） 笑い与健康 —笑いの社会健康的・進化的意義と日常の実践

回	開催日／会場	講師／演題
15	2013年5月25日 戸山キャンパス 33号館5階531教室	大橋靖史（淑徳大学総合福祉学部） 占い師と相談者のコミュニケーション ～ “未来” はいかに生み出されるか？～
16	2014年5月14日 文学部第二研究棟5階第5会議室	押山千秋（音楽療法士・福島県立医科大学大学院） 障がい児を対象とした音楽療法 ～障がい児の適 応行動形成に有効な音楽活動～
17	2014年12月6日 戸山キャンパス34号館453教室	湯川進太郎（筑波大学人間学群・武道家） からだでこころをマネジメントする：身体心理学 の理論と実践
特別 セミナー	2015年4月25日 文学部第二研究棟5階第5会議室	小林 源（早稲田大学心理学会副会長） 「なるほど！の就活 ～面接者の心理を読む～一 面接・履歴書中心の実習とQ&A～
18	2015年5月23日 文学部第二研究棟6階第7会議室	中村玲子（帝京平成大学健康メディカル学部） スクール・ソーシャルワーカーの仕事 ～相談事 例を通して～
19	2015年11月14日 戸山キャンパス32号館128教室	向後千春（早稲田大学人間科学学術院） アドラー心理学入門 劣等感／ライフスタイル／ 勇気づけ
特別 セミナー	2016年3月30日 文学部第二研究棟5階第5会議室	小林 源（早大心理学会副会長） 納得の『就活』～新たな知見であるがままを活か せ～
20	2016年5月28日 大隈ガーデンホール（大隈ガーデ ンハウス1階）	藤本 靖（ボディワーカー／米国Rolf Institute認 定ロルフアー） センスを磨くのに努力はいらないーココロとカ ラダの悩みを解決するー
21	2016年11月26日 文学部第二研究棟6階第7会議室	富田真紀（台東区松が谷福祉会館こども療育室） 「発達障害」のいま：臨床の現場からー「心の理 論」から「社会脳」へー
22	2017年5月27日 早大戸山キャンパス 33号館 3階 第1会議室	山本利枝（千葉大学こどものこころの発達教育研 究センター） レジリエンスを高め折れない心を作るには
23	2017年10月21日 早稲田大学戸山キャンパス 39号館 5階 第5会議室	長谷川智子（大正大学心理社会学部） 変わる家族の食卓を考えるー写真法から見える 日常ー
24	2018年5月19日 早大戸山キャンパス 31号館127教室	大島郁葉（千葉大学子どものこころの発達教育研 究センター） 思春期以降の自閉スペクトラム症者の理解と支援
25	2018年10月20日 早大戸山キャンパス 36号館381教室	岩田浩康（早稲田大学理工学術院） 身体感覚から見たリハビリテーションとスポーツ 技能ーメカトロ技術からのアプローチー

2. 子どもを対象とした音楽活動～活動の持つ「意味」を考えながら

音楽療法士 押山千秋（二文・1991）

I. 音楽は私たちの身近に有り、世界中の様々な文化の中でも重要な役割を担っている。その音楽の様々な要素を使って、対象者のためにトリートメントを行うのが音楽療法である。遠山（2005）は「音楽の機能とは、音楽が人間に与える様々な影響とそれに対する反応を指す。音楽は人間に生理的、心理的、社会的な影響をもたらす。音楽療法とは、そのような音楽の影響を対象者の状況に即して活用していくものであり、個々の対象者に対する目的を遂行するために音楽の力を借りるものである。つまり音楽を媒介として（音楽を通して）目的を遂行しようとする営みなのである」と音楽療法を定義づけている。「音楽活動」と「音楽療法」の違いは、音楽活動は、活動を行っている本人が主体となっているのに対し、音楽療法は、対象者の変容のために目的をもって行うもの、という点で大きく異なっている。

また、神経科学の知見から、音楽の生理学的影響については、「音楽を聴いて震えるような感動を覚えた場合、心臓の拍動、筋肉の緊張や呼吸数が変化し、このような自律神経系の反応が強い場合、側坐核、扁桃核、前頭前野、前頭眼窩野、中脳といった報酬・情動系での大きな血流の変化が認められる。音楽の情動処理は脳の広範な範囲で同調して行われている。失音楽症という音楽に対する認知能力が失われる症例では、旋律を分析的に認識する能力を完全に失っても、悲しい旋律か、楽しい旋律かなどの、旋律の感情的要素は識別できる。またその逆の例もあることから音楽の旋律を理解するメカニズムと音楽の情動を理解するメカニズムは別であると考えられる。

音楽療法の対象者は乳幼児から高齢者までと幅広く、心身に障がいのある子ども、成人（知的障がい、肢体不自由、視覚障がい、聴覚障がい、情緒障がい、言語障がい、病弱、重度重複障がいなど）、摂食障がい、統合失調症・うつ病などの精神疾患患者、高齢者、終末医療の受療者、その他（健康維持や病気予防など）である。音楽療法が行われている場所としては、身体障がい者通所更生施設、知的障がい者通所更生施設、子育て支援センター、医療機関、特別支援学校、自主グループ、精神病院、精神科クリニック、特別養護老人ホーム、デイサービスセンター、老人保健施設、内科、心療内科、小児科、ターミナルケア、その他（刑務所など）が挙げられる。

II. 障がいを持つ子どもの音楽療法の場合の音楽療法計画のプロセスを下記のようにまとめた。

【対象児の理解】 ①障がい状況についての理解⇒障がいの種類・程度・特性について、てんかんの発作があるかどうか、薬の服用状況について、身体にまひがあるかどうか、感覚に何らかの異常があるかどうか。②発達についての理解⇒運動面の発達状況の把握、認知面の発達状況の把握、環境への適応能力の把握、子どもの理解力や理解の範囲などの把握。③言語・コミュニケーション能力の発達状況⇒受容言語の把握、表出言語の把握、呼吸・発声等に関

する運動能力の発達状況の把握。④情動面の発達状況⇒注意の集中・持続に関する能力の発達状況、感情をコントロールする能力の発達状況。⑤対人関係・社会性の発達状況⇒大人との関わり状況、子ども同士の関わり状況、グループ内での行動などの把握。⑥行動特徴についての理解⇒それぞれの特徴的な状況がいつ、どのような条件の際に生じるのかについて情報を集める。常同行動、不安傾向、多動傾向があるかなど。⑦音や音楽に対する反応についての理解⇒好きな音・音楽があるか、嫌いな音・音楽があるか、音・音楽に対する特別な反応があるか。

【音楽療法の目標設定】 対象児の実態に基づいて、その子どもが抱える問題点や課題についての検討を行い、それに対する目標を個々に設定する。集団のセッションであっても個に焦点を当てることが大切である。

①基本的な学習態度を身につけさせる。⇒各感覚の発達を促し、感覚と運動の統合を図る。注意の集中・持続力を育む。適応的行動の持続力を育む。着席行動を身につけさせる。事物・事象の理解、それらの関係性を理解できるように導く。②運動能力の発達を促進する。⇒バランス感覚を育て、身体各部位間の協応性を高める。手指の機能を高める。リズム感覚を育てる。発声・発語に関する口腔内の諸機能を高め、呼吸のコントロール力を養う。③情動に関する諸能力を育む。⇒情動の発散を体験させる。情動の安定を図り、自己の情動をコントロールする能力を養う。④社会性に関する諸能力を養う。⇒自己表現力を養う。声や楽器、身体の動きなどの音楽的表現を通して自己の内的世界を外に表す体験をさせる。他者とのコミュニケーションを体験させる。集団の一員としての行動がとれるようにさせる。自発的に活動に参加する態度を養う。

【プログラムの検討】 一人ひとりの対象児に対する目標を念頭において、セッションの展開内容や方法等を検討し、プログラムを設定する。最初に活動があるのではなく目標に対する活動の在り方を検討することが大切である。「活動に子どもを合わせる」のではなく、「子どもに活動を合わせる」ということである。プログラムはあくまでも目安に設定されるものであり、その時々を対象児の状態に応じて臨機応変に対応しなければならない。

【セッションの流れについての検討】 ①刺激・活動などの配列 ②時間の配分 ③場面設定

【セッションで使う曲についての検討】 ①対象児の発達状況や年齢を考慮する⇒子どもに受け入れやすい曲を求める。子どもの実態に即した曲を求める。②セッションの課題を考慮する⇒個々の対象児の課題を考慮して曲を選ぶ。集団全体の課題を考慮して曲を選ぶ。③活動の性質を考慮する⇒静的な活動・動的な活動、それぞれに適した曲を選ぶ。④表現の方法を考慮する⇒活動内容に適した曲を選ぶ。⑤季節や行事を考慮する。⑥即興演奏⇒子どもの状況に即して即興的に音楽を演奏する。⑦その他⇒子どものリクエストに沿って曲を選ぶ。

【セッションで使う楽器についての検討】 ①身体そのものを楽器にして表現する。②身体の動きで表現する。人間の表現の限界を補ってくれるものが楽器である。楽器は子どもたちの表現を助け、豊かな自己表現の体験を与えてくれる。

【楽器がもたらす機能・効果についての検討】 視覚、聴覚、触覚などの感覚に働きかける。注

意の集中力、持続力を高める。興味、関心を引き出す。探索行動に繋がる運動（動作）を引き出す。自己の欲求、要求を引き出す。楽器を媒介としてコミュニケーションを体験させる。認知能力を高める（弁別、選択、意思決定、記憶等）。心理的な抑圧からの解放をもたらす（情動の発散、ストレスの解消など）。

Ⅲ. 以上のようなことを検討しながら、子どもを対象とする場合、これからの人生にとって必要なことに対する教育的な意味合いも考慮しながら、設定された目的のために音楽を効果的に使うことで、子どもに対してより効果的なトリートメントを行うことが可能になると考えられる。

3. なぜ構造構成主義は復興支援活動に役立ったのか？ —ふんばろう東日本支援プロジェクトの活動を通して—

西條剛央（早稲田大学大学院商学研究科MBA 専任講師）

1. 構造構成主義とは何か

総合領域としての人間科学が、異なる領域のあいだの不毛な信念対立を解消し、建設的なコラボレーションを生み出すため「原理」(メタ理論)として考え出されたのが、構造構成主義です。これは新しいICチップみたいなもので、いろいろな学問領域に組み込んで役立てることが出来ます。2005年に「構造構成主義とは何か次世代人間科学の原理」(北大路書房)を上梓しました。「現代のエスプリ」に特集されたり、毎号テーマを決めて「構造構成主義研究」という冊子を出したりしています。震災前までは「そこそこ学問の世界に広がっていけばいいな。あまり有名になり過ぎると面倒くさい」ぐらいに思っていました。

2. ふんばろう東日本支援プロジェクトとは？

それが震災の現場に行ってみて、被害もすごいんですけども、システム上の問題で物資が届かないとか、届いても公平主義で数が合わないと配らないというのを目の当たりにし、震災をキッカケに日本の社会が抱えていた不合理が一気に表れてきたと痛感しました。そこでツイッター、ホームページ、フェイスブックを利用して活動をはじめ、3千カ所以上に物資を届けたり、アマゾンから3万個以上の物を送ったり、行政が集めたまま配られていない物資を10tトラックで40台分くらい運んだり、家電を25,000世帯以上に送ったりしました。

3. 方法とは何か

ここで紹介したいのは「方法の原理」ということです。方法というのは①特定の状況

で、②特定の目的を達成するための手段です。そのことに例外はない。例外がないということは原理的なことです。であれば絶対的な正しい方法がどこかに転がっているわけではなくて、その都度、①状況に応じ、②目的を達成するために有効な方法を見つけるか、作れば良い。

4. 正しさから有効性へのシフトチェンジ

「正しい」と言ったとき、その中には暗黙裡に絶対性が折り込まれています。「あなたは間違っている」と言われると、本当はそうだとしても、心が傷ついてしまい、認めがたい。そうではなくて「方法の有効性」の方にシフトすれば議論もスムーズに進めやすくなる。現在は変化のスピードが速い時代なので前例を踏襲しては満足に機能しない。その都度新しい方法を見つけることが有効です。個々の知識以上に方法の使い方の知識が大切になります。

5. 信念対立

関心が強いと信念対立が起きやすい。微細な差に敏感になり、ちょっとした違いが許せなくなる。組織というのは「心」を持った人間の集まりなので、話しても余計ケンカになってしまうこともあります。「話せば分かる」とは限らない。合わない人とは付き合わないというのもひとつの知恵ですが、チームで何かをするとすると、そうも言っていられません。

ボランティアというのは誰でも「自分は正しいことをやっている」と思っているので、相手と対立すると、「自分は正しい、だから「相手が間違っている」と思ってしまうがちです。

6. 関心相関性と契機相関性

「水溜まり」もふつうは邪魔なだけだが、砂漠では大切なものになります。様々な存在・意味・価値は、身体・欲望・目的・関心に応じて規定されます。存在と認識は切り離せないものです。自分が「当たり前だ」と考えていることも他の人から見たら、当たり前ではないのです。

自分の関心は体験（契機）から自然に形作られるので盲点になりやすい。さらに関心に応じて価値が表れるのでいっそう見えにくくなります。①体験（契機）→②関心→③価値といった順に作られるので、③価値判断で対立した場合、→②関心→①体験（契機）と遡る思考法がないと、信念対立から抜け出せなくなります。自分の価値判断の元になった体験や関心を忘れがちになります。

7. 感謝することの大切さ

ボランティア活動を1年間やって来て、「感謝すること」の大きさを痛感しています。

感謝の反対は何かというと「当たり前」なんですね。感謝というのは自分も相手も同時に肯定することです。生命は肯定されたがっている。一生懸命やっているのに否定されると傷つく。傷つけられた悲しみが、怒りとして表わされる。まず相手を肯定することからスタートする。

自他の関心のズレを自覚し、相互に了解可能なメタ関心（共通目的）を共有する。共通目的に照らし、どちらの関心が妥当か問い合う。こういう考え方はテーマを問わず、いろいろな分野で役に立てることが出来ると思います。

4. 身体感覚から見たリハビリテーションとスポーツ技能 —メカトロ技術からのアプローチ—

岩田浩康（早稲田大学理工学部教授）

はじめに

私はロボット工学を研究している人間で、今日はイメージとしては、「人のやっていることがよく分かるけれども、自分のことはわからない」ということがありますね。そういう事は、リハビリテーションとかスポーツの中でよく起こっていることですね。体の動かし方なんかでも、「ひじが下がっているよ」というようなことをコーチが教えてくれる。そういう時に、自分ではひじをあげているつもりでも、実際には下がっている。それで「またやり直し」というようなことが起きています。他人のやっていることはよくわかる。でも自分のやっていることはわからない。それをちょっとした技術を使って、本人にわからせてあげるようにすると、「あ、ここが悪いのか。だったら、もう少しひじを上げてみよう」と気がつく。そういうことを通して、よりよい動作、あるいはパフォーマンスにつなげていこうと思っています。

1部 BMIとリハビリテーション機器開発の現状

ブレイン・マシン・インターフェース (BMI)

まずリハビリテーション機器の開発の現状をお話したいと思います。皆さんが夢見るような機械としてブレイン・マシン・インターフェース (BMI) というのがリハビリテーション技術の理想形なのですね。例えば寝たきりになったとしても、カーテンを開けたいと思っただけでカーテンを開けたり、テレビを見たいと思っただけでテレビをつけたりできる、このように脳と機械をつなげる技術をブレイン・マシン・インターフェースといいます。やはりアメリカは進んでいて、首から下が動かない人の脳に直接、電極を埋め込んでコンピュータを操作させるようなことが報告されています。ただ問題点としては、脳と機械をつなぐのにケーブルを介しているので、感染症とかの可能性があるので、非常に危ないということがわかってきました。また、操作をしていると

きにたくさんの脂汗をかいて疲れてしまう、使うこと自体が大きなストレスになる。

リハビリテーション支援ロボット

リハビリテーション支援ロボットは、筋肉から電気を取り出して体の動きを楽にしてくれます。この筑波大学・山海嘉之教授（サイバーダイン株式会社）が開発したHALは、ひじとかひざにモーターがついていて、例えば自分の動きを1とすると、それを10ぐらいにしてくれるので動くのが非常に楽になります。こういったものはかなり実用化が期待されています。パーキンソン病の患者さんにHALをつけてリハビリテーションをするという研究が、日本ばかりではなく、ドイツやベルギーでも行われています。パーキンソン病の患者さんは歩く時に勝手に足が出てしまうのですが、ロボットの助けで歩くパターンをコントロールしてあげることにより、見かけ上、歩くことができるようになる。歩ける経験をすることは大切なことで、リハビリテーションの第一歩になります。

2部 片麻痺リハビリテーション支援

これらに対して僕らがどういうアプローチをとっているのかということをお話しします。一般例としては脳卒中の後の片麻痺ということですね。右側の脳に卒中が起きる。つまり脳の右側の血管が詰まったり、破れたりすると、身体の左側の半身に麻痺が出るのです。その場合、運動の麻痺が起きることもあるし、感覚の麻痺が起きることもあります。足を床につけても感覚がない。手で触っても感覚のない。こういうことが起きる。イメージとしては、長く正座をして立ち上がった時に足の感覚がない。しばらくすると足の感覚が戻る。あの状態が長く続くと考えていただければ良いと思います。僕らはそういう感覚が弱くなってしまった人たちに対して、感覚をうまく支援してあげたら良いのではないかと考えました。

脳卒中片麻痺

脳卒中の患者さんは日本国内で118万人いると言われています。そういった方々は歩行の仕方に問題がある。健常者の場合は、かかとが着いた後に、小指の下と親指の下にグッと力を入れて蹴り出して行くけど、片麻痺の場合は足がそっくりかえってしまう。内反と言って足が内側に向いてしまう。こうした状態で、腕を抱え込んで、足を引きずって歩く。この問題は何かというと運動も麻痺しているが感覚も麻痺している。だから足の着き方がまずくても自分で気がつかない。周りの人が「足が曲がっているよ」と言っても、「大丈夫ちゃんと着いている」と答える。また、かかとから着くべきなのにつま先から着くので、歩く時にブレーキがかかってしまう。それに本人はなかなか気がつかない。身体を動かすということは運動も大事だけど感覚も大事。運動機能が麻痺す

ると運動を補ってあげようとするのが普通で、HALなどもそういう考え方です。僕たちは、身体を動かすときには運動も大事だけど、その前に感覚を確かめて、ちゃんと身体の中で感覚を作ってから、それを運動につなげようと考えました。

知覚の支援

足の感覚がないならそこにセンサーを敷いてあげる。その情報を例えば腕とか、背中とか、感覚が足よりも良いところに伝えてあげる。足の裏が地面についたときに、その刺激が背中に伝わる。そうすると面白いことに「あ、かかとが地面に着いた」ということが背中ではわかる。足の裏の感覚が麻痺しているのなら、麻痺していない背中とか腕とかに代替して刺激を伝えてあげれば、必要な感覚が得られるのではないかという仮説を立てました。刺激の方法をいろいろ変えて、振動刺激に変えたりしました。携帯電話の振動刺激のようなものを背中の5カ所に付けて、足にもセンサーを5カ所に付けて、かかとの情報は腰のあたりに、つま先の情報は肩のあたりにというようにしました。そして正しい歩き方の情報を背中での感覚で覚えてもらう。そうすれば、より良い歩行ができるようになるのではないか。振動の強さというものも圧力の強さによって変えられるようにしました。蹴りだしの圧力が弱ければ振動も弱い。強い蹴りだしができれば振動も強くなる。

質的变化と量的変化の両立に向けて

これまでのリハビリテーションのやり方というのは、歩く速度が上がらなければ効果がなかったと言われてしまう。でもここで、量的な変化は変わらないけれども質的な変化があったのではないかという観点を取り入れてみると、また違った評価ができるのではないか？ 左右のバランスを崩しながら歩いているのがバランスよく歩けるようになって、速度が変わらなければ、今までのような量的な評価からすれば変化がなかったと言われてしまう。でも、僕らはそうじゃないだろうと考えます。最初に患者さんに歩行の姿勢の悪いところに気づかせる、そうすると初めは速度が落ちてしまう。僕らはまず患者さんの歩行の質的な改善を行う。つま先から着いてしまうのをかかとから着くようにする。そうすると患者さんはそこに気を取られるので歩くのが遅くなってしまいます。僕は「それでいいんだ」と考える。患者さんは歩行の仕方が改善されると、その後歩行の速度も上がってくるのではないかと考えました。歩行の姿が改善されると歩行の速度も上がってくる。つまり質的な改善をすると、それが量的な改善にもつながるのではないかと考えました。

知覚共感ウェア

実際に患者さんにこの装置をつけてもらって歩いてもらうと、どうしても歩くことに注意が行って、背中のセンサーに注意が行かなくなってしまうことがあります。そうす

ると、側にいるセラピストが注意をしても、患者さんは「そんな事はない」と否定します。二の足を踏んでも一瞬のことなので気がつかない。かえって悪い動作を学習してしまう。そこで、背中につけるベストを2組作って、1つを患者さんに、もう1つをセラピストにつけます。そうすると患者さんが背中で感じているのと同じ刺激をセラピストも同時に感ずることができる。「あれ？おかしいよね。今、つま先から着いたよね」という風に患者さんに注意できる。これを僕たちは知覚共感ウェアと名付けました。

高齢者におけるバランス調整

次はバランス鍛練リハビリテーションです。われわれは体のバランスを保つ時に、①視覚、②足の裏の感覚、③前庭器官、この3つの感覚に基づいて行っています。体操の内村選手などは自分の身体が今どの程度傾いているのかということが常に的確に分かっています。このバランス感覚というものは加齢とともにだんだん下がってきます。視覚機能、体勢感覚、前庭感覚といったものを、なんとか装置によって補ってあげられないかと考えました。それで作ったのが、この装置です。大変シンプルなものですが、重心の傾きを振動で伝えてあげることができる。腰に巻くベルトに4カ所、振動モーターがついています。これによって「自分が今どの方向に傾いているか？」ということが分かる。身体が傾くと当該のモーターが振動して傾いたことを教えてくれる。重心からのズレを数値化してモニターに示すことができ、それを見ながら患者さんは身体のバランスを保つトレーニングができる。

知覚支援RTが目指すリハビリフロー

患者さんに「まっすぐ立ってください」と言った時に、やはり片足が麻痺していますから姿勢を正しく制御できない。その時に筋肉の緊張とかを訓練してあげる。立った時の姿勢のバランスを正しくしてあげる。歩行する場合にも、健常な人は左右に正しく加重を移動しながら歩行するが片麻痺の人はどうしても健常な足だけに体重をかけようとする。麻痺した足に加重をかけられないので、偏った歩き方になる。だから麻痺した足にグッと体重をかけられるようになれば正しい方向に近づける。しなやかな歩容につながるっていくのではないかと。そのように考えて、先程の装置を患者さんに付けました。その結果、立っている姿勢における重心の動揺が減って、姿勢の安定性に寄与することが分かりました。

遠隔地から見守る知覚共感型在宅リハビリテーションの実現に向けて

さらにこれらの装置を使って、自宅にいる患者さんの情報を病院の医師やセラピストに伝えられるようにということを考えています。バランス感覚やその他のデータを遠隔地にいるセラピストに見守ってもらえる。そういうことができるシステム作りを考えています。患者さんから見た場合には、在宅リハビリにつながる。退院して自宅に戻る

と、だんだんリハビリテーションの効果が薄れてくる。それを防ぐには「誰かが見てくれる」というような状態を作る必要がある。そこで先程の装置をつけて、遠隔のセラピストや医師に情報を送ることができれば患者さんのリハビリテーションの意欲を維持することができる。場合によってはセラピストに共感ウェアをつけてもらって遠隔地から指導してもらえる。そういうことを期待して僕たちは今システムを研究しています。

3部 スポーツ技能とバイオフィードバック スポーツ技能習熟支援システム

スポーツの技能を鍛練するシステムを色々作っています。バスケットボールでフリースローが入りやすくなる装置とか、野球のバットスイングが高速化できる装置など。バットスイングが高速化できればボールが遠くへ飛びますし、打率が上りホームランが増える可能性がある。あるいはバレーボールで、相手のスパイクを拾いやすくなればチームの勝利に貢献できる。バレーボールのスパイクを拾いやすくする装置を作っています。実際にスポーツ技能を深めるような装置の開発を進めています。たとえば目で見て、自分の悪い姿勢、あるいは理想的な姿勢との差を見られる装置と、音で知らせる装置とがあります。場合によってはリハビリの時と同じように触覚で知らせた方が良い場合もあるかもしれません。いろいろと試していきたいと思っています。いずれにしても共通するのは、現状と目標とする姿勢や動作との違いを認識してフィードバックすることにより効率的な学習を促すことです。リハビリテーションと同じように、かかとから着くべきところをつま先から着いてしまっているのを、自分では正しく動作しているつもりでもボールが間違った方向に飛んでいってしまう。体の使い方が間違っているのを装置が教えてあげるにより技能の改善につながる。

スパイクレシーブ技能訓練システム

これはバレーボールのレシーブの技能を向上させるトレーニングです。止まっているボールを打つトレーニングではなく、飛んできたボールをどのように打つかということです。飛んでくるボールを目で見極めて、その着地点にちゃんと自分の手を持っていくかということです。目と手の協応動作です。ハンド・アイ・コーディネーション (Hand Eye Coordination) と言いますが、こういう能力を磨く必要がある。自分がボールを受ける手の位置を、セッターのことを考えて、適切に動かさなくてはいけない。飛んでくるボールが速くなれば速くなるほど、反応のレベルを高くしないとイケない。その技能を鍛練する装置を作りました。これを使って実際に訓練をした結果です。限られた例ですが、理想面とのズレ角度が統計的にも有意に改善され、レシーブの成功率があがったことがわかります。

いま日本の女子バレーボールは結構強いのですが、外国の選手と比べて日本の選手の方が背が低いので、セッターにボールを返すにしても高く上げてしまうと、どうしても

ブロックの位置の高いブラジルとかイタリアの選手に負けてしまう。そこで、この装置を使って低い軌道でセッターにボールを返す練習をすれば良いのではないかと考えています。全日本チームからオファーが来ないかと待っているのですが（笑）。

選手データを基にしたVRトレーニング

最後ですが、最終的にやりたいこととしては、例えば外国の一流選手のデータを集めて、それをこの装置の中に取り入れ、そのボールの高さとか速さとか回転とかを再現して、それに対する対応をシミュレーションできるようにすれば、先ほどの全日本チームの練習装置としても使えるのではないかと考えています。データをたくさん集めることによって、より現実的なボールの性質を再現したものになるのではないかと考えて研究しています。

5. 変わる家族の食卓を考える ―写真法から見える日常―

長谷川智子（大正大学心理社会学部教授）

私たちは、メディアを通してさまざまな人の食写真を目にします。そのときには、「今時の食卓はこんなにもひどいのか…」といった感想をもつことも少なくありません。私たち自身が営んでいる日常の食生活は、私たち個人のものである一方、時代を映し出す鏡ともいえます。本講座では、私たちの日常の食の背景にある様々な時代による変化―家族のありかた、家庭経済、食産業など―を読み解きながら、①中学生、②大学生、③幼い子どもをもつ母親の世代の3グループの食事写真から見えてくる特徴から現代の食について考えます。

	男	女	計
①中学生	10	10	20
②大学生	10	10	20
③幼児を持つ母親		67	67

1. 1960年代以降の食産業と家族の変化

1960年以降の日本の食産業の変化は大きく2つあります。1つめの変化は1970年代の食産業の急速な発展です。1970年にファミリーレストランが日本に誕生し、同年に開催された万国博覧会においてファストフード店、回転寿司店が展開されました。一方、1960年代から店舗数を増やしていたスーパーマーケットは、1970年代には着実に増え食料品供給の中心となり、コンビニエンスストアも1974年に日本1号店が誕生しています。カップ麺などのインスタント食品も1970年代から大幅に増えてきます。1970年代

は、家庭の食がおおよそは内食（家庭内で調理された食品を自宅で食べる食事の形態）であるものの、外食や中食（自宅外で調理された食品を購入して自宅などで食べる食事の形態）の選択も可能になった時期であるといえるでしょう。また、この頃本州では主要な高速道路が整備され、野菜などを含め食品の遠距離輸送も可能になりました。

2つめの変化は1990年代の低価格路線の開拓と中食産業の拡大です。バブルが崩壊した1992年には低価格の料理を提供するファミリーレストランが誕生し、従来から展開されていたファストフード店では100円でハンバーガーを販売するなど、低価格競争が始まります。また輸入牛肉の税率低減に伴い、焼き肉の食べ放題を標榜する店が増加するなど、かつては高級食であった牛肉が気軽に低価格で食べられるようになります。さらに弁当屋や惣菜店の増加、いわゆるデバ地下やスーパーマーケットでの惣菜売り場の増床などによる中食産業の拡大によって、好きな「おかず」をいつでも好きな分だけ購入できる機会が増えました。

このような食産業の変化を頭の隅に置きながら家族の食の変化についてみてみます（図1）。1世帯あたりの1カ月の食料支出額からみた家庭の食の外部化率（食料支出額のうち外食・中食による支出額の割合）は統計開始時の1975年から現在まで右肩上がりの上昇を続けており、最新のデータでは約45%です。食の外部化率の上昇は1997年頃までは主に外食によるものでしたが、1998年以降は外食が減少し中食の支出割合が急増しました。

また、2016年時点での世帯主の年齢階級別の食費の費目割合をみると、年齢が高くなるほど、調理を必要とする肉野菜などの素材系の食費割合が増加する一方で、外食の割合は減少しています。一方、調理食品の割合は年齢に関係なく一定していることから、簡便な食を支える調理食品は幅広い年代に浸透していることがわかります。

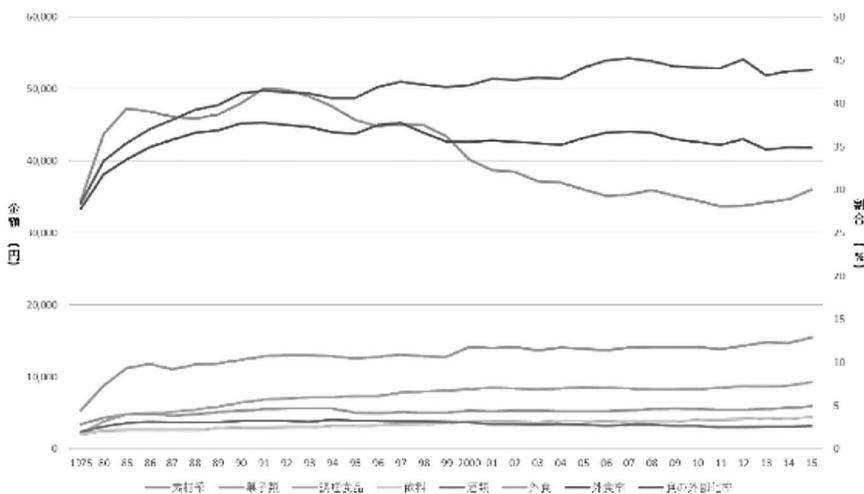


図1 食の外部化と1世帯あたり1カ月の食料支出額の推移（公益法人食の安全・安心財団『外食産業統計資料集 2017年度版』・総務省統計局『平成29年 家計調査年報』）

このような家庭の食の変化に影響を与える要因を3つ挙げます。1つめは家計です。勤労者世帯1カ月の支出の推移の詳細をみると1996年頃まで右肩上がりであった実収入・消費支出は2005年頃まで下降し、その後現在まで横ばいです。消費支出のうち、消費支出の減少と同様のカーブを描くのは食費であり、食費を切り詰めることによって家計をやりくりしていることが容易に想像でき、前述の食品の低価格化は時代のニーズとぴったりマッチしたといえるでしょう。2005年以降は世帯主収入の減少を埋め合わせるかのように妻の収入が微増しています。次に関係するのは、女性の社会進出です。日本の女性の労働力率は、M字カーブとあって古くは結婚、出産、1990年以降は出産を契機に仕事を辞め専業主婦になる世帯が多く25～34歳の労働力率の低下が他の年代と比べて著しかったのですが、2010年頃以降M字のくぼみが徐々に少なくなった、すなわち子育てをしながら共働き夫婦が増加しています。ただし、子どもをもつ世帯での女性の社会進出の多くはパートタイム労働者であり、世帯主の収入減の下支えをする役割をもっている場合が多いことも見逃せません。最後に家族構成の変化です。三世帯家族が減少し、夫婦と未婚の子から構成される核家族、夫婦のみの家族、単身者が増加しています。核家族で共働き世帯の増加により主たる食事作り手である妻が調理をする余裕がなくなったこと、高齢化した夫婦のみになり素材を購入しても十分使い切れないことなどと、低価格で容易に入手できる中食を販売する店舗が増加したことがあいまって、家族の食における中食利用が増えたものと考えられます。

2. 食写真からみた①中学生・②大学生・③幼児をもつ母親の食事の実際

私たちは、①中学生、②大学生、③幼児をもつ母親の食事の実際を写真法により分析をおこないました。写真法の手続きを簡単に紹介します。1週間のうち非連続の3日間(平日2日、休日1日)において飲食したものをすべてについて真上と斜め45度の2枚を15cmの定規を置いて携帯電話の写真機能を用いて撮影したものを、参加者からメール送信してもらいます。そのときに、食事のメニュー、料理の作り手、食事の位置づけ(朝食・昼食・夕食・朝昼兼用食・間食など)、摂取場所、共食の有無、一言コメントをメールに記載してもらいます。ここでお見せする写真法の参加者は、①中学生・②大学生はそれぞれ20名(男女10名ずつ)、③3～5歳児をもつ母親67名でした。中学生、大学生、母親のそれぞれの主な特徴は次の通りになります。

①中学生は、他の年代と比較して「不思議な取り合わせ」の食事が顕著に多く見られました。不思議な取り合わせの基準の主なものを挙げると、朝食・昼食・夕食の3食共通する基準として、「米飯・パン・麺類の2種類以上の主食のみを食べていた場合」、「食事メニューと飲料の取り合わせについて、飲料とともに摂食した3食の食事のうち、主食がパン以外の米飯、麺類と主食無しの食事における飲料が炭酸飲料、スポーツドリンク、果実飲料、市販の加糖コーヒー・紅茶を摂取した場合」などです。さらに夕食のみの基準としては「主食が2品以上あるいは主菜が3品以上あり、それらの取り合わせ

が1つの食事として系統立っていないもの」などです。メニューの一例として、「ご飯・刺身・いちごオレ」、「ご飯・マグロの刺身・カツ・ごぼうとコーンとニンジンのごま和え・牛乳・オレンジジュース」などが挙げられます。このような不思議な食事には食器が用いられず、ペーパーやラップ、調理器具のザルやボウル、購入時のパックが用いられることが多いことが示されました(図2)。すなわち、不思議な食事が多く出される家族の食卓では、惣菜などを価格等に配慮しながら組み合わせ食器に移し替えず買ったままの状態で作るだけでなく、内食の場合でもできるだけ食器洗いの手間を少なくするためにこのような状況が生じたものと考えられます。

②大学生のデータにおいて特筆すべきことは、個人の食習慣が比較的強固であることが示された点です。調査対象者の多くが本調査の1年前にも同様の調査に参加していました。2つのデータを比較すると、同一人物の1年前の食事と本調査の食事にはそれぞれに共通性がみられます。たとえば、1年前の食事調査で、米飯を食べない者、サプリを摂取する者、朝食は品数が多いが昼食・夕食はサラダと飲み物と食事量を極端に少なくする者は、本調査でも同じ食事パターンをとっています(図3)。大学生は他の年代と比較すると生活時間の自由度が高い特徴をもちますが、生活パターンが大きく変化しなければ食事のパターンは一定していることがわかります。このことは単に大学生の特徴というより、病気などによる食事改善を強いられるような状況以外においては、人間の食生活は長年の習慣を変えることが難しいことを示唆しているのかもしれない。

③幼児をもつ母親の食事の特徴としては、そのときのブームになっている食べ物が食卓にのぼること、ランチョンマットを使用している人が多かったこと、温かいお茶を飲む場合でも湯飲みは使用せずマグカップを用いることなどがみられ、この年代の人たちは食器の使用の仕方、種類やランチョンマットなどの食事を彩る食卓周りのセッティン



図2 夕食のメニューとして不思議な取り合わせの食事と食器の代用品(中学生の代表例)

1年前 1日目の全食事



調査時 3日目の全食事



図3 ある男子大学生の食事（サプリメントとグラタン）

グなども含めてメディアで提供される情報の影響を強く受けている様子が示されています。また米飯食でもコーヒーを飲む人が多くコーヒーへの嗜好性が高いこと、家族と一緒にの食事では料理を作るが1人の昼食はカップ麺やファストフードですます人も多く子どもや家族の健康の必要性から調理をしている様子もうかがえました。

以上のように家族の食のありようには世代差があることがわかります。しかしながら家族の食にはこのような世代差だけでなく、世帯年収や教育歴、家族の食の作り手の食の価値付け、および食の価値付けが親世代からどのように伝承されたのかなど、様々な要因が関与するものです。本講座では主に簡便化された家族の食を紹介しましたが、共働きで多忙であっても食事作りを大事にしている家庭はどの年代にも一定割合存在しました。今後は、食産業の発展と共に食の簡便化が進む家庭とそうではない家庭の違いは何であるのかを研究しながら、日本における家族の食のこれからを考えていきたいと思えます。



第 3 章

機関誌
会報と瓦版の記録

1. 会報発行記録一覧

号数	発行年	発行年月日	号数	発行年	発行年月日
第1号	昭和52年	1977年5月1日	第20号	昭和62年	
第2号	昭和53年		第21号	昭和63年	
第3号	昭和53年		第22号	平成1年	
第4号	昭和54年		第23号	平成2年	1990年3月15日
第5号	昭和54年		第24号	平成3年	1991年3月15日
第6号	昭和55年		第25号	平成3年	1991年10月19日
第7号	昭和55年		第26号	平成4年	1992年11月7日
第8号	昭和56年		第27号	平成6年	1994年3月15日
第9号	昭和56年		第28号	平成7年	1995年3月10日
第10号	昭和57年		第29号	平成7年	1995年12月10日
第11号	昭和57年		第30号	平成8年	
第12号	昭和58年		第31号	平成8年	
第13号	昭和58年		第32号	平成9年	
第14号	昭和59年		第33号	平成9年	
第15号	昭和59年		第34号	平成10年	
第16号	昭和60年		第35号	平成10年	
第17号	昭和60年		第36号	平成11年	
第18号	昭和61年		第37号	平成11年	
第19号	昭和61年		第38号	平成12年	

2. おしゃれと流行

(会報第23号 1990)

小野 顕 (社会福祉研究所・当会副会長 文・1948)

私が学生のころ、戸川行男先生は私を「おしゃれ」と呼んでおられた。「オイおしゃれ、いっしょに帰ろうよ」という具合で、私は嬉しかった。戦時中で、学生は制服制帽だから、おしゃれの仕様がな。にもかかわず、おしゃれと認められたことは光栄というほかなかった。

そういう時代の早稲田にも、先生の中にはおしゃれな方がおられた。まず思い浮かぶのは史学科の小杉一雄先生で、寸分の間がなかった。ちなみに、小杉先生のお父上は巨

匠小杉放庵画伯、令息はいま心理学を教えている小杉正太郎さん、美意識では血統書つきの名門である。正太郎さんのおしゃれはデフォルメ型といたい。

早稲田心理学会の御先祖様では赤松保羅先生を書き落とせない。先生のは駄じゃれが全く混じらない高品位のおしゃれだった。戸川行男先生も、画家が奥様になられたくらいだから、おしゃれでないはずがない。ああいうおしゃれっぽくないおしゃれがおしゃれ道の極意だろう。ダンスで高名な伊藤安二先生は以って知るべし。元来、おしゃれ道には戦争も平和もない。雨が降ろうが槍が降ろうがわが道を行くのでなければ、おしゃれ道とはいえない。流行を追うのがおしゃれだと思っている人がいるならば、それは私がいうおしゃれと違う。われ勝ちにみんなが真似をするのが流行で、真似をしないのがおしゃれである。金さえあれば誰にでもできるぜいたくもおしゃれの下道である。イメルダ夫人はマラカニアン宮殿を去ったあとに3,000足の靴を残したそうだが、そういう彼女がおしゃれだとはとてもいえない。

では、三千世界でおしゃれ道の達人といえるのは誰だろうか。私は、あのウィンザー公を挙げたい。英連邦のクイーン・エリザベス二世の伯父にあたり、キング・エドワード8世として王位についたが、わずか11カ月で退位した。理由は、離婚を2回もした米国人マダム・シンプソンとの恋愛結婚だった。そんな浮名を流しただけで、格別の功績もなく、78歳で死ぬまでパーティーや兎狩りで遊び暮したのが、しゃれ者ウィンザー公の生涯であった。

けれども、ウィンザー公は流行をつくった。社交界が公のおしゃれを真似たからである。スーツのズボンのすそを折り返すとか、靴にスパッツを巻くとかいう流行の源は、ウィンザー公から発した。いわば野良着でパーティーに出たようなものだから、金は要らない発想のおしゃれで、そこが達人なのである。ちなみに、スパッツとはくるぶしを被う泥除けで、今はもう見られない。

おしゃれというのは服装のことだけではない。音声、言葉の選択とやりとり、文章、書体、大小の持ち物など、さまざまなところでおしゃれができる。粋、風流、ウィット、ユーモア、ボン・サンスなどはおしゃれと同類だが、そう感じるのは気が利いているとき、気に入ったときで、気に入らなければ気障いきざらに感じる。私はウィンザー公をしゃれ者というけれども、人は気障な奴とか自分勝手とか目立ちたがり屋とかいうかも知れない。おしゃれには、そんなうらおもてがある。

ある人の新しさをみんなが真似すると流行になる。しかし、間もなく他の流行に取って代わられて、その流行は廃れてしまう。だから流行は果敢なく、空しい。廃れていくことが分かっているといまいと、多くの人びとは果てしなく流行を追いつづける。それは服装だけのことではない。政治、経済、社会、教育、宗教、芸能、スポーツ……何事にもそれぞれの流行がある。つぎはなにか、と流行を追うマラソン競走が人生ともいえる。50年前の流行語であった「バスに乗り遅れるな」は廃れたが、そういう生きざまは少しも変わっていない。永遠の真理を究明する学問の世界でさえ、である。いま、こ

んなことを書きながら、戸川先生が私を「おしゃれ」と呼ばれたのはなぜか、思い返してみた。多分、オメカシ野郎ぐらいの意味でからかっておられただけで、光栄と感じたのは自惚れだったのであろう。その証拠には、以来40年間に、流行のバスには乗り遅れ、おしゃれ道の一里塚にも及べなかったのが私なのである。

3. 「人間学」研究試論

(会報第24号 1991)

三島二郎 (早稲田大学名誉教授 文・1942)

17世紀初頭において伝統的学問たる哲学に対立して、形而下学を標榜して独立した科学は、当然ながら自らの規範と対象に対する仮定を設けることにより、その独自性を明示する必要がありました。しかしそれによって確かに普遍原理の獲得は保証されたものの、対象の選択に著しい限定を受けることを余儀なくされたことから、従来の形而上学のそれとは全く無関係な学問だという誤った印象を今日にまで定着させていると思います。

かかる事実を心理学についてみてゆくと、科学研究であるためには、いわゆる公共的客観性を持つ単一な心理事象のみに対象を限定せざるを得ないこととなります。したがって日常のより具体的な生活行動や研究者自身にとっての切実な体験といったものの殆どが、研究の対象とはなり難いことです。実はそのことが心理学が容易に科学として踏み出し得なかった最大の理由でもあったわけです。

しかしそれとは別に一旦開始された科学としての心理学研究は、先進諸科学の認識方法を一途に導入することにより、短期間に目覚ましい展開を遂げてゆきました。それはさきの危惧からの不安を解消せんとする反動もあったと思いますが、とにかく心理学は後進科学の利点を最大限に利用して発展したことは疑えない事実であります。

その実際をみてゆくと、最初の科学としての物質諸科学の、次いで生物諸科学の対象認識の方法と観察の手続きを、そっくりモデルとして導入することにより、周囲からは紛れもない自然科学であるという承諾をとりつけることに成功しました。このことを幸いとするか、不幸とみるか、あるいは仕方のないことかを確かめることによって、その心理学者の立脚点と志向をはかる重要な踏絵としても使えることは、今日においてもな



第6回大会 (心理学教室50周年) (1981)

お変りはないと思います。

さてこれら先進諸科学のとっている認識の基本は、対象を限定してみてゆく独自の捉え方に始まり、それは先ず主題とする対象を形態、構造（組成）、運動（機能）に分けて見てゆくことにあります。たとえば物質科学においては特に空間、時間、質量によってみられる形態的原理の追求に適合した認識方法に中心をおいて発展してきたと思われるし、一方生物科学においては形態に関しては物質科学のそれを踏襲しつつも、特に対象の構造、組織、組成を説明するのに都合のいい独自の認識方法を加えてゆきました。さらにこれらの先進諸科学においては構造の特性は形態の原理の規定を受けるものであり、また運動、機能の特性は構造、さらには形態の特性に還元可能なものであることを仮定しております。

したがってこの先進科学のとる認識方法に全面的に依拠して発足することになった自然科学としての心理学は、敢えて生命体の意識なり、行動とよびかえた機能を対象とするとしても、それは終始構造、さらには形態の原理に還元可能な特性のみが科学知識としての承認が得られることに限られます。そのために心理学研究においては、無条件に対象の徹底した超単一化が至上なものとなり、事象の現実性を規定している一切の個性は徹底的に統制または排除されることになってゆきました。そうしない限り自然科学の目指す普遍原理の獲得には至らないからです。心理学研究のかかる行き方を支持する研究者が現在においてもいることは事実ですが、これは方法論には無批判であって、対象の恣意的な操作のみに走っていることにより一つの観念論に陥っているという他ありません。これでは遂に心理学研究に期待されたものに応えることは永遠に不可能となることでしょう。したがって少なくとも誤解を与えないためにも、かかる研究は心理物理学、あるいは心理生物学と称すべきだと思います。

省みれば今から丁度50年前に故赤松保羅・戸川行男両先生に提出した精神テンポに関する、ささやかな卒業論文は、その副題に明記したように実験心理学研究でありました。すなわち精神テンポについての物理学的な形態論の観点に立っての研究に終始するものであり、その中心課題は、その後昭和20年代の後半まで続いた精神テンポの恒常性の検証を目指す心理物理学研究でありました。

その間においてこれらの仮説の検証、すなわち精神テンポの動揺性なり、変易性を阻止している条件の解析が問題となってきました。そのためには精神テンポを表出する生命体の構造、組織についての検討が不可欠となり、物理学的観点に加えて生物学的立場が注目されるようになり、終にはこれへの中心移動が行われるようになりました。これが精神テンポ研究の第Ⅱ期に当り、可成り長期間この立場に固執しました。それは第Ⅰ期の研究と同様この第Ⅱ期の検証も、すべて自然科学のとる実験観察法の適用可能な範囲内に限られていたことからそれだけで科学の承認が受け易いことに満足して、惰性的に細かい条件分析を繰り返していたからです。

しかし、かかる恒常性にしろ、変易性にしても、これらは固体における出生以来の生

活場面での発達の所産であるとするれば、生命体と一体化しているかかる発達場の解析を欠くことは許されません。それは広義には行動の生態学的研究であり、また生物社会的ないし心理社会的研究とでもよぶ視点であります。本研究においては端的に地域差研究とよんできましたが、ここで最も重要なことは縦断的な認識方法の確立が必要となってきたことでもあります。

これらが第Ⅲ期に入る研究であり、そこでは全国91地区での25ケ年にわたる膨大な資料の収集と多岐にわたる解析の必要に迫られ、しかもその過程を通じて単なる生態学的認識では到底蔽い切れないことを思い知らされました。すなわち生態学的地域といった単純な空間的拡がりを超えて、時代、歴史、伝統、文化、価値といった条件が人間形成という一点に輻輳してゆく人間発達場の検討が不可欠となったからです。かくて精神テンポとよぶ個人的な行動形態の生成を追求する過程において、あらゆる個性生成場についての新たな認識が得られたように確信しております。

次の第Ⅳ期は、かかる認識の妥当性をいわゆる障害児研究、高年研究に求め、その成果から人格生成の機制に関する仮説を得、これをカウンセリングの実際に活用して検証をしていくことになりました。

確かに精神テンポ研究は、全く実験心理学の課題として出発したものではありませんでしたが、継続的な研究の過程において新たな関心の出現に応じて別個の認識の方法も加えてゆくことが不可欠となってゆきました。換言すれば出発は明らかに自然科学的認識に全面的に依拠して、その枠内での主題の形態から構造へ、構造から機能研究へという観点の推移はあったとしても、つねに還元主義に立つ研究であったことは疑い得ません。しかしさらなる研究の推移においてかかる現象の主体的条件の究明の関心が生ずるところ終にはこれらを規定する形而上学の原理の存在の予感と、またそれを認識するための全く別の認識方法の必要性を考えざるを得なくなりました。

現代を科学時代とよび、これを謳歌する風潮があると思いますが、これは科学と技術を取り違えた表現に他なりません。もともと人間のもつ眞理探究の衝動によって支えられて起こり、発展してきた純粋な学問の一つが哲学であり、また科学であったわけで、そのことにおいては両者に根本的対立といったものはない筈です。したがって哲学の貧困という表現を眞に受けて、科学がその成果の哲学的検証をさけてきたところに重大な停滞の原因がなければ幸いです。しかし現実にはあらゆる科学の原基ともなってきた物質科学に見られる停滞が既に久しいことは紛れもない事実であると思います。

科学はその出発から、つねに研究者個人の存在を超えての対象の公共的客観的世界の存在を仮定し、かかる世界での現象の因果性の追究、すなわち知識の発見に終始してきました。一方哲学はかかる因果性成立の可否の検討を含めて、あらゆる存在の根源に対する研究者の自らの体験と省察にもとづく知恵の発見に努めてきたと思います。しかし双方とも対象世界に対する説明と解釈、存在性についての知識と知恵の探究に方向づけられていることにおいては変わるところはないとも言えましょう。換言すればこれらは

自然、他者、周囲についての眞理発見を目指していることにおいては大差はないので、したがって相互批判も成り立ってきたわけです。

ここにどうしても、もう一つの学問がなければならぬ根拠があると思います。それはかかる科学と哲学の両研究を超えて、これを成り立たしめている研究者、人間自身の問題を研究する分野、換言すればこの2つの学問を生み、また発展させてきたところの眞理探究の衝動の主体者の研究と、その立場からの科学と哲学の原理についての検証に任ずる学問の存在が不可欠となります。すなわちここでは何よりもまずすべての知識と知恵を創造してきた人間自身、自己の飽くなき追究を主題とすることにおいて、自己学、あるいは人間学と称すべき学問の存在であり、これによって初めて科学と哲学はその関係と役割を正しく自覚し得ることになると思います。

かかる第三の学問、正確には究極の学問の存在については、既にPascal, B.やKant, Iは十分に気付いていたと思いますが、これを人間学とよんで明確な構想を提起したのは、今世紀初頭では、Max Schelerが有名であります。しかしこれは現象学を通じての新たな形而上学としての主張であったと思われます。かかる動向の先駆的なものは既に前世紀後半に始まっており、たとえば新Kant学派でDilthey, W.による精神科学、さらにRickert, H.による文化科学の提起がそれで、これらはいずれも自然科学との対比においての人間科学の主張の域を出ていません。

ここで構想している人間学とは、まず第一に科学研究を拘束してきた規範の修正と、より巨視的な認識方法の開発を目指して、そのためにも科学の知識に対する哲学からの検証を容易ならしめるとともに、哲学の智慧を可能な限り実証してゆくこと、これらを方向づけることを使命とするものであります。その意味において科学はつねに人間学研究の出発に位置づけられるものであり、しかも哲学とともに人間学を目指すものである限り、両者に対立はあり得ません。したがって従来からの科学対哲学、あるいは科学主義対ヒューマニズムといった不毛な論争は本来的にあり得ないことであります。

第二にかかる人間学における眞理発見の方法論についてであります。まず科学の知識と哲学の知恵に対して、それは実存論でいう主体的理解とか、実存論的解釈という一方向的なものであってはなりません。人間学は対象世界のみならず、究極的には眞理探究の衝動の主体者自身の研究をも合わせるということにおいて、そこでは全く主客合一の認識の立場、すなわち発達的存在としての研究者自身の誠実にして長期にわたる研究歴の中に培われてきた学問的良心にかけての眞理の決定ということになるでしょう。したがって研究者の発達に応じて事の眞偽の決定が、時に逆転することがあったとしても不思議でないし、また研究者がその生涯を賭けて眞理の決定に努めたとしても、終局的にはこれを将来の決定に委ねざるを得ない事態はいくらでも起こることでしょう。

本来的に如何なる学問においても、その研究はある人間、個人ではなくて、特定の自己に発した切実な眞理追究の意欲にもとづくものであります。それが特に人間学研究という場合は、科学や哲学における対象世界に限定された眞理発見でなく、研究者自身

と対象世界を一体化した全体の中において、その認識の主体である自己の追究を終局の主題とするものであります。したがってそこで得られた真理の検証は、究極的には研究者自身と、それを共感的に受容し、追体験に努めるものに限られることは至極当然なことでしょう。かくしてこの人間学の展開によって、今日なお伝統的な心理学研究の埒外に放置されてきた人間性にかかわる諸課題、さらには学問の対象外とされている宗教、芸術、文化といった価値にかかわるすべての課題が、実は人間学の切実な対象であることの認識が生れることにより、必ずやここに新たな地平をひらくものと確信しております。

4. 戸川行男先生・新美良純先生 追悼特別号

(会報第26号 1992)

昨年12月25日に新美良純先生が、本年1月3日に戸川行男先生が逝去されました。早稲田大学心理学会はもちろんのこと、日本の心理学会を先導してこられた両先生の計報に接して、失ったものの大きさを思わずにられません。本号では、両先生につながりの深い6人の先生方に、両先生の思い出をお寄せ頂きました。

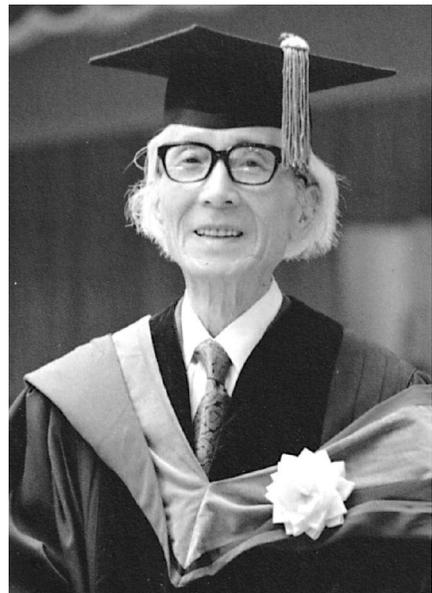
ここにあらためて両先生の威光を偲ぶと同時にご冥福をお祈りいたします。

1. 戸川行男先生の思い出

本明 寛 (早稲田大学名誉教授 文・1941)

明治36年2月1日東京の生まれで、先生は純粋な江戸っ子でした。昭和4年早大西洋哲学科を卒業され、赤松保羅先生の招きに応じられて、心理学教室創設に参加されました。当時(昭和6年～14年)、熊本第五高等学校から内田勇三郎先生が着任され、教室創設に当たられていました。赤松、内田、戸川の三先生により、心理学界後発の早大心理学教室の特徴を臨床心理学におくことに決定されました。第二次大戦前に臨床心理学を教室の目標としてかかげた大学はなかったように思います。

今の若い教室出身者には想像もできないことでしょうが、当時学生は1学年3～4名しかおりませんでした。学生は内田先生の私的助手になったり、被験者になったり、将棋の相手をしたりで朝から夜までとても忙しい毎日でした。戸川先生は坊主刈頭



戸川行男先生
早大創立100周年記念式典にて (1982)

で、牛若丸のような敏捷さで研究をされていました。「早稲田大学心理学教室五十年史」をお読みになればこの辺のことがよく分ります。戸川先生の晩年を考えると想像も出来ない実践家でした。メスカリンの実験も自分が被験者になって、貴重な記録を残しておられます。当時早大の「ウソ発見器」とさわがれた装置（GSR）も先生の研究のひとつでNHKから放送されました。もっともこの時はウソは発見出来なくて、先生もお困りのようでした。内田先生との共同研究者としてクレペリン検査も大々的にデータを集められて、いわゆる15分作業、5分休憩、10分作業の原型を苦心して作られました。現在は内田クレペリン検査として広く知られています。クレッチメルの「体格と性格」の理論から、戸川先生は写真を重ねて焼きつけ、性格と体型の関係を熱心に追研究しておられました。まだあります。先生は千葉県八幡にあった精神薄弱児施設（八幡学園）に毎日のように通われ、精薄児のパーソナリティ研究をしておられ、その過程で山下清君を発見しました。私もその頃学生でしたので、先生に引率されて山下清君の貼り絵による天才的画法を見学しびっくりしました。戸川先生は自分のお金を使って、いろいろの大作を彼にかかせていましたし、「特異児童」や山下君の画集の出版に力を入れていました。たしか、「特異児童」はその後ベストセラーになり、銀座で山下君の展覧会を先生が開かれた時には、絵を見に来た人の列が服部時計店から日劇近く迄並び、交通整理は騎馬巡査が出たとか？新聞に載っていたと記憶しています。

当時の戸川先生は学生から兄貴分ぐらいの扱いを受けていましたし、よく長い学生用の腰掛けをまたいで、学生と将棋を打っておられました。当時の文学部の授業はほとんど原書を使っていました。哲学のある先生はドイツ語の原書を使っていましたが、当時15円（月謝は10円）もして学生を泣かせたものです。戸川先生はドイツ語がお得意で、よく外国の雑誌を紹介されました。

これを要するに、戸川先生の業績はお若い時からとても凡人の到達できるものではなかったということを申したいのです。先生について、私はいくつかの追悼文を書きましたが、今回は教室の若い学生さんたちに戸川先生についての知られない一面を紹介しました。先生の晩年の臨床理論に関する業績をたたえると共に、先生のご冥福を心からお祈りします。

2. 私から見た戸川行男先生 小野 顕（社会福祉研究所・当会副会長 文・1948）

白髪オールバックの面影がまず目に浮かんでくる。お見舞いに上がったある日、「あんな、真似したの」と私の白髪を指差して、笑われた。あのヘア・スタイルは終戦以来のもので、それ以前は坊主刈りだった。心理学教室五十年史の口絵写真に、昭和13年撮影の『呼吸とプレチスモグラム測定実験』というのがあって、被験者として坊主刈りの戸川先生が写っている。髪の色はかなり黒く、時に35歳のお姿である。

私の経験を言えば、在学中だった昭和19年ごろに、軍事教練の若い教官に非国民だと

どやされて、坊主刈りを厳命されたことがあった。あのころは、そんなふうにならなくても坊主刈りにさせられていた人が多くて、その人びとは敗戦を知ると、待ってましたとばかり長髪に戻った。それとは逆に、軍事主義のあかし(?)として進んで坊主刈りを実行していたが、敗戦とともに時代の波に即応して髪を伸ばした人びともまた少なくなかった。しかし、戸川先生の場合はそのいずれでもなかったと思う。

先生は若白髪だったのではなかろうか。初めは、それをごまかすために坊主刈りになさったのではなかろうか。そして、もはやごまかす必要がない年齢に達したときに、あの長髪にモデル・チェンジされたのではなかろうか。とは言っても、ご本人に確かめたわけではなく、私の憶測に過ぎないのだが。

私が弟子入りしてこの方の50年間に、先生の風貌にその点のほかこれと言った変化はなかったように思う。時が移っても影響を受けないほど個性が強かったからであろう。風貌だけでない。独特の楷書体で、四角な字画を丸く崩したりなど決してしない戸川流の書法。思いつくままに飄々と語っているようでありながら、論旨は完璧に出来上がっている戸川流の話術。そのほか、日常の起居動作から着衣や持ち物の選択にいたるまで、なにごとにも50年間変わらない戸川流があった。

私が在学した戦中・戦後には、心理学教室に出入りする学生達は魔法の城に迷い込んだように戸川ファンになっていた。心理学専攻(いまは専修と言うらしいが、当時は専攻)の学生ばかりではない。他専攻、他学部、他大学の戸川ファンもいて、わが物顔に出入りしていた。戸川ファンになると、人それぞれになんらかの戸川流が伝染した。私もその1人で、今だに魔法が解けずにいる。

そのように言うと、先生を直接ご存じない方は、カリスマ的な人物を想像されるかも知れないが、それはまるで正反対である。戦中は東条英機、戦後はダグラス・マッカーサーといういささか神がかった人物をマスコミがもてはやした時代であったが、そんな人物こそ先生は大嫌いだった。戸川ファンにとっては、先生のそういうところが魅力なのであった。

なにごとにも戸川流を変えない坊主頭の人物という描写が頑固一徹の印象を与えたとしたら、それはあながち的外れでないかも知れない。そういう一面もあったようだからである。しかし、怖い先生では決してない。芯から優しい先生だった。

大学周辺の食堂で外食できるのは1人1杯の雑炊だけだった戦争末期に、1時間も2時間もかかる行列をしながら、一対一で心理学を講義して下さった先生。

新宿の露店では1杯10円のイモ汁粉が奪い合いの売れ行きだった昭和20年ごろ、闇買いたしたサツマイモの汁粉を二升釜一杯作り食べ放題というご招待を申し上げたら、港区白金にあった拙宅までいそいそとお越し下さり、私と2人で遂に残さず平らげてしまった先生。

焼酎瓶を下げて先生のお宅に押し掛け、おだをあげた末に酔いつぶれた私を介抱した上、泊めて下さったのは25年だったか。

29年、誰の結婚式でも仲人は絶対にやらないと言われたけれども、握り寿司食べ放題に釣られてとうとう私の仲人を引き受けてしまった先生。

お棺の中で瞑目された先生のお顔はあのころと同じ優しさで、なにか私の思いも及ばぬことを考えておられるご様子であった。

3. 戸川先生のいわゆる金釘流について

岩下豊彦（早稲田大学文学部教授 一文・1956）

1981年10月25日発行の『文学部報』第11号に、戸川先生の「学校で教わったこと」という一文が載っている。昔、『文芸春秋』誌の「文芸春秋」欄に何度となくきらめいた戸川エッセイの健在を示しており、秀作のひとつといえよう。『文学部報』としてはいつになく多くの学生に手渡ったと聞く。

その中に、こんなくだりがある。「私は會津八一先生に早稲田中学1、2年の頃から教わり、市島春城先生のお宅であったとかの、例の草ぼうぼうの広いお宅に何回かなんとかお邪魔に上がったのであるが、早中で先生に教わって今おぼえていることは、わしは8人兄弟の総領に生まれたので、おやじが八一という名をつけたのだということ、夜店で盆栽をタダで買う法、かもを手づかみでとる法である。もうひとつは、お前は字がへただから、活字と同じ字を書け、へたな崩し字ぐらいいやなものはない、というお話で、これはけんけんふくようして78歳の今日に及んでいる。」

発行後しばらくして例の草ぼうぼうの戸川先生宅にお邪魔した折、「8人兄弟の総領に生まれたので、おやじが…」のくだりを話題としたが、いつものごとく幾重にも煙に巻いてお話になるそのあちこちに會津先生への共感がにじみ出ており、びっくりした。戸川先生は滅多に他人への共感を表わされなかったからである。私は、そのとき、戸川先生はきっと夜店で盆栽をタダで買ったり、かもを手づかみでとったりなさったにちがいないと確信するに至った。字のことも、私が学生だった頃から何度となくうかがっていたお話、つまり、「字を習いに會津先生のところへ伺ったが、人にわかるような字を書くしかないと言われ、以来そういう字を書いてきた」を思い出し、「會津先生のお話をけんけんふくようなさったのはごく自然」と妙にひどく得心したものである。

それから10年を経た去年の夏、思えば、慶応病院へ入院なさる前のお元気の戸川先生にお目にかかることができた最後の日、何かのきっかけで新宿中村屋にある會津先生の書の話になったとき、先生は突然、私が座らせて頂いている後ろの紙類の山を指し、「そこに會津先生のお手本があるんですよ、そんなの見たってしょうがないですけど」と言われた。「是非見なさい」という先生の独自表現であること周知のとおり。早速、山を崩していくと、下の方から、一面手習いで埋まっている古びた和紙数枚と一緒に、會津先生の書集が出てきた。まずは事の次第として、手習いが誰のものかを尋ね（もちろん戸川先生のもの）、その後、先生が「お手本」と呼んだ綴の表紙を開けた。あの

どかな墨痕であり、何と書いてあるか読めたり読めなかつたりではあるが、一応格好をつけて1ページずつ繰り返していくこととする。人が皆上手と評する筆蹟の、全うに読めもしない書を辿るのは、格好づけとはいえ、いささかつらい。次第に、繰る手が速くなっていく。

ところが、もうそろそろ書集も終りに近くなつた頃、私は、自分の目を疑ってしまった。何と、そこには、戸川先生の字体とそっくりなのが何ページにもわたって続いているのではないか。唯一つの違い-震えを除けば、戸川先生のお書きになったものがまぎれこんでいると思わせるほど、まさに似ているのである。しかも、私のそばには、それを手習われた戸川先生の書字一杯の和紙があり、なぜ似ているかの答つきときている。戸川先生のお話を「會津先生はご自分の書体のうち一番わかりやすいものを選んでそれを戸川先生に手本とするようにとおっしゃり、戸川先生は、それを一生懸命に手習われた」という文脈で理解しなければならないなど、40年間一度として思っても見なかった。その不明に慄然としたこと言うまでもない。ご自身がおっしゃる金釘流の書字が実のところ會津先生をお手本とした手習いの成果であると明らかにされたときの戸川先生の眼は、われわれ何度となく経験したあのいたずらっぽさで溢れていた。

戸川先生がお手本とした會津先生いわく「活字と同じ字」と戸川先生の字とは、今冷静に比べても、震えを除く限りやはり似ている。しかし、どの程度似ているか、つまりどの程度手習いの成果があったかは、私ごとき素人の判断すべきことではない。私がここで述べたかったのは、長年にわたって戸川先生のお話を戸川先生が會津先生に書を習おうとされたところ、會津先生から見込みがない、せめてわかりやすく活字のような字を書くようにと言われたので、独自の金釘流で書くこととした」という文脈で受けとっていた不明である。戸川先生ご自身から手習いをされた和紙とお手本とを見せて頂き初めてお話のほんとうの文脈を知ったというのであるから、その不明は阿呆に相当しよう。會津先生に何とおりの書体があり、そのうちのひとつに戸川先生のいわゆる金釘流が似ているという事実は、會津先生の書について知っていれば当然気づく筈である。これをつきつめれば、私に、戸川先生のお話のほんとうの意味を受けとるだけの教養がなかった、という結論になっていく。戸川先生は大変なテレ屋であられ、ご自分のことをおっしゃるときの話が一筋縄で受けとめがたかった点周知のところであるが、それだけに留まらず、先生のお話には、會津先生が人を喰ったような話を次々とおっしゃり、それを戸川先生がしれっとしてお書きになるといったごとき、遊び心がつきまとうていたように思う。お話を理解し得るに足る備えのない私は、戸川先生のおっしゃりたい文脈を何度とり違えてきたことか。戸川先生のいわゆる金釘流が何であったかは、ご自身で明かしてくださったが、私には、戸川先生が教えてくださった真意を把握し得ていないことが山ほどあるように思えてならない。戸川心理学を哲学的心理学の一つであると紹介している人がいると聞くが、そのように安直に整理できる人、うらやましい限りである。

4. 新美良純先生のこと

橋本仁司（早稲田大学教育学部教授 一文・1952）

昨年の暮に、新美良純先生が亡くなられ、明けて今年のはじめには戸川行男先生が逝かれて、両先生には因縁浅くなかった私は、まるで一つの時代が終わったような感慨を覚えております。何しろ、私は学部学生の時も、大学院生の時も、指導教授は、一貫して戸川先生でしたし、その実際の研究指導は新美先生のお世話を蒙ったという事情があります。語るべきことも多々ありますが、紙幅の都合もあり、思い出すまま、2、3を挙げて、先生のご遺徳を忍ばせて戴きます。

今の都電（昔の王子電車）の終点を越えると、神田川に掛かった小さい橋、豊橋があります。先生は、豊橋を渡って、右に折れた袋小路、その昔には熊本細川藩の下屋敷があった敷地に建てられたコンクリート造りにお住いでした。周囲には荒れた広い庭があったように覚えております。そこは今、新江戸川公園として整理されているようであります。まるで昔の面影はなくなっていました。先生は東京育ちながら、熊本弁を使うと云って、ご自分の発音を気にして居られましたが、これはご両親の影響でありましょう。お父上は白髭のお年を召された方で、先祖以来のお役目で、細川家の屋敷の管理などをなさっていたように聞きました。お母上はことば遣いの丁寧な方であったと覚えております。共著論文を書く時などに、お邪魔して、ご迷惑をかけたことを思い出します。

昭和30年前後という今から40年ほど前のことですが、今の法学部8号館が文学部で、その狭い地下室に、GSRの実験室があった時代がありました。脳波も筋電図も取れるようにと機械を配置してありましたから、人は機械の間の隙間に立ったり、座ったりしておりました。新美先生を大将に、望月一靖氏（戸川先生の葬儀斎場をつとめてくれたお寺、善性寺の住職）、中山剛氏（長く日立中央研究所の主任研究員をつとめ、今は富山大学工学部教授）と、それに私などが、たむろして、研究らしい、おままごと（？）をやっていた時代であります。

狭い研究室に被験者とオシログラフその他の測定用具一式をおいての実験では、実験をする際は、実験者と実験助手の1人を残して、他の者は室外に出て、適当に時間を潰さなければなりません。その上、何か故障でも起こることに備えて、遠くに遠征する訳にもいきませんでした。そんなところで、私共が論文の幾つかを書けたのは、仲間が、新美先生を含めて、あまり年が違わなかったので、お互いの意志疎通が遠慮なくできたお蔭であったように思われます。

戸川先生は名人芸といってもよいほどに、座談の巧みな、それこそ天下一品の話し方



新美良純先生

早稲田大学心理学教室50年誌
(1981)

をなさる方で、他方、新美先生は、遠慮がちに、ぼそぼそと、ものを云うタイプの先生でした。話し方ではまるで、月とすっぽんほどの隔たりがありましたが、お二人の間に共通していた立派な美德がありました。それは他人の悪口は、一切おっしゃらないという点でした。口が軽く、つい批判めいたことを調子に乗って口にする、しかも当の相手の面前でもやりかねない悪い癖のある私は、繰り返し教えられることがあったように思っています。

その新美先生が、珍しく批評がましいことばを吐かれた時がありました。先生が早稲田から東京都の研究所に移られた前後、たまたま、国際心理学会が東京プリンス・ホテルであった時でした。ホテルの喫茶室の奥まった座席で、退職に至った経緯などを話された折に、珍しくきついことばで、人物月旦をなさっていたことを思い出します。いろいろと込み入った諸般の事情を、詳しく説明して下さって、さて、ご自分の研究の継続維持のためには早稲田には居られないと語調鋭く、云われたことが今でも、耳朶に残っております。その頃、私も社会心理・産業心理の領域に研究主題を移し、加えて身分も当時の生産研究所（現システム研究所）から、教育学部に移って間もないことで、新美先生の苦労はよく分かりました。私が自分の専門を生理心理から、対極の研究領域に乗換えたのは、研究に何ら機械設備を必要としない、従って勝負は、専ら研究者の構想の良否に依存する研究へと、思い切って方向転換を考えたことによるものでした。いわば、同じ困難に対して、新美先生と私とがそれぞれに最善と思われる対処手段を講じたのでありますが、先生と私では、それぞれの立場の故に、180度違った、正反対の方向であった、ということでもあります。

私の現在専門としている研究領域での、私の最近の研究業績は、新美先生には馬耳東風であつたらしいことは、以前から知っております。いかにも新美先生らしいなど、あえて、ご理解を求めることもしませんでした。新美先生は色盲で、強く希望した医学への進学を断念せざるを得ませんでした。そこで、なるべくご自分の夢見たものに近いと選んだ領域、その道を一筋に、それこそ一所懸命に進まれて、わき見一つされず、専門研究者として一生を終えられました。私にはとても真似できない、と改めて深い尊敬を払う者であります。

ご冥福をお祈りして、筆をおきます。合掌。

5. 新美良純先生を偲んで

山崎勝男（早稲田大学人間科学部教授 一文・1965）

新美良純先生はかねてより入院加療中であつた東邦大学医学部附属大森病院で、平成3年12月25日、肺癌のために死去されました。享年68才でした。平成3年5月頃より体調を崩され、入院加療中でした。病名はご存知でして、お見舞いに伺う度に、治療状況を客観的に説明しておられました。

私が早稲田大学第一文学部哲学科心理学専修に入学したのは、昭和36年でしたが、当時の新美先生は医学博士の学位を取得されて間もない頃で、年齢的には30代の半ばといった気鋭の少壮学者でした。当時は学部の1年生でも研究室（実験室）へ入ることが出来ました。何かのご縁で私は新美先生が主宰しておられた生理心理学実験室へ入れて頂きました。学部の先輩方が盛んに我々新入生を勧誘して下さったからです。当時は現在法学部が使用している8号館（南門に面した旧図書館の裏）が文学部の校舎でした。実験室は半地下1階の奥まったとても狭い部屋で、実験機器と手作りの簡易防音室が室内空間の八割方を占有しておりました。私が学部の1年生の時に、この部屋で新美先生にお目にかかったことはあまり無かったように思います。専ら学部の先輩方が私ども新入生の指導に当たっておられました。ですから私はこの時代の新美先生についてはほとんど語る資格がありません。学部2年に進級した時に現在の文学部校舎が竣工し、本部キャンパスから戸山キャンパスへと引越しが行われました。実験室も当時としてはかなり広く、防音室付きの立派なものとなりました。新美先生好みの天井まで引出しがたくさん付いた戸棚が印象的でした。ただこちらに移ってからは、従来の実験室制度のようなものは、一応解散となり、研究プロジェクト制に変更されました。その結果、多くのプロジェクトが誕生しました。私たち2年生のグループは直接新美先生に交渉して、毎週1回ホヴランド（Hovland）のGSRを指標とした条件づけの論文輪読を指導して頂きました。スタート当初は6～7名のグループだったのですが、回数を重ねるにつれて、参加者が少なくなりました。それでも新美先生は必ずこのプロジェクトに定刻に出てこられ、1～2名の出席者に対してもいつものように懇切丁寧に指導して下さいました。私が学部の3年生であった1962年から1963年にかけて、新美先生は早稲田大学の国内研究員として、東京大学医学部附属脳研究施設の故時実利彦先生のもとで、睡眠の神経生理学の研究をされておりました。ですから、この年度はほとんど新美先生にはお目にかかれませんでした。私が学部の4年生になった時は、新美先生が研究室に戻ってこられ、1年間の国内研究で身につけられた研究手法を私どもに手をとって教授されると同時に、睡眠の生理心理学的研究を陣頭指揮で展開されました。被験体はネコを用いましたので、各種電極を頭部や頸部に埋め込まねばならず、手術などしたことのない私どもは新美先生の手技に目を丸くして見入ったものでした。このことが契機となり、私の大学院時代は動物の睡眠研究とヒトの睡眠研究が同時平行的に展開するようになりました。また従来の通電法の皮膚電気反射から電位法の皮膚電気活動へと生理指標の方向転換したのも丁度この頃でした。この時代には研究室も人的に充実し、堀忠雄氏（現広島大学総合科学部）、丹治哲雄氏（現文教大学人間科学部）、宮下彰夫氏（現東京都神経科学総合研究所）らが研究の推進役を担っておりました。

学者としては当然かもしれませんが、新美先生は文献の収集と整理が趣味の域に達しておられました。皮膚電気活動に関する内外の文献はほとんど網羅的に収集しておられ、当時事務用品として出回り出した4段のファイリングキャビネットは見事に整理さ

れておりました。同時に文献力ードの整理も見事なものでした。私たちがこと皮膚電気活動に関する文献検索に苦勞した覚えは全くありませんでした。

新美先生は新たな研究場所を求められて、1973年に早稲田大学から東京都神経科学総合研究所に転出されました。そして創設間もないこの研究所の専門参事として、早稲田大学時代からの睡眠の生理心理学的研究を継続されました。その後、1979年から1988年までは東邦大学薬学部教授として、さらに1988年からは東京家政学院大学人文学部教授として、学生への教育に情熱を燃やしておられました。両大学では教育の傍ら、皮膚温の生理心理学的研究を始めておられました。

新美先生は1987年国際パヴロフ学会において、ガントメダル授与の栄に浴されました。条件反射研究の関連で顕著な業績をあげたことが授与の理由と伺っております。私ども一同この慶事に大喜びをしたことが、つい昨日のように思われます。

私どもは新美先生が早稲田大学をお辞めになられた後も、学会や研究会等で、頻繁に先生の馨咳に接することが出来ました。まだまだ沢山教えて頂くことを期待していた矢先の計報でした。非常に残念でなりません。ここに謹んで先生のご冥福をお祈り致します。

6. 神経研での新美先生

宮下彰夫（東京都神経科学総合研究所 一文・1969）

今年の桜は雨にたたられっぱなしで、ここ神経研の居室から見える桜はもう葉桜である。新美先生が体の不調を訴え始めたのは去年の5月であるから、あれからまだ一年経っていないのかと、今しみじみ思う。

肺癌に侵されていることが判明した6月。8月まで持つかとか、10月まで持つかとか医者に言われながらの闘病生活。肺炎を併発し、呼吸不全に陥り、あっけないくらいに迎えた臨終の11月15日。そして通夜、告別式、納骨。その一部始終に立ち会ってきながら、それがわずか6ヶ月余りの出来事であったことが信じられない気がする。

新美先生が、ここ神経研に在籍したのは、1973年から1979年までの6年間であった。そう長い期間ではなかったが、新美先生にとっては、人生の大きな転機であったろう。早稲田で築き上げてきた研究環境の多くを思いきってご破算にし、創設間もない研究所に赴任するには、並々ならぬ決心が必要だったに違いない。その決心をもたらした要因のひとつとして、東大脳研に対するアイデンティティ、つまり時実門下の一人として行動したかったことがあるのだろう。

日本の脳・神経生理学を飛躍させ、研究者として、指導者として、また啓蒙家として、多大な足跡を残した故時実利彦博士は、神経研の生みの親でもある。そして神経研の中核をなす研究員の多くは、時実門下であった。尊敬する時実先生からの心理学研究室創設の要請は、新美先生にとっては大きな喜びであり、また時実門下のそうそうたる面々と一緒に研究できることへの期待は想像に難くない。私が大学院博士課程の時、新

美先生は神経研に赴任した。当時神経研に伺うと、先生は新しい研究設備や測走機器を、喜々として我々に見せ、得意気にその性能を語っていたのを思い出す。大学ではでき得なかった実験設備を、思い通りに造り上げられる喜びが感じられた。先生は人間の睡眠実験室システムを造り上げられた。これは当時としては他に類を見ないりっぱな睡眠実験室であり、その後改良を重ねながら、今でも日本有数の睡眠実験室として継承されている。

95年に私が神経研に赴任し、先生と共同研究体制をくんだ。そこでの2人の分業のさまは、他人からみると奇妙なものであったかも知れない、まだ若かった私が（今でも若いつもりだが）、実験の実施やデータ整理の陣頭指揮に立つのは当然として、やっかいな事務処理や実験器具の製作は先生がという具合であった。

先生は官吏になっていたら、たぶん有能な官吏になっていただろうと思う。事務的な書類の作成や研究費の申請などは、大変精緻かつ正確であり、すべておまかせしたほうが物事が円滑に進んだものだった。読み易い書類を作るために、今ではワープロにとって替わられ見ることもできない、手動の和文タイプライターに、夜遅くまで向かっていた姿が目につかぶ。ただ、時々ニヤッと笑われながら、私は秘書ですから。」といわれるのには閉口したものだ。

実験器具の手作りは、先生の独壇場であった。どこからともなく、用済みになった部品を持ってきて、あれこれ組み合わせて目的の器具を作ってしまうのだ。こういう作業をしているときには、手伝うのは禁物である。趣味と実益をかねた作業といたいだが、それは先生の趣味そのものであり、手伝うことはその楽しみの一部を奪ってしまうことになるからだ。先生が神経研を去ってからもう12年になるが、ひょんな時に先生のかつての製作品を発見することがある。そんなとき、研究を軌道に乗せるべく、夜遅くまで頑張っていた日々をなつかしく思い出す。

5. 職場紹介—マスコミ特集— “アナウンサーという職業について”

(会報第27号 1994)

八木亜希子 (フジテレビジョン アナウンス室 一文・1988)

「心理学科から、どうしてアナウンサーをめざそうと思ったのですか？」と、雑誌のインタビューなどで聞かれることが、よくあります。そう言われてみると、心理学科を卒業している人は、フジテレビのアナウンス室には、他にいないようです。

自分自身、就職を考えるまでは、アナウンサーになるなどは、思ってもみませんでした。

在学中は、恥ずかしながら小さなサークルで芝居をしたりしていたのですが、そんな劇団仲間の中でも、アナウンサーというのは、どちらかというと、優等生的なイメージ

があって、世間で言う程、憧れる人もいなかったし、身近な職業ではなかった気がします。

ところが、就職活動をしてゆくうちに、「なりたい」という気持ちが強くなっていった、いつのまにか、今に至るわけなのですが、改めて、この仕事をみつめ直してみると、とても心理学的な洞察力の必要な仕事だなと思うのです。

入社したての研修の頃に、上司から「アナウンサーという仕事は、話すより、まず聞く、そして見る仕事です。」と言われたのですが、実際、取材に行く、インタビューをとる、トーク番組のアシスト、バラエティの進行、スポーツの実況、そしてニュースと、どれをとっても、まず聞く、あるいは相手を観察するというところからはじまっているのです。

大学時代を不勉強なまま過ごしてきてしまったので、心理学について語れるものは、何ももっていないのですが、もともと自分がもっていた、人への心理学的な興味が、今の仕事につながっているのだなあ、これも、自然な流れだったのだなあと感じています。

そんな流れから、アナウンサーになって、早や丸6年が過ぎようとしているのですが、それこそ、自分の仕事場の人々を"観察"してみると（これは先日上司とも対談で話していて、みんなで一致したのですが）アナウンサーというのは、非常に中性的だなと思います。女性はより男性的に、男性はより女性的に、段々と歩みよっているような気がするのです。

限られた時間との戦いを余儀なくされ、会社員なのに人目にさらされるという特殊な立場の中で、ある程度の割り切りと、ある程度のこまやかさ、又、ある程度の大胆さと、ある程度の自意識を必要とされるからかもしれません。

私自身、年々たくましくなっていてゆく自分が怖かったりするのですが…。

さて、その具体的な仕事の内容については、皆さんが日頃、目にしている通りなのですが、ニュースの原稿読みから、バラエティの進行、果てはCMまでと、本当に多岐にわたっています。もちろん、私がフジテレビだから、特にということはありますが、他局をみても、アナウンサーという枠組が、年々広がりつつあるのは事実です。私自身、その渦中に身をおいて、近頃考えるのは、「じゃあ、アナウンサーって一体何なのだろう」ということです。

かつて入社試験で「近頃アナウンサーがタレント化しているとよく言われるが、あなたにとって、タレントとアナウンサーはどう違いますか？」という質問がありました。この質問に正しい答えはありませんが、「信頼感を失わず、正しい日本語を心がけるという立場。そして、その場の空気を伝えるという役割が求められる」ということが違うのではな



早大心理学会年次大会にて（2001）

いかなと思っています。

今の私には、自分自身、耳の痛い話ですが、どんな場においても、このことを心がけることが、番組において、あるいは局においてのアナウンサーの果す役割なのだろうと改めて思うのです。

いずれにせよ、年々アナウンサー志望の学生の方が増えているのは、現役の私にとっては大変嬉しいことで、又、アナウンサーという職業は、若干の時間と、若干のプライバシーを犠牲にする覚悟があるならば、特に女性にとっては、多くの輝いている人々との出会いによって、男性に遜色なく、自分を磨いてゆける魅力的な仕事だとは思っています。

6. 講演「新しい時代における人間の問題」(第20回年次大会)

(会報第29号 1995)

本明 寛 (文・1941)

第20回早稲田大学心理学会において、本明寛先生によりおこなわれた講演「新しい時代における人間の問題」を、大学院修士課程の祖父江敬子氏に要約してもらいました。

要 約

本日はたくさんの方々におみえいただきまして、感謝に堪えません。しばらくぶりに大学に参りましたら、きれいな建物ができていて驚きました。ですが、建物の中にはビラなどが貼られていて早稲田大学文学部の伝統を感じます。

本講演の演題中にある「新しい時代」とは「対話」であると思います。話をする、聞くにかかわらず、人間と人間の対話の時代ではないでしょうか。私は7年前に健康心理学会を発足させまして、近年は国際健康心理学会設立への動きも出てきました。こうした学会の発足・運営の経過をみても、対話が果たす大きな役割を意識せざるをえません。

私は最新刊の『心理学序説』のなかで「心理学の目的は"Quality of Life"である」と書きました。Quality of Lifeとは「人生、生活の価値を高めること」。Qualityという語には「質」という意味がありますが、大きな辞典には「素晴らしさ」という訳語がついています。このQualityをここでは「価値」といたします。つまり、人生の価値というものを高めるために心理学があるのです。大阪・神戸の震災で被災した中学生の作文のなかに「みんな生きていてよかったということに気がついた」という文がありました。価値にはいろいろなものがありますが、人生・生活の価値、特にその健康の価値というものがいま一番求められているのではないのでしょうか。

人生・生活の価値を高める唯一の方法は、自分をよく見ること、そして自分を見るのと同じような見方で相手の人もよく見ることです。このことを「改革と創造」という言葉で表現したいと思います。自分のことを考えるということになると、この点を直さな

ければいけないとか、あの点をよくしなければならぬというように考えることになります。これは「改革」です。そして、自分自身をよくしていくためにはどうしたらいいかということになると「創造」という言葉が登場します。このように、新しい時代においては何よりもまず人間に目を向けるということが求められます。ですから、人間の問題を扱う心理学はあらゆる学問のなかで最も素晴らしい学問だといわれるようになっていかななくてはならないと思います。

新しい時代とはいったいどういう時代なのかを詳しく見ていきましょう。

①「主体性」

会社に従順な組織人として活躍し定年を迎えた人が、その後の人生をどのように生きていくのか分からなくなることがあります。そこで必要になるのが、主体性をもつこと、自分で自分の生き方を独自に考えていくことです。

②地位と権威」(「任務と役割」)

私事ですが、中学生の頃、自分の役割を果たすことの重要性を教えてくれた先生のことを思い出します。

③「集中と分散」

集中だけでなく、分散させること、すなわちひとつの見方に固執せずに多様な見方をすることも必要です。集中は時間を短縮し、分散は長時間を有しますが、分散には行為の準備過程があるので、行為に対する予想や目標が生じ、喜びと楽しさが伴うことになります。

④to be with you (ひととともに)

to have思想はもう終わったと言われていています。物を所有することによっては幸福はやって来ないのです。最近、対話のもつ治療的役割を重視するサイコオンコロジーという学問が注目されています。サイコオンコロジーの根底にあるのはto be with you思想です。

⑤「自己を生かす」

食べるために働くのではなく、自分を生かすために働くようにならなくてはなりません。

⑥「感性」

合理的に物事を理解する知性ではなく、ひとの気持ちをピンと感知することが重要です。

⑦「健康である」

時間を惜しんで動きまわれば良いという行動力の時代は終わりました。アメリカの企業では社員全員の健康を目標の一つとしています。

このほか、新しい時代を考える際に忘れてはならないのが改革と創造です。前述したように改革は自己点検・自己認知から始まりますが、あくまで結果ではなくプロセスを重視するものです。プロセスを重視するとはどのようなことなのでしょう。答えは創造というもののなかにあります。これまで創造は「何か新しい物をつくること」とみなされてきました。しかし今日では「創造とはものまねである」と考えられています。ノーベル科学医学賞受賞者の利根川博士も同様のことを言っていますし、企業で盛んに行われているベンチマーキングにもこの思想が息づいています。但し、このものまねとは物のまねではなくひとのまねです。素晴らしいと思われるひとあるいは成功している企業があったら、その業績や実績といった結果をまねるのではなく、プロセスをまねる、すなわちひとの生き方あるいは企業のやり方をよく見てそれをそっくりそのまま取り入れることが創造するということなのです。

マルティン・ブーバーの思想は、物の時代から人間の時代へ移り変わりつつある現代を説明するのに有効です。ブーバーによると、人間は我-汝の組み合わせによって成り立ち、そこから幸福が得られます。我は我だけでは決して存在せず、また、我-それすなわち私と物との組み合わせは人間ではないのです。そして、対話が、我-汝の組み合わせをもたらす手段であるとしています。この考えはさきほどのサイコオンコロジーにも生かされています。

近年、経済大国という代わりに生活大国という表現が用いられるようになりました。生活大国の目標は、ゆとりと生きがい、安全と安心、新しいライフスタイル、美しい環境などです。一人ひとりの人間が幸せになる、そのためには人間と人間との温かいこころの交流が必要であり、それが人間を感動させる唯一のものだと思います。早稲田大学心理学教室が今後も発展していくために、皆さんも是非、時々には大学に足を向けて、先生や学生さんと対話をし、新しい時代をつくっていただきたいと思っています。

ご静聴ありがとうございました。

7. 収穫の多かった第20回大会

(会報第29号 1995)

岩館憲幸（東海女子短大 一文・1959）

例年と異なり、第20回大会は5月開催で、シンポジウム「阪神大震災被災者の心理」の話題提供者を頼まれている、とかねてより島津貞一先生から知らされていたことも

あって、今回は是が非でも参加しなければと考えていた。その上大会案内状には、懇親会は心理学同窓会の形式をとるとあり、久しぶりに会えるやもしれぬ顔触れに一層期待が高まった。

会場を探すのに手間取り（思えば母校には10年以上のご無沙汰でした）かなり遅れての到着、臨床心理研究部会では島津先生の、淡々とした語り口ながら、生々しい被災体験のお話が既に始まっていた。配布されたレジュメや被災地地元新聞記事切り抜き、それにAPAの「災害-対応ネットワークフェースシート」等は、被災者の心のケア活動の詳細を伝え、またそのノウハウを教えてくれる貴重な資料であった。最後に、いざという時への備えや心構えについて、実際体験した人でなければすぐには思いつかないであろう具体的でキメ細やかな留意事項や提言を、まとめとして述べられた。たとえば真暗闇の中、ガラス破片の四散する屋内の移動にスリッパは欠かせないというのは、和室を寝室としている私にはとても考え及ばぬところであった。神戸女学院大の北村圭三先生はご自分も被災者のおひとりながら、心のケアにあたる専門チームの心理臨床担当リーダーとして、献身的な被災者への精神的サポートを行ってこられたその厳しい体験や、心理臨床の立場からの援助活動の在り方について、熱のこもった報告と提言をされ、参加者に大きな感銘を与えた。懇親会では、学術会議での報告を終えてようやく間に合ったという航空医学実験隊の垣本由紀子さん、雇用情報センターの鈴木弘美君、当日のマスコミ部会で報道局長の立場から話題提供させられた読売テレビの嶋内義明君、それに私岩館の4人が同級生として顔を揃え旧交を暖めることができた。かくしてこの日5月20日は本明寛先生の講演を始めとして誠に有ることの多い1日となった。

8. ときには学生にかえて

(会報第29号 1995)

打田茉莉 (宇都宮少年鑑別所 一文・1955)

久しく教室に来ていない者には迷路のような戸山校舎の廊下や階段を学生さんに案内されて会場に入った。元神戸少年鑑別所長で本明先生と同期の島津先生から阪神・淡路地震のホットな話を聞こうとする人々で教室は満員。用意された資料はすぐ品切れとなったが、学生さんがどんどんコピーを作って配ってくださった。島津先生の資料の他に、地震直後に米国心理学会から日本心理学会に送られて来た「災害対応ネットワーク」のプリントもあった。私は、今から30年前、米国で、大火で肉親を失った人達の心のケアに関する報告や、戦争下の子供のメンタルヘルスの論文等を目にしたときのことを思い出した。しかし、「効率」で計られて弱者が切り捨てられる米国社会を故戸川行男先生が批判していらした文を、高校生のころ、総合雑誌で読んだことも思い出した。

島津先生は、お話の始めに、世の中の日の当たらない所にいる人たち相手の仕事をし

てきたと、自己紹介された。続いて、神戸女学院の北村圭三先生は、西宮地区の被災者の心のケアの実践のようすを詳細にお話になった中で、地震の数日前にユングの光りと影についての講義をなさったこと、今回の震災は人間の自然征服のおごりと影を排除してむやみに光で照らそうとする人間への怒りであると話されたことも忘れられない。

次に、本明先生の「新しい時代における人間の問題」を聞き、やはり、大学は就職予備校ではなく、世の中をリードするところ、たまに帰って来て明日からの元気をもらって行くところであり続けてほしいと思った。

学部の1年目から心理学専攻で、1年から大学院までの心理学教室の人たちは皆が顔見知りという学生時代を過ごしたが、大懇親会場で手渡された参加者リストを見て、同窓生の職域の広さに感激もした。光だ影だという区分はなく、卒業年度でいえば50年以上の開きがあっても上も下もなく、わいわいとやれた会だった。

9. 臨床心理学研究会に参加して

(会報第29号 1995)

佐藤美和子 (大妻女子大学非常勤講師 教育・1985)

会は、阪神大震災で犠牲になった方々の御冥福を祈る黙祷で始まった。神戸在住の2人の先生方の生々しい体験談と臨床心理士としての活動に関する話は大変感慨深いものだった。

私自身、2月に被災された高齢者の話を聞くために淡路島へ行ったが、めちゃくちゃに崩れた家屋群と不自由な避難所生活を送っている被災者の方々を実際に目にただけで、身体の調子がおかしくなるくらいショックを受けた。神戸はさらに火災や都市型の被害の規模が大きく、崩れかけたビルの恐怖感はまだ続いているとのことだった。地震それ自体の恐怖感の表現も凄まじいものであったが、残された爪跡はさらに大きく、その被災体験は報道から受け取った以上に胸を苦しくさせるものだった。

個人的な体験談とともに大変興味深かったのは、北村先生による臨床心理士としての活動であった。仕事について思い立ったのは2週間後だったとおっしゃっていたが、心の相談センターを設立し、保健所と連携しての活動ぶりには本当に感服するばかりだった。その中で特に印象的だったのは、他府県のボランティアは必要時のみとし、被災体験を持つ人々で臨床心理チームを作っていたことだ。確かに、他からの援助は一時的であり、中には興味(研究)本意の人もいたようで、長期的に関わり、共感を必要とする心理臨床には難しい点多いだろう。しかし、それでよしとは言えないだろう。自らも被災している援助者も当然疲れ切っている。その人たちの心のケアは誰がするのだろうか。他府県の臨床心理士にできることはないのだろうか。大きな災害後の心のケアについて、考えていかなければならないことは非常に多いと感じた。

東京では大きな事件が相次ぎ、震災の話題がのぼらなくなっている。しかしまだ「震災後」は続いており、忘れてはならないこと、やらねばならないことはたくさんあると思う。

10. 初めて開かれた同窓懇親会

(会報第29号 1995)

午後6時から大隈庭園にある大隈ガーデンハウスにおいて、同窓懇親会が行なわれた。約200名の参加があった。

早稲田大学心理学会が音頭を取って開催する同窓懇親会は今回が初めてであり、予想以上に多くの参加者を得たことは大変喜ばしい。一方、同級生の参加を漠然と期待していた参加者の方に、その期待を裏切って失望を味わわせてしまった面もあった。それらのことも含め、いろいろな点で参加者の期待に添えきれなかったことで力量不足を痛感している

初めての試みであったが、これを機に卒業後初めてのクラス会を開くところも出てきて大変嬉しい。卒業後何等音沙汰なく過ぎゆく学年が多い一方、定期的に何らかの集まりを持っている学年もある。いずれにしても名簿整備が先決問題である。学年毎に取りまとめ役(キー・パーソン)がいてその整備にご苦労願えるなら非常に有り難い。同窓生の縦横のつながりを機能させることが出来る上に、卒業生からのいろいろな問い合わせにもお答えできよう。今後の問題として、この辺りのことをお含みおき願えればと思う。

懇親会の企画・実行には理事2名と木村裕会長の同級生の方々とお骨折り頂いた。感謝申し上げたい。また各界で活躍している卒業生から当日のビンゴゲームの景品として多くの品物を提供して頂いた。この場を借りて感謝すると共に人間関係という"生きた心理学"の中で活躍する多くの卒業生の力を感じた次第である。同窓懇親会を通して、現実と学問とのリンクを改めて追求する必要性があろうと感じたものである。

1. 瓦版発行記録一覧

号数	発行年	発行年月日	号数	発行年	発行年月日
第1号	平成12年	2000年9月	第19号	平成23年	2011年5月
第2号	平成14年	2002年3月	第20号	平成23年	2011年12月
第3号	平成14年	2002年10月	第21号	平成24年	2012年4月
第4号	平成15年	2003年5月	第22号	平成24年	2012年12月
第5号	平成15年	2003年9月	第23号	平成25年	2013年3月
第6号	平成16年	2004年3月	第24号	平成25年	2013年12月
第7号	平成17年	2005年1月	第25号	平成26年	2014年5月
第8号	平成17年	2005年3月	第26号	平成26年	2014年12月
第9号	平成17年	2005年12月	第27号	平成27年	2015年3月
第10号	平成18年	2006年10月	第28号	平成27年	2015年12月
第11号	平成19年	2007年3月	第29号	平成28年	2016年3月
第12号	平成19年	2007年10月	第30号	平成28年	2016年12月
第13号	平成20年	2008年3月	第31号	平成29年	2017年3月
第14号	平成20年	2008年11月	第32号	平成29年	2017年12月
第15号	平成21年	2009年3月	第33号	平成30年	2018年8月
第16号	平成21年	2009年12月	第34号	平成30年	2018年12月
第17号	平成22年	2010年4月	第35号	令和元年	2019年10月
第18号	平成23年	2011年1月			

2. 会員紹介 「定年退職に際しての感想」

瓦版第4号（2003）

春木 豊（一文・1956）

29歳の時に文学部の助手にさせていただいてから、41年の間早稲田大学で生活させていただきました。早稲田大学文学部に入学してからの年月を入れると、実に50年間の長きにわたって早稲田大学にいたことになります。これからあと何年生きるかわかりませんが、少なくとも半生以上は早稲田大学にいたことになります。今の時代には考えられないことです。しかし私のように体力や才能のない人間にとっては、早稲田大学という大きな傘に守られて生活できたことはまったく幸いなことでした。この恵みに答えるべく、自分としては人に後ろ指をさされないように、懸命に研究や教育に努めてきたつも

りですが、結果は皆様方の評価を待つほかありません。ただ早稲田大学に残らせていただいた者として心理学教室の卒業生の皆様方に対してお役に立つことができなかったという反省が私にはあります。

私は昭和27年に文学部の心理学専修に入学しました。当時は心理学など世間ではほとんど知られていなかったといえます。高校の担任の先生に報告に伺ったとき、「将来は古本屋の亭主なるしかないな」といわれたのを今でも記憶しています（今も見方によっては同じ状況かもしれませんが）。しかし大変ラッキーだったのは当時の心理学教室が実に活気に満ちていたことです。赤松先生の下に戸川、本明、三島、清原、新美、浅井の諸先生がスタッフで、大学院生や学部生の4年生がリーダーで、1年生から教室に出入りしていました。私も入学したとた



第6回年次大会（1981）

んにネズミのグループにスカウトされ（今のサークルの勧誘のようなものです）先輩の卒業論文の実験を手伝わされたものです。当時は今のようにサークルが少なくロールシャッハの研究グループとか、生理心理の研究グループといったように心理学教室の中で遊びながら、先輩から耳学問していたように思います。輪読会では4年生がリーダーで原書を読みました。太平洋戦争が終わり、滔滔とアメリカから新しい心理学が流入してきた時期で、卒業論文の時には当時芝公園にあったアメリカ文化センターに文献を見るために通いました。かなり最先端の情報が入っていたように思います。そのためと思いますが、私の修士論文は動物心理学年報に掲載されましたが、それがイギリスで追試されたのが私の唯一の自慢話です（Owen, S. 1963 J.Gen.Psychol）。

最近の心理学の流行振りを見るにつけ、隔世の感があります。ご同慶のいたりですが、危惧の念も禁じえません。カウンセラーになりたいということのようですが、そう簡単に考えてもらっては困りますといたいところですが。相談相手になりたいという心意気はよいとしても、カウンセリングやいわんやセラピーは泥んこになることを覚悟しなければならぬしんどい世界だと思えます。

心理学という名前は民衆に知られるようになったとしても、本当のところはまだ理解されていないといえます。たとえば最近あるテレビから取材を受けたとき、ある体操の効果を示したいということで、心理学的な尺度について、体操をやる前後の数値（ある人数の平均値）の違いを示したところ、それは主観的なことでだめで、生理的な結果でないと言ったのではないと言いました。この時につくづく心理学はまだ理解されていないと思えました。自然科学の歴史に比べると心理学はまだ100年そこそこの歴史ですから、これも致し方ないと思えます。カウンセリンは確かに将来のトレンドであると

いえませんが、科学としての心理学の基礎地固めぬきには、心理学の将来はあやういと思います。今後の心理学の発展を祈念せずに入られません。

3. 会員近況 「夢のまた夢」

(瓦版第11号 2007)

本間弘光 (一文・1947)

テレビで鳥越氏は子供に尋ねた。「怪我したことがある?」。子供「ある」。「どこを怪我した?」。「ころんで膝のところを」。「血が出た?」。「たっぷり出た」。「人間は血があるものだと分かったでしょう」。何気ない会話であるが、私にはこたえた。この年末に家内を亡くしたからである。家内は御住職から「死に顔がきれいで成仏の相です」と言われた。私から見ると「笑みを含んで観音様のように」であった。でも成仏って一体何なのだ。

息をしなくなると、もう人間ではなくなる。生きていたときの人間は、この世にはいなくなってしまう。ごろんとしてそこにあったとしても廃材と同じで、呼んでも、もう答えてはくれない。私の一生もやがて消えうせてしまうであろう。「浪花のことも夢のまた夢」という言葉も、単なる空事の知識ではなく、実感を伴ってせまってくる。

部屋には片づけようもなく、書籍が散らばっている。ゴミの山のような。この書籍が生きることがあるのだろうか。私がいなくなれば、利用者のいない単なるゴミの山にすぎない。生きている間にこの本を生かす余裕は、私にはもうない。それでもボケた私はこのゴミと格闘中である。

4. 卒業生紹介 「私の近況」

(瓦版第12号 2007)

松壽諦雲 (一文・1967)

早稲田の心理を卒業して、早36年、今は京都、大徳寺の山内の寺、龍泉庵(りょうせんあん)の住職をしております。大徳寺と云えば頓智漸で有名な一休さん、宮本武蔵に剣術の極意を教えたと言われる沢庵和尚(どちらも後からつけ加えられた漸)、それに一個人の財力でもって山門を修造し、天皇ならびに時の関白秀吉が下を通る山門の上閣に、雪駄履きの立像を置いたとし、不敬罪に問われ、切腹させられた、時の豪商で茶人でもあった“千の利休居士”でも大変有名な寺です。私の寺龍泉庵は500年前に建てられた寺ですが、明治維新の時の廃仏毀釈(仏教弾圧)により廃寺になった寺を、第二次世界大戦終了後(1951年頃)来日したアメリカ人、ルース婦人が外人の為のZen Instituteならびに禅センターとして再興した寺で、今でも世界中から坐禅をしに人々が

訪れてくれる少し毛色の変った寺です。

そんな事もあって私もこの13年間、毎年夏になるとスイスとドイツに出かけ、ヨーロッパのプロテスタントの人々に坐禅を教えて参りました。初めは2、3分坐っただけでもそもそ動き始めたり、苛々して喧嘩し出したり、泣き出したり、最後には逃げ出したりする人がおりました。キリスト教の神秘思想では「私が無となればそこを神がきて満たす」と云って、坐禅が無心になる一つの方法になりえますが、だいたい西洋では無念無想とか不思量（ふしりょう）とかいう事は“馬鹿”になる練習をするようなもので、まるっきり価値の見出せない事になりかねないとのことでした。しかし13年も辛抱した甲斐あって日本人以上に立派な姿勢でしっかり坐るようになり大変嬉しく思った次第です。坐禅では警策（けいさく）と云って1 m位の先の平たい櫛の棒で両肩を叩き、眠気を覚まし集中力を高めさせますが、叩かれる事になれていない西洋人には良くない事と思い、最初の10年間は警策を使用しませんでした。10年たって試みに使ってみたら、その音といい、肩のほろ苦い痛さといい大好評で、ほとんどの人が喜んで我先に受けてくれたのには驚きました。

残念な事に2006年と07年の夏はヨーロッパへは行きませんでした。実は私は1歳の時百日咳の予防注射をおしりに受けた際、その研究所で研究していた細菌が入り込み、1歳から2歳にかけ合計9回も麻酔をかけずに（当時は赤子に麻酔をかける技術がなかった為）メスを体の後ろからお腹の方からも入れた為、成長するに及んで股関節が変形しておりますが、それが過労と老化のせいで悪化して歩行が困難になった為です。その際、寺や自分の将来の事、後継者の件、寺の維持管理、今迄自分1人でやってきた仕事ができない焦り、手術をして人工関節にすべきかどうか、手術に対する恐怖等、とうとう夜ねむれなくなり“うつ病”のような状態になってしまいました。禅宗では「四百四病一時に起る」と申しますが、ありとあらゆる身体症状が出、このままでは死んでしまうと迄思いました。

その時感じた事は、若く健康な時に得られた智見はあまり役に立たなかった事、修行しようがしまいがうつ状態になりかねないという事、そのような状態になってみて初めてその苦しみが理解できるという事でした。私は2001年より東京赤坂のNPO法人“ジャパンウェルネス”（外科医・竹中文良先生が中心になって、アメリカの手法をとり入れて、癌患者さんを精神的にサポートする会）にて坐禅の指導をさせていただいていますが、そのような患者さんと初めて同じレベルでお話しが出来るようになったと思っております。私の足の方も出来るだけ手術をしない方向で、自転車と歩行による訓練で日常生活が出来るようになる迄回復いたしております。出来れば今年中にスイスとドイツに行き、また友人達と共に美しい野山を散策したいと思っております。皆様も是非京都へ一度お出かけ下さい。

5. 会員寄稿 「ワセダは永遠に私の故郷」

(瓦版第20号 2011)

森 松平 (一文・1958)

私は「杉の子」という日本料理屋の主人である。早大には調理学部はないにもかかわらず、早大卒の料理屋さんは全国に結構あるから不思議な話である。私は昭和33年度第一文学部心理学科に入学した。4年生の夏、中退して板前ワセダは修業の道に入った。後悔はしていないが、40歳代中頃まで「卒業するんだ」と復学の夢に悩まされた。私の下宿先は戸山町13番地で大学と至近距離にあった。水戸出身の柳内家に寄宿し、ここで初めて納豆の味を憶えた。昭和55年、私が「杉の子」を創業してから11年目、私の店に柳内のばあちゃんが訪ねてきて、「良かったね、自分の店が持てたんだから中退して良かったわ。卒業していたら、こんなになるとは限らないわよ」と私を励ましてくれた。これでやっと悪夢から解放されることになった。

全国の食べ物屋さん呼びかけ、平成12年に早大本部で「食べ物屋稲門会」を設立した。毎年全国各地で総会を開催し、情報交換、親睦を図っている。新宿「くらわんか」(安田校友)の折、講師の谷澤健一氏(元中日)が「早大野球部の集まりにおいて、自己紹介は卒業年次ではなく、必ず入学年次です」と語り、満場大爆笑となった。紆余曲折あって、私は昭和56年推選校友となり、卒業生名簿に記入されることとなった。

この頃は早大百周年記念募金の最中で、実行委員長の三木一郎先生と出会いがあり、後年、長男耕一郎(昭和62年、政治)の就職相談のご縁を持った。長女省子(平成元年、一文西洋史)も宮崎西高から進学し、無事卒業してくれて、有り難いと感謝している。小林源さん(昭和37年一文心理)は、昭和61年8月号早稲田学報「人・ひと・ヒト」の欄で、「あとは卒業を待つばかりである」と我が一家を紹介してくれた。入学以来の縁は今なお家族ぐるみで健在だ。

食べ物屋稲門会は大学公認の職域稲門会入りし、商議員も2名となった。現会長の安田氏と私である。125周年募金委員も兼ねて、募金活動を楽しんだ。記念ボトル麦焼酎「杜へ」も生まれ、1万本完売し、利益金は全額寄附し、全国でも宮崎県校友会はトップクラスの評価に寄与したようだ。寄附する喜びは早大が教えてくれた。心理学科は中退しても、経営哲学、料理哲学はしっかりと活かされている。「いかにして集客するか」、「いかにして良き人間関係をつくるか」、「いかにして人を喜ばせるか」。私は心理学教室で沢山の友人に恵まれた。故人と



なった河野昭君、藤田善太郎君は畏友であった。私の知らない事をいろいろと教えてくれた。ワセダは永遠に私の心の故郷である。

6. 追悼 本明 寛先生

(瓦版第23号 2013)

早稲田大学心理学教室の発展・充実に大きな貢献をされた本明寛先生が、昨年12月6日に逝去されました。94歳でした。3人の方に本明先生を偲んで思い出を語っていただきました。

1. 「本明先生を偲ぶ」

春木 豊 (一文・1956)

本明先生の最後を知る弟子として、この追悼記をしたためます。

先生は11月末に危篤状態になられ、それから1週間後の12月6日午前11時9分にご家族に看取られながら、永眠されました。享年94歳7ヶ月でいらっしゃいました。12月12日通夜、13日告別式がご自宅の近くの宝仙寺の斎場で行われ、約500人の方々のご参列がありました。墓地は日暮里の団子坂にある善性寺です(先代のご住職は先生の教え子です)。

最後のご様子ですが、渋谷のセントラル病院松壽に入院されておられました。危篤とお聞きして、駆けつけますが、すでに全く反応がない状態で寝ておられ、心拍や呼吸も弱い状態でした。しかし娘さんが「息を吸って～吐いて～」と声をかけると、驚いたことにかけて語に応じて、呼吸計が大きくふれるのでした。以前から頑張り屋の先生でしたが、最後まで頑張っているなあと思いました。また私が「春木です！」と耳元で声をかけたところ、じわーっと涙を流されたことには驚くと共に感動に包まれました。

先生は第二次世界大戦終了後の早稲田大学心理学教室の復興に、教室の創立者(昭和6年)の赤松保羅先生、戸川行男先生と共に中心的な存在として活躍されました。私が入学した昭和27年時には、三島二郎先生と共に助教授でしたが、心理学概論など教わりました。そのときのテキストは戸川行男・本明寛著「心理学要説」(金子書房、昭和25年)で、行動主義の考え方やゲシュタルト心理学の説を解説したもので、新入生の私は



第6回年次大会 (1981)

むさぼるように読んだことを思い出します。今見ても当時の心理学概論書としては、先端に行く優れたものだったといえます。

私は当時アメリカから入ってきた行動主義心理学こそ科学としての心理学だと思い（もちろんそれがすべてではなく、クラスメイトの岸田秀のようにフロイトの原著の読破に励んでいた者もいました）、1年生のときから、当時4年生で卒論実験をやっていた平井久先輩のネズミを使っての条件づけの実験を手伝いました。実験室は木造の小屋で、飼育室もありました。ネズミの飼育は当番制で、1年生の私は正月にも餌をやるために出かけたりしました。本明先生ご自身の指導はありませんでしたが、これらの施設は本明先生によって立てられたと聞きました。これからの心理学はこのような研究が必要だとの認識を持っておられたためと思います。

心理テストはやはり新しいものとして、当時早稲田大学心理学教室では盛んに研究されました。戸川先生は絵画統覚検査（TAT）、本明先生はロールシャッハテストで、いずれも早大版が作成されました。本明先生はその後もいろいろなテストを作られましたが、私も大学院の時代にダイヤモンド社の職場適応性テスト（DPI）の作成をお手伝いしました。その後織田正美先生が改良され、今でも使われているとのことですが、原版を作った1人として、誇らしく思います。

先生は明るい性格の方で、社交家でした。学会以外の人たちとのお付き合いも多かったといえます。お酒は強いというよりは、人を集めて、酒席を楽しむということでした。新宿や渋谷に行きつけの店があり、私も末席に連なることがしばしばでした。先生は基本的には朝5時に起きて原稿を書くということで、一般向けの本を書くことが趣味だったといえたかもしれません。マスコミにもよく登場されていました。しかし釣りだけは好まれていたようで、私も自動車の運転手として、多摩川や千葉の方の沼にお供したことがありました。

先生は基本的には負けず嫌いの頑張り屋さんであったといえます。今思えば先見の明があったといえますが、定年直後に健康心理学会を設立され、次々に国際会議など開催され、大変なご努力だったといえます。このことは上に述べたように、ご臨終まで続きました。

先生は大学や学会のみならず、官公庁でも、いろいろな役職を歴任されました。ここではいちいち述べませんが、このために紫綬褒章や瑞宝章など叙勲されています。

今思うに先生のようなタイプの教師は、これからは出ないことでしょう。学問以外にもさまざまなことをお教えいただいたことにいまさらながら感謝申し上げる次第です。衷心よりご冥福をお祈り申し上げます。

2. 「本明 寛先生と岡村喬生氏とブーケの話」

小林 源（一文・1962）

昭和35年か36年のことだったと思う。イタリアで開催された国際心理学会の折、本明

先生が出席された。帰国の集まりで語学の大切さを実感された旨話され、かつ欧米の出席者たちは複数語駆使することが珍しくないと言われたことが記憶に新しい。かくして我が本明先生は、現地滞在中、早稲田大学卒業後イタリア留学中の、いわば“広義の”教え子に（人を介して）出会い、そのお蔭でイタリア語を必要とする諸事をことごとく処理することができた、と伺った。

それから20年ほど経た、昭和55年か56年頃のこと、長年知遇を得てきた岡村喬生氏との話中で、私の出身学部、専攻、卒業論文とその指導教授名まで触れたところで、同氏が突如、私の話を遮るように、本明先生と言えばイタリアに来られた時、通訳にあたったのはオペラ留学中だった私だよ、奇縁だなアと告げられたのだ。この時の驚きは今なお忘れ難い。

ちなみに岡村氏は政経学部新聞学科をご卒業だが、実態は学生生活の大半をグリークラブ（部？）で過ごされた由で、その後イタリア留学で幾多のコンクールで優勝を重ね、ドイツへ渡り通算20年もの欧州を舞台の歌手生活をつづけられ、今や日本を代表するオペラ歌手、そして海外進出の草分け的存在としても知られる。母校の誇りでもある。

ところで同氏は毎年、上野文化会館小ホールでの「冬の旅」全曲演奏をライフワークとしておられるのだが、そのことのあった直近の同演奏会に、今で言うセレブで上品な中年婦人とそのお嬢さんが大きなブーケを抱え会場に現れていた。誰だろう、そのおふた方は、本明先生の奥様とお嬢さんだったのだ。岡村氏が殊の外喜ばれたのは申すまでもないが、20年をかけて経回った人の縁に私は思い入った。



岡村喬生氏（政経卒）

3. 「本明寛先生の思い出」

木村 裕（一文・1965）

先生の指導を受けたいと思い始めた頃、相談に乗って頂きたくて研究室に伺った折りに、自分の気持ちそのままに「でも、ひとの心にじかに触れようとするには自分には許されていないような気がしています」というようなことを言ってしまったと覚えています。聞きようによっては教を請う心理学徒にあるまじきとんでもない申し上げようだったと今は思うのですが、先生は学習の分野でやってみてはどうでしょうという意味のことを仰って下さいました。以来ずっとラットを用いる実験分野に関わり続けて参りました。

日本心理学会が発足してごくごく初期の頃の大会発表論文集はガリ版刷りのものだったと思います。そんないかにも手作りふうの資料集の中に、本明先生が、ラットにY迷路の学習を課してチョイス・ポイントでの電撃がラットの選択行動にどう影響するかを調べる実験を報告して居られるのを見つけた時の強い印象は今でも当時と同じように思

い起こします。動物実験を含めて広く行動を扱う基礎的実験研究の必要性を先生は強く感じて居られたとっております。

大学院生を終わる頃にある大学の非常勤講師の仕事をお世話下さいました。実験しかやっていなかった身には初めての心理学の講義の担当はとんでもなく緊張することでした。準備した講義の内容を見て頂きましたが、原稿の何ヵ所かにうっすらとアンダーラインを引いた状態で、これで良いよと手渡して下さいました。私はアンダーラインの意味をどう判断したら良いのか自分なりにあれこれ考えながら書き直しました。

それ以来この文章チェックのスタイルは他の全ての原稿についてもずっと変わらずに続きました。

大学院ゼミ生の全員が顔を見せる夕食会は飲み物も食べ物もいろいろそろって自由に遠慮のない発言のできる楽しい集まりでした。外食のこともあれば研究室でのこともありました。

今や私はすでに定年を迎えてしまっておりますが、先生から多くの事を学びました。ゼミ生や年ごとに変わっていく学生諸君とのおつき合いの仕方なども、ずーっとおそらくすべて先生をモデルにしようとしてきたんだなぁと感じております。

7. 訃報 浅井邦二先生

(瓦版第27号 2015)

石井康智 (一文・1970)

浅井邦二先生が2014年12月17日に逝去されました。(享年90歳)

先生は、早稲田大学文学部哲学科心理学専修を卒業され、人事院を経て、早稲田大学文学部、及び人間科学部で教員として学生の研究指導をされながら、大学・学部の要職に就いて大学運営にも深く関わりました。1987年の人間科学部開設に際し、準備室長として尽力し、初代人間科学部学部長として文学部から移籍しました。

早稲田大学心理学会設立にも尽力され、昭和40～50年代の学会活動を支えられました。生粋の早稲田マンとして、大学野球やラグビーのスポーツを欠かさず見られたように早稲田大学への熱いものを秘めておられていました。退職に際しても早稲田大学に教育基金として多額の寄付をされました。

実生活全般では、他者に迷惑をかけないで生きることを実践し、自分の最後のことまで考えて行動された先生でした。オーストリアの精神科医ヴィクトール・フランクルの言葉を座右の銘として実存的精神を実践する方でもありました。



第6回年次大会（1981）



第31回年次大会懇親会（2006）

8. 都市と故郷をつなぐ

（瓦版第27号 2015）

（株）まちづくり小浜 おばま観光局 取締役企画経営部長 朝倉昌也（一文・1979）

私は、広告代理店博報堂にて、各種企業の広告販促計画、商品開発や、企業のPR施設、文化・スポーツ施設、イベント・博覧会・展示会、全国の観光・まちづくりなどの事業開発に携わっていました。日本各地や世界各国を飛び回る日々。世界各国の良さを知れば知るほど、日本や田舎の素晴らしさにも魅せられていきました。生まれ故郷の父がなくなったのを契機に、15年くらい前から故郷のまちづくりも始めました。都市生活の快適さもいいのですが、今でいう地方創生をやらないと日本は辛くなるなあという思いの方が、加齢とともに増してきました。無謀にも48歳の時に早期退職をして、今では妻子の迷惑を顧みず関東に残したまま、単身故郷のまちづくりに没頭しています。

故郷とはOBAMAさんやNHK朝の連続TV小説「ちりとてちん」で少し有名になった福井県小浜市という人口3万人の小さな町。京阪神の方には少し知られていますが、関東の方にはどこにあるかもわからない町です。朝鮮半島の方から地図で日本を眺めてみてください。一番近いのは九州ですが、対馬海峡を、対馬暖流に乗って進むと京に入るのに便利なのが若狭湾だというのがわかります。この若狭湾の中央に小浜はあります。

3月2日は、小浜神宮寺・鶴ノ瀬の「お水送り」です。春を呼ぶ神事で、3月12日の奈良東大寺二月堂若狭井から汲み上げる「お水取り」の水を送ります。律令時代から小浜は大陸の仏教、文化、物資を運ぶシルクロードの港として、また淡路、志摩と共に御食国（みけつくに＝御食を貢ぐ国）として、京とつながっていました。小浜、京都、奈良、熊野が南北に一直線につながっているのもうなずけます。

京の台所、錦市場に行くと現代でも若狭ぐじ＝甘鯛、若狭がれい、小鯛の笹漬けなど小浜からの魚が並んでいます。これらは鯖とともに鯖街道によって運ばれ、京野菜と出会い和食文化が花開いたのです。

若狭湾はリアス式海岸ですので、たおやかな自然、海、夕日が美しいところです。古い町並みや国宝・重文も数多く、神仏混淆文化が残り、日本の塗り箸生産の大半を占める若狭塗箸など見所も豊富です。

私は、「温故創新」と呼んでいます。古き良き日本の文化や食を大切にしながら、現代に役に立つ「食、祭、文化、さとうみ体験」を企画開発し、都市と小浜の人をつなぐまちづくりを行っています。若狭塗箸研ぎ出し体験、鯖寿司づくり体験、鯖寿司食べ比べクーポン、語り部とまち歩き・小浜ぶらり、若狭の秘仏特別公開などが人気です。これからは日本を訪れる外国のお客様にも来ていただこうと考えています。

小浜の農林水産業や観光・まちづくりに携わる人々と連携し、自らも道の駅「若狭おばま」を経営したり、自社農園で果樹・野菜を育てながら、食や観光商品を協同開発し、都市の広告会社やメディアなどのネットワークを駆使して、情報発信を推進しています。日本のそして世界の人々に現代に生きる活力や癒しを提供し、地方から日本を元気にするお役に立てればと、残された人生を捧げることにしています。是非一度、若狭おばまにお出かけください。



秋のマスコミキャラバン（ラジオ出演）



小浜湾の夕景



神宮寺・鵜ノ瀬のお水送り



鯖寿司づくり体験



秋の精進料理づくり体験

9. 戸山キャンパス昨今「タイサンボク—卒業して50年— —文哲学科心理学専修1966年卒クラス会」

(瓦版第29号 2016)

西本武彦 (一文・1966)

文学部のスロープを登り切る少し手前、左側に大きなタイサンボクの樹がある。このタイサンボクは50年前の昭和41年（1966年）春、われわれが卒業するときに植樹したものである。文学部が本部キャンパスから戸山キャンパス新校舎に移転したのが昭和37年。新校舎の一期生だったが、記念会堂での卒業式はなかった。前年末から大学紛争が始まり、年明け1月から全学スト、2月本部封鎖、機動隊が導入されて200名以上の検挙者という騒然とした状況（いわゆる第一次早稲田闘争）の中で学園を巣立つことになった。

多士済々、同級生46名の結束は固く、文学部で学び心理学教室に籍をおいた4年間で植樹という形で残したいと思い、当時まだ殺風景なスロープ脇に何本かの苗木を植えた。植樹式の写真には故人となられた戸川行男先生（白髪の後ろ姿）や本明寛先生、富田正利先生の姿も写っている。当時の苗木はいま、幹の太さ40センチ以上、高さは7メートルを超えるまでに育った。春になると隣の桜と並んでスロープを彩っているが、その謂われを知る人はほとんどいない。

卒業してからもクラス会を、ほぼ毎年開いてきた。1人ももらすことなくクラス全員の名簿を常に更新しているのが自慢である。日米宇宙中継の最初の映像がケネディ大統領暗殺（昭和38年）、翌年は東京オリンピック、相撲は大鵬vs柏戸の世代だから、積み重ねた50年は立派な歴史であろう。



卒業時の植樹式（1966年3月）



現在のタイサンボク（2015年10月）

言われるまでもなく古稀をすぎて、そろそろ骨董品に近づいてきた。折しも大学主催のホームcomingデーの知らせが来たので、それに合わせてキャンパスツアーを兼ねたクラス会を開くことを決め、昨年10月18日（日）に集まった。当日は天気恵まれ、大隈ガーデンハウス3階のカフェテリアで旨いランチを食べ、エスカレーター付き高層校舎が立ち並ぶキャンパスに驚き、演劇博物館や中央図書館で母校の伝統を再認識して、昼の部を賑やかに過ごした。歓談しながら、時の話題のマンション杭打ち偽装が、いつのまにかインプラントの話になって大笑い。やはり歳はあらそえない。

10. エッセイ「アメリカ便り (1)」

(瓦版第29号 2016)

黒坂和彦 (一文・1986)

大学卒業後に約29年在籍した会社を退職して1年が過ぎました。この会社では、幸運にも34歳から約7年間、香港に駐在する機会に恵まれました。駐在している間の充実した日々が忘れられず、52歳の時に転職活動を開始し、縁があって、四国に本社のある450名程の会社に、2015年1月に転職しました。四国や東京での勤務を経て、2015年11月下旬にアメリカのニュージャージー州に赴任したばかりです。



自宅アパート (左) とオフィス (奥の茶色いビル)

オフィスは、同州のフォートリーという街にあり、住宅もほぼ隣接したアパートに決めました。徒歩5分もかからない距離です。フォートリーの人口は約4万人弱で、約2割が韓国系住民です。80年代は日本人の比率の方が多かったそうですが、様変わりしました。それでも、韓国系の飲食店が多い中、ラーメン、そば、すしといった日本食のレストランが点在しています。

車で15分ほどかかりますが、隣の街にはミツワ (旧ヤオハン) という大型の日系スーパーがあり、日本人が生活するには便利なところ。同州には、大型のショッピングモールも多く、ニューヨーク市のマンハッタンより、衣類やブランド品等の買物については、ゆっくり選ぶことができ、環境が良いと思います。また、風光明



クリスマス前後の
NY ロックフェラービル

媚なスポットも多いようです。暖かくなったら、訪ねてみる予定です（今朝は-11℃でまで冷え込みました）。

ニューヨーク市とフォートリーとは、ハドソン川を挟んで隣接しており、マンハッタンには、バスで乗って1時間程度で到着します。土日にはマンハッタンに出て、これまでミュージカルやスポーツ観戦（WWE）を楽しみました。メトロポリタンやグッゲンハイムといった世界的に有名な美術館もあり、これから時間をかけて観賞したいと考えています。色々な文化に触れることができる環境であり、有難く思っています。

先日、アメリカの最大の書店チェーンである、バーンズ・アンド・ノーブルに、ぶらりと寄ってみました。心理学（Psychology）関連の書籍の取り扱いが、非常に多いのに驚きました。日本の大型書店とは、配分が明らかに違います。書棚4つ程度が心理学の本で占められていました。私は池袋のジュンク堂や、高田馬場の芳林堂に良く行っておりました。前の会社で管理部門の仕事に携わっていたので、法律や会計の書棚を中心にすることが多く、参考になる書籍が数多くありました。

それに比べ、こちらでは、心理学の扱いの方が大きいです。法律関連の書籍の扱いは、心理学の1/4程度でしょうか。現在のアメリカでは、実用的な知識より、人間の心や行動についての関心が高いのではと感じました。ちなみに、哲学（Philosophy）の取り扱いも、心理学とほぼ同様でした。

前述のとおり、私は11月下旬に赴任しましたが、家内が12月下旬に渡米し、身の回りの世話をしてもらえる状況になりました。23歳と19歳の娘はもう大人ですから、日本に置いてきましたが、ライン等でコミュニケーションを図っています。現地に早くなじめるように、家内を色々なお店に連れてっています。総じて外食は量が多く、この前のランチは、2人で分けました。コーラも量が多いので、分けました。自動車やバスでの移動が多く、歩く機会が少なくなりましたので、健康維持のため、アパートにあるジムで、今のところ毎日汗をかいています。

それでは、次の機会に、こちらの様子を、また報告させていただきます。

11. クラス会便り「石井康智先生を囲む会報告—石井先生退職に寄せて—」

（瓦版第31号 2017）

川越博夫（一文・1981）

「石井さん、野球の試合で脚を骨折し入院中なので実験レポートが提出できません。」
「石井さん、就職は決まっているのに卒論の先生から『この卒論では…』と言われ途方にくれています。」「石井さん！…」

これらは1981年心理学教室卒業の学生達から石井康智先生へ寄せられた必死の相談で

した。そう、当時、石井先生は心理学教室の「助手石井さん」でありいわば学生のためのコンシェルジュだったのです。

その石井先生が2017年3月に心理学教室を退職されることを知り「81年卒で石井先生に感謝の気持ちを表したい」との気運が高まりました。何しろ石井さんにお世話にならなかった学生はひとりもいないのですから…。まず「会の企画」です。「石井さん退官につき皆で集いましょう」と元学生連中に発信したら「退官は公務員言葉だからおかしい」とか「同期会と混同するのは反対だ」とか流石、元早稲田の学生、いろいろと忌憚らない意見を出してきます。ワクワクです。

あーでもないこーでもないとやっているうちに2016年9月の土曜日の午後に大学で打ち合わせをすることになりました。そうしたら石井先生が「僕も参加してもいい?」。というわけで教授の謝恩会の企画にその当人の教授が参画することになりました。これってあり?失礼にならない?そこが石井先生たる所以ですね。

夜の参加は難しいという声に応え昼・夕方・夜という3部構成にしました。この企画は80年卒の方たちの企画のパクリです。(西本和恵先輩ごめんなさい)

特筆すべきは織田(旧姓石井)純子さんのその超人的な情報収集能力の発揮です。何しろ校友会への働きかけや石井先生からの卒業生名簿などから同期74名のうち71名に案内を発信することができたのです。さすが優等純ちゃん、我らの誇り!

11月12日(土)昼にまず13名で鶴巻町のそばやさんにてランチ。写真家の平尾秀明くんに卒業式謝恩会集合写真の再編集を披露していただきました。その後散策(何とコース設定、ガイドは石井先生です。)済松寺(家光創建)、矢来公園(杉田玄白出生地)、多聞院(松井須磨子墓碑)、宗参寺(山鹿素行の墓碑)、漱石公園(夏目漱石終焉の地)そして漱石生誕の牌。学び舎の近隣にこれほど多くの見学ポイントがあるとは。さらに夏目坂ふもとの小倉屋酒店。漱石の小説「硝子戸の中」に出てくるそうです。

続いて夕方の部、16時に文学部キャンパスに集合・合流し2015年9月に完成した新心理学教室へと向かいました。当時の心理学教室の面影はほとんどなくその近代的な設備の前にただただ時の流れを感じざるを得ませんでした。しかし皆んな還暦が近づいてい



昼の部・ランチ後の漱石公園(撮影 平尾秀明)



夜の部・フランス料理「ラ・フォンテーヌ」
(撮影 平尾秀明)

るということも忘れて学生の顔になっています。

いよいよ時刻は18時、弦巻町のレストランで夜の部の開始です。集まりました30名。司会は言わずと知れた吉原（旧姓石田）みゆきさん。野木崇宏君の乾杯で石井先生に「感謝とねぎらい」を伝えます。各人からも口々に石井先生に対しての感謝が述べられました。

「35年の時を経て逢うことができた元学生が半数いたが、それぞれの立場で苦勞してきても同じ釜の飯を食べた同窓が一気に学生時代の雰囲気をつくり渦が巻いた。「感謝感謝」と後に石井先生からメッセージを頂戴しました。フィナーレは何といても庄司珠緒くんの発声による「都の西北」の大合唱と石井先生へのエール、大変見事でした。井上聡君の歌唱誘導にも感謝です。

石井康智先生、我々が初めて聴講する石井先生の講義が先生の最終講義であり、またその日が先生の文学部入試の日と同じ2月25日であるということのを忘れることはないでしょう。石井先生の早稲田の α （アルファ）であり Ω （オメガ）の日です。

今はもうおりませんが私の伴侶の同期（旧姓・伊東桂）とともに石井康智先生にこれまでのご厚誼を深く感謝申し上げ、先生の今後の益々のご発展・ご活躍を心よりご祈念申し上げます。

12. 「泣いた赤おに」の物語を読んで連想したこと

（瓦版第32号 2017）

今泉岳雄（一文・1972）

筆者は今年の3月まで6年間、山形県にある小さな私立大学に教員として勤務していた。その縁で在任中に、山形県出身の童話作家浜田広介作の「泣いた赤おに」について臨床心理学の立場から話をしてほしいと広介童話研究会より依頼されたことがある。

筆者はこの作品のあらすじは知ってはいたが、きちんと原作を読んだこともなければ、浜田広介については何の知識も持っていなかった。しかし、「泣いた赤おに」がなぜ今でも広く読み継がれているかについては興味を持ったので、この機会に原作に触れてみようと思い依頼を引き受けた。その後原作を読み、浜田広介について調べる中で、「泣いた赤おに」は最初は「おにのさうだん」のタイトルで1933年に発表され、翌年には「鬼の涙」と改題・書き直され、その翌年から「泣いた赤おに」として話の大筋は残されつつ、広介が80歳（1973年）の生涯を閉じるまでに、何度となく細部が改変されながら雑誌や本に発表され続け、今日に至っていることを知った。広介の没後40年を過ぎた今も絵本や童話集の形で発刊は続いている。また、2011年には「泣いた赤おに」の物語を下敷きにした山崎貴と八木竜一合同監督による3DフルCGの「friends もののけ島のナキ」が映画化されている。さらに2015年にはNHK山形放送局制作の「私の青おに」

が放映されている。小学校の道徳の授業の資料としても1962年に文部省の「小学校道徳資料4 小学校道徳読み物利用指導I（低学年）」で取り上げられて以来、現在でも学校図書、光文書院、文溪堂、光村図書の副読本に入っており、対象も低学年から高学年に広がっている。道徳の資料としては簡略化されているが、2011年の教育出版の「小学校2年生」の教科書には全文が掲載されている。

このように、今でも「泣いた赤おに」は読み継がれており、多くの方が物語を知っていると思うが、以下に物語の概要を紹介してみたい。

村近くの山の崖に住んでいる若い赤鬼は、絵本に描いてあるような鬼とはだいぶ容姿が違っていたが、やはり目は大きくて頭には角の跡らしいとがったものがついていた。彼は、鬼だけでなく人間とも仲良くなりたいと思い、「自分がやさしい鬼であり、おいしいお茶やお菓子をを用意しているので遊びに来てほしい」と立札を出す。しかし、村人は恐れて遊びに来ないので、腹を立てて立札をへし折る。ちょうどその時に、はるか山奥から訪れた友人の青鬼は、その理由を知って、自分が村で暴れるからそれを追い払う役を赤鬼が行い、村人の信用を得るようにしたらどうだろうと提案する。赤鬼は躊躇するが、「なにか、ひとつのめほしいことをやり遂げるには、きっと、どこで、痛い思いか、損をしなくちゃならないさ。誰かが、犠牲に、身代わりに、なるのでなくちゃ、できないさ。」と、もの悲しげな目つきを見せて、青鬼は言い、実行する。その結果、青鬼を追い払った赤鬼を村人は信用し家へ遊びに訪れるようになり、赤鬼からお茶やお菓子をご馳走になる。しばらくして、赤鬼はその後青鬼が姿を見せないことが気になり、青鬼の家を訪ねてみる。しかし、青鬼の姿はなく、家の戸に「自分がいると君が村人に疑われるので旅に出るが、いつまでも君を忘れない。いつまでも君の友達 青鬼」と書いた張り紙がされていた。それを何度も読んで赤鬼は涙を流す。

この物語が一般読者にも教育の場においても読み継がれてきた理由として、「青鬼の自己を犠牲にした献身的な友情」(文部省小学校道徳の指導資料 第2集1965)が読者の心に訴えることがあげられる。しかし、筆者は作品を読み返してみて、それに対する違和感とともに、様々な連想が湧いてきた。

違和感のひとつは、青鬼の一方的な行為である。自分が悪役になる提案をし、それに従った赤鬼が村人に受け入れられるという目的を遂げると、赤鬼に予告なく貼り紙だけを残して姿を消してしまうのである。この行為が「自己を犠牲にした献身的な友情」として読者の感動を引き起こすのであろうが、本来友情とは双方向的なものであり、青鬼の一方的な行為は赤鬼の意思を確認しない独善的なものにも感じた。実際、道徳教育の行われる学校現場でも、高学年になるにつれ「これが本当の友情と言えるのか？」ということが議論のテーマになってきているようである。個の尊重が謳われるようになった戦後の民主主義教育においては当然起きる疑問であろう。

幼い子にとっては、青鬼が突然姿を消すことは、母親などの大事な人が突然いなくなるという対象喪失の不安を喚起するため、心に残る物語となっているのではないかと

感じた。この突然の別れによる物語の終結は、読者にその後の物語を様々に連想させる。実際にその後の物語がインターネットにいくつか示されている。この作品がその後の物語に自己を投影させやすいことも、この作品が今も広く読まれている一因になっているように思われる。

筆者がこの物語を読んで一番心が動いたのは、主人公が鬼としては頭に角の跡らしきものがある中途半端な容姿をし、人との関りを求めながらもなかなか受け入れられず悩んでいるところから物語が始まる点である。赤鬼の状況描写は、主に東北地方に伝承される「鬼の子小綱」の「片子（小綱）」を想起させる。「片子（小綱）」とは、宮城県の仙台市に伝わる話では、鬼と日本人女性の間に生まれた半人半鬼の子どもであり、自分の母親を鬼が島から人里に戻す手助けをしたものの、その姿から村人に受け入れられず、最後は自分の身体を犠牲にして鬼から親を守り自殺する話として残っている。この話から、「片子」とは、鬼の社会にも人の社会にも帰属できないことから、パークの言う「異質な諸社会の境域に立ち、いかなる社会にも十分に帰属できないマージナル・マン（周辺人・境界人）」と解釈できよう。現代のマージナル・マンの例としては、白人と黒人の混血児ムラトー、西洋人と東洋人の混血児ユーラシアンなどが挙げられる。

赤鬼も典型的な鬼とは容姿が異なり、青鬼のように村からはるか離れた山奥に住むのではなく、村近くの山に住んで村人と交流を持つことを願いながら受け入れてもらえぬ状況を考えると、容姿の点でも社会への帰属という点でも「マージナル・マン」として解釈できないであろうか。マージナル・マンは片子のように差別の対象となる。村人が赤鬼の家を訪れるようになっても、赤鬼だけが村人を接待する一方的な関係は、両者が差別を前提に関係を持つようになったとも考えられる。島崎藤村の「破戒」の中に、一般人は穢多の家を訪れても穢多の出す茶は飲まないで、穢多の方もあえて茶は出さない習慣が描かれているが、村人が赤鬼の茶や菓子を食べてあげるだけでギブアンドテークの関係が成り立ったとも考えられる。

このようなことを考えると、「泣いた赤おに」を、社会に受け入れられない、移民や外国人や帰国子女や障害児者や不登校児など、現代の日本の問題と関連付けて読むこともできよう。また、作者浜田広介自身が赤鬼に投影されているのではとの連想が広がってくる。

広介は米沢の旧制中学校に入学する時に家族から離れて母親の従妹のさよの世話になるが、その後すぐに両親が離婚し母親ときょうだいは家を去る。また、中学卒業後家族への想いを断ち切って上京し、後を追って上京したさよの援助を受けながら自分の身を立てるために精力を注ぐ。広介の娘である浜田留美は父の生涯について書いた著書（「父浜田広介の生涯 筑摩書房 1983年」）の中で、自己を生かすために家族との「断ち切りがたいきづな」を犠牲にして上京した哀しみを持つ父とこの作品を重ね、山形と東京の狭間で揺れる父を赤鬼の中に見ている。広介も以上の理由からマージナルな存在であったと言える。

それ以外に、父為助と関連付けることもできよう。為助は仕事を嫌い、家庭を顧ることがなかったために、広介の母やすと離婚に至る。その後、破産して村はずれの追兼橋（おっかなばし）に掘っ建て小屋を建てて1人で住んだことから、村人に「追兼橋の奇人」と呼ばれていたと言う。村里近くの山に住む赤鬼と重ならないであろうか。

「マージナル・マン」はライフ・サイクルの視点から青年期を指して使われることもある。大人の文化や価値観を疑うことなく信じていた子どもの時期を脱し、大人の文化や価値観への不信・反発が生じる、子ども文化と大人文化の境界にいる青年を、レヴィンは「マージナル・マン」と呼んだ。エリクソンが青年期を「社会的責任を一時的に免除あるいは猶予され自分のアイデンティティを迷いながら探し求めているモラトリアム（猶予）の時期」と捉えた概念に近いものがある。

これを踏まえて、赤鬼を「ライフ・サイクル」の視点から大人になる前の青年期にある「マージナル・マン」として見ることも可能ではなかろうか。赤鬼が自分の「アイデンティティ」を、鬼のために良いことをし、人間とも仲良く暮らす存在になることに求め、立札に自分がやさしい鬼であることを記す。しかし、立札を読んでも警戒する村人に腹を立て、立札を引き抜いて踏みつけて割るほどの怒りを見せる。このように自分は良き鬼であると語りながら、意に反することに簡単に腹を立て良き鬼像が破綻をきたすなど、まだ求める自我像が内在化されていない青年期の未熟さを示す。この未熟さは、鬼を警戒する村人に対して、ただ立札を立てて待つだけで、他の主体的な働きかけに思いが及ばない点にも認められる。「君にすまない。」と言いつつ、青鬼の提案にあっさり乗って偽りの演技を行ってしまう所にも、赤鬼の主体的自我は感じられない。村人との交流が生まれるようになって、先述したように赤鬼が村人に茶や菓子を一方的に供するだけである。村人が都合よくたかる描写であると感じる一方、赤鬼が村人と対等で双方向的な関係を結べない未熟さが窺える。

青鬼が姿を消し赤鬼は友達を失うことになるが、ここで初めて赤鬼は真の孤独に直面し、自己についての内省が始まるのではなかろうか。今までは良き鬼とは何かを深く考えることもなく、自分はやさしい鬼と思い込んでいた。しかし、青鬼に去られたことで、赤鬼は自己の生き方に直面せざるをえなかったのではないか。青鬼は自分にとってどういう存在であったのか、偽りの演技をして村人の信用を得たことはどうであったのか、これから村人とどうつきあっていけばよいのかなど、赤鬼に多くの内省が生じ、アイデンティティ獲得へむけての自分の模索が始まるのではなかろうか。この作品はその後の赤鬼と青鬼の物語が次々と連想される性格を有している。マージナルな存在であることは、被差別的な立場に追いやられるだけでなく、脱差別の方向を志向することにもつながる。どちらの世界にも属せないが、逆に2つの世界に深く関わりながら、どちらにも埋没しないことで、自己の輪郭を明確にし可能性を広げていく物語を紡ぎだせるように思える。

以上、赤鬼を中心にマージナル・マンの視点から書かせていただいた。青鬼について

は「トリックスター」や、広介がこの作品を書くきっかけになったと述べている「恵喜童子」の視点から考察したらおもしろいと思うが、長くなるので割愛し筆を置きたい。

13. 「ふつう」というもの

(瓦版第35号 2019)

横浜市戸塚地域療育センター 平野亜紀 (旧姓・近藤) (一文・1989)

私は現在、横浜市にある地域療育センターで、ソーシャルワーカーとして勤務しています。発達障害のこどもとご家族への相談支援に関わる一方で、地域の保育所や幼稚園、小学校を訪問するのが仕事です。あえて診断がつくほどではないにもかかわらず、指導者が手を焼いているこども達に出会うこともしばしばです。そこで、自分自身も子育てを経験した上で、発達障害をめぐり考えてきたことを、この機会に述べてみたいと思います。

発達の問題（あるいはその可能性）を指摘されて就学までに療育センターに相談に訪れるこどもの割合は、今や横浜市では担当地域における幼児人口の実に10%を越す勢いとなりました。子育てに悩む保護者や指導者にとって、発達障害の範疇でこども本人の特性に向き合う意味は、ありもしない「ふつう」という幻影の呪縛から開放され、関わり方を一から問い直すという発想の転換を可能にすることです。

かつて我が学び舎で教わった如く、育児書や母子手帳にある発達里程標は多様な発達の平均値に過ぎず、体重増加曲線も、「発語」や「両足ジャンプ」の獲得時期も、すべてその通りに育つこどもは1人もいません。しかしこの少子化の時代における核家族の子育ては、不安解消のためにはまずネット検索です。先日みかけたのですが、泣き続ける赤ちゃんを抱っこしたパパが、あやし方をスマホで調べ次々と試していく、TwitterのCMがありました。泣きやませる方法くらいなら構いませんが、ネット情報に提示される「ふつう」の発達と毎日ならめっこした挙句、些細なこと（たとえば、授乳の際にこどもと目が合わないなど）から我が子の発達に親が不安を訴える時期は、どんどん低年齢化している印象です。気にすればするほど、「ふつう」との乖離は大きく見えるものです。

「特性に合った支援」と口で言うのは簡単ですが、血を分けた我が子や、隣のクラスと比較されがちな自分の受け持ちを目の前にすると、案外難しいものではないでしょうか。自らの規準で物事を定めているテリトリーにおいて、規準に合わない行動は許しがたい。アンガーマネジメント研修などを聞いてみると、怒りを覚えるのは、自分の大事にしているこだわりに、他者の行為が抵触することがそもそもの発端だそうです。だから、よそで赤の他人がしていることなら流せることでも、家の中では片づけられない家人のだらしなさが許せなかったり、自分の話にいちいち茶々を入れてくる受け持ちの生徒に

苛立ったりする訳です。

我が家の息子は4月から某国立大学の修士課程の2年生になりますが、小さい頃から片付けが本当に苦手です。頼んだことや注意したことも、すぐに忘れてしまいます。部屋の中や机の上は常に混沌としており、出しっぱなしの物をたどれば、どのような行動をしたのか手に取るようにバレる奴です。

床に、プリントをばらまいてもよい四角いゾーンを規定する養生テープを貼ったり、机の備え付け棚に科目名を貼って分類を促してみましたが、困り感のない本人の動機づけにはならず。畳んで渡した洗濯物の山は、さらに種類別の小山に積み直しておくものの、クローゼットに仕舞うまでの経過日数は母子の我慢比べ（いつも根負けする私）。それでも今は、互いの距離感をわきまえ、折り合いのつくラインで生活しています。彼の洗濯物は自室から共有スペースへと雪崩れてくることはありませんし、私が用事を頼みたい時は、ちょうどその場所を通りかかったタイミングを逃さなければよい。つまり、電気を消してほしかったら、スイッチの前を通り過ぎる時に声をかけるべきで、一度にいくつも頼んでイライラをためることは不要なのです。「昨夜、玄関の電気がつけっ放しだったよ」と言ったら、「ガスの火は消せたのに、惜しかったね」と自分で申します。クシャクシャの笑顔でグッジョブポーズをされると、それ以上強く言う気も失せようというものです。

地域においても、（多少、暗黙の了解が苦手な人々にとって）暮らしやすい環境を維持していくことが求められます。たとえば、交通標識や駅の表示、電車の中の工夫などを見てみましょう。誰もが知っている公共の場でのルールをできるだけわかりやすく示し、それを守るよう促しています。次の電車を待つのに「3列にお並びください」と繰り返しアナウンスされることよりホーム上の黄色の3列ラインの方が、雄弁に並ぶ行動を促進します。電車の7人掛けの座席も、7人分の凹みがシートに設定されていれば、だれもが自ずとその通りに座るでしょう。言葉が伝わらないから視覚的に示すのではなく、ガミガミ言われることなくその気になる仕組みと考えれば、「構造化」とは発達障害への支援に限定されたことではないのです。こうあるべき、こうするべきと自分本位で思い込まず、相手の特性や自分のこだわり気づいて折り合うポイントを、それぞれが探してみたらいかがでしょう。

発達障害支援の裾野の広がり、今や専門病院への受診率、診断率の増大を招いています。しかし、個性と障害のグレーゾーンにいる子どもたちが暮らしやすくなるための支援のノウハウが、子育ての現場をはじめとして世間にごく自然に浸透していくことが、これからの目指すべき方向なのではないか、と考えるのです。

第 4 章

早稲田大学心理学会
会 則

第1章 総則

(名称)

第1条 この会は、早稲田大学心理学会という。

(事務所)

第2条 この会は、事務所を早稲田大学構内におく。

(目的)

第3条 この会は、早稲田大学を母体とする心理学の発展ならびに会員相互の親睦を図ることを目的とする。

(事業)

第4条 この会は、前条の目的を達成するために、次の事業を行う。

- (1) 年次大会の開催
- (2) 各種研究会の推進
- (3) 機関誌等の発行
- (4) 卒業生名簿の管理ならびに発行
- (5) その他、目的達成に必要な事業

第2章 会員

(種別)

第5条 この会の会員は、次の3種とする。

- (1) 正会員 この会の目的に賛同して入会した早稲田大学心理学関係の校友または同教員（現・元）もしくはそれらに準ずる者
- (2) 名誉会員 この会に対する功勞により、総会において推挙された者
- (3) 賛助会員 この会に対する財政的援助を行うために入会した個人または法人

(会費および入退会等)

- 第6条
- 1 正会員ならびに賛助会員は、それぞれについて総会で定めた会費を年度ごとに納入しなければならない。
 - 2 正会員または賛助会員の入会手続きは、理事会の承認を得て、入会申込書と会費を受理されたことによって完了する。
 - 3 正会員または賛助会員が4年以上に亘って会費を納入しないとき及び死亡したときは、退会したものとみなす。
 - 4 会員がこの会の名誉をいぢるしく汚したときは、総会の議決によってその者を除名することができる。
 - 5 退会し、また一度除名された者が既に納入した会費その他の金品は、これを返還しない。

第3章 役員

(種別および選任方法)

第7条 この会に次の役員をおく。

- (1) 会長 1名
 - (2) 副会長 3名以内
 - (3) 理事 若干名（正副会長を含む）
 - (4) 監事 2名
- 2 役員は、総会において正会員の中から互選する。ただし、任期中の役員に欠員を生じたときは、理事会の議決によって補欠役員を選任することができる。
- 3 会長の指名により、理事の内若干名を常務理事とする。
- 4 理事および監事は、相互に兼ねることができない。

(職務)

第8条 会長は、この会を代表し、会務を総括する。

- 2 副会長は、会長を補佐し、会長に事故があるときは副会長の内1名が会長の職務を代行する。
- 3 理事は、理事会を構成し、会務の執行を決定する。
- 4 常務理事は、常務を処理する。
- 5 監事は、会計を監査する。

(任期)

- 第9条 役員の任期は2年とする。ただし、補欠役員の任期は、前任者の任期期間とする。
- 2 役員は再任されることができる。
 - 3 役員の任期が満了したときも、後任者が就任するまでは、前任者がその職務を行う。

第4章 会 議

(種別)

- 第10条 この会の会議は、理事会と総会の2種とする。

(理事会)

- 第11条 理事会は、会長が召集し、その議長となって、次の事項について議決する。
- (1) 事業計画および予算の決定
 - (2) 事業報告および決算の決定
 - (3) その他、会長が必要と認めた事項
- 2 理事会が議決した事項は、これを総会に報告しなければならない。

(総会)

- 第12条 総会は、正会員をもって構成し、少なくとも年1回会長が召集する。
- 2 総会の議長は、開催の都度、出席会員の中から互選する。
 - 3 総会は、次の事項について議決する。
 - (1) 理事会が報告した事項の承認
 - (2) 役員を選任
 - (3) 会費の決定または改訂
 - (4) 会則の変更
 - (5) その他、理事会が必要と認めた事項
 - 4 総会は、理事会が議決した事項の修正または否認を議決することができる。

(議決権の委任)

- 第13条 理事が理事会に出席できないときは、出席にかえて、他の理事に議決権を委任することができる。

(定足数)

- 第14条 理事会は、理事の4分の1以上が出席しなければ開催することが出来ない。ただし、前条にもとづく委任状提出者の数は定足数に算入する。

(議決)

- 第15条 会議の議事は、出席した構成員の過半数の同意によって決し、可否同数のときは議長の決するところによる。

(書面による表決)

- 第16条 会長は緊急と認める場合、会議の開催に代えて書面により会員または理事の賛否を求めることができる。
- 2 前項の場合、賛否の回答をしなかった者は、会長に白紙委任したものとして表決する。

第5章 資産・会計

(資産)

- 集17条 この会の資産は、次により構成される。
- (1) 会費
 - (2) 寄付金品
 - (3) 事業に伴う収入
 - (4) 資産より生ずる収入
 - (5) その他の収入
- 2 資産は、会長が管理し、その方法は理事会が定める。

(監査)

- 集18条 この会の決算は、年度終了時に、その年度末における財産目録とともに監事の監査に付さなければならない。

- 第19条 この会の会計年度は、毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。

あとかき

この度、早稲田大学心理学会が解散することになり記念誌発行が企画されました。

学会活動はこれまで66年間に及びました。その間、心理学の知識を様々な形で提供し続け、会員との交流の場を設けてきました。そしてその役割をいま終えることになりました。

2000年前後からの約20年間、学会活動を支え、今回記念誌作成にも寄与下さった理事の方々に一言お礼を申し上げたいと思います。

ここに至るまで大所高所から見守って下さった大先輩の小林源氏、木村裕氏、柴田良一氏。2000年からボランティアでHPを作成し続けてくださった市原 信氏。

事務局として宣伝や広報のため、瓦版の作成、講演等のテープ起こし及び大会や教養講座の手書き立て看板の作成を一手に引き受けてくださった中村誠氏。財務管理を担い会議進行、外部との連絡、記念誌の編集見本の作成等で力を発揮して下さいました朝岡美好氏。

教え子とのネットワークで瓦版の執筆者を推薦して下さった乙部和昭氏。この20年間に入会し研究者と理事の二つをこなしながら計画立案に貢献して下さいました押山千秋氏。途中から海外勤務になりながらも、海外から連載記事を送って下さった黒坂和彦氏。黒坂氏を推薦し、参会者へのアンケート調査とまとめをして下さった矢野裕之氏。建設的な意見を出して下さい、2020年のコロナ禍の中Web会議開催にも素早く対応して下さいました河合美子氏。監査役として長年じっと見守って下さった鈴木晶夫氏と松本芳之氏。最後に記念誌取りまとめの労を取って下さった谷口幸一氏、吉川政夫氏、中村誠氏。

学会を立上げ、多様な活動を展開してこられたのも心理学教室や会員の皆様、また多くの諸先輩方の力によるものと感謝申し上げます、ここに一定の区切りをつけて閉会できたことにお礼申し上げます次第です。

記念誌編集委員会代表 石井康智

【記念誌編集委員】

朝岡美好、市原 信、押山千秋、乙部和昭、河合美子
吉川政夫、木村 裕、黒坂和彦、小林 源、柴田良一
鈴木晶夫、中村 誠、松本芳之、谷口幸一、矢野裕之

早稲田大学心理学会記念誌 ～66年をふりかえって～

2021年3月31日 発行

編 集	早稲田大学心理学会記念誌編集委員会
発行者	早稲田大学心理学会 〒162-8644 東京都新宿区戸山1-24-1 早稲田大学文学学術院心理学教室内
D T P	万福株式会社
印刷・製本	三美印刷株式会社
表紙デザイン	神谷昌良
